

箱崎 25

— 箱崎遺跡第25・32・42次調査 —
福岡市埋蔵文化財調査報告書第896集

2006

福岡市教育委員会

HAKO ZAKI

箱崎 25

— 箱崎遺跡第25・32・42次調査 —
福岡市埋蔵文化財調査報告書第896集



| 調査番号 | 遺跡略号 |
|------|--------|
| 0104 | HKZ-25 |
| 0221 | HKZ-32 |
| 0351 | HKZ-42 |

2006

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから東アジアとの対外交渉の窓口として発展してきました。このような環境のもとに数多くの埋蔵文化財が残されており、本市におきましてはこの保護と活用に努めているところであります。

本書は東区箱崎3丁目における都市計画道路箱崎阿恵線建設及び斎場建設に伴い実施した箱崎遺跡第25・32・42次調査の記録です。調査の結果、多量の輸入陶磁器の出土を含め、中世箱崎の歴史を知るうえで多くの貴重な資料を得ることができました。

本書が市民の皆様の埋蔵文化財保護のご理解の一助として、また研究資料として役立てば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり土木局をはじめとする多くの方々のご理解、ご協力を賜りましたことに対し、心より感謝の意を表する次第です。

平成18年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 植木とみ子

例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が都市計画道路箱崎阿恵線建設に伴い、東区箱崎3丁目地内において実施した箱崎遺跡第25・32・42次調査の報告書である。
2. 本書で報告する各調査の調査番号、遺跡略号は以下のとおりである

| | 調査番号 | 遺跡略号 |
|--------|------|--------|
| 第25次調査 | 0104 | HKZ-25 |
| 第32次調査 | 0224 | HKZ-32 |
| 第42次調査 | 0351 | HKZ-42 |

3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は第25次調査を杉山富雄、第32次調査を中村啓太郎、高木誠、福田匡朗、上田龍児、渡辺誠、安藤史郎、第42次調査を赤坂亨が行った。
4. 本書に掲載した遺物実測図の作成は調査担当者の他、今井孝博、丸尾弘介が行った。
5. 本書に掲載した挿図の製図は調査担当者の他、林由紀子が行った。
6. 本書に掲載した遺構、遺物写真の撮影は調査担当者が行った。
7. 本書で記述する陶磁器の分類は以下の文献を参考とした。
横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」
九州歴史資料館研究論集4
太宰府市教育委員会「大宰府条坊跡XV」太宰府市の文化財第49集
8. 本調査に関わる記録、遺物等は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管される予定である。
9. 本書の執筆はⅢを杉山が、Ⅴを赤坂が、他を中村が行った。
10. 付論として九州大学大学院比較社会文化研究院 中橋孝博教授による出土人骨に関する分析を掲載している。
11. 本書の編集は杉山、赤坂の協力を得て中村が行った。

本文目次

| | | |
|------|-------------------------------|----|
| I. | はじめに | 1 |
| 1. | 調査に至る経過 | 1 |
| 2. | 調査体制 | 1 |
| II. | 位置と環境 | 2 |
| III. | 第25次調査 | 7 |
| 1. | 調査概要 | 7 |
| 2. | 調査遺構と出土遺物 | 8 |
| 3. | 小結 | 11 |
| IV. | 第32次調査 | 17 |
| 1. | 調査概要 | 17 |
| 2. | A区 | 17 |
| 3. | B区 | 27 |
| 4. | まとめ | 64 |
| 付論 | 福岡市箱崎遺跡32次調査出土世人骨（九州大学 中橋 孝博） | 66 |
| V. | 第42次調査 | 75 |
| 1. | 調査概要 | 75 |
| 2. | 調査区東半 | 76 |
| 3. | 調査区西半 | 79 |
| 4. | まとめ | 88 |

挿図目次

| | | |
|------|--------------------------|----|
| 第1図 | 周辺遺跡分布図 (1/25,000) | 3 |
| 第2図 | 箱崎遺跡調査区位置図 (1/5,000) | 4 |
| 第3図 | 第25・32・42次調査区位置図 (1/600) | 6 |
| 第4図 | 第25次調査地点 (1/400) | 7 |
| 第5図 | 第25次地点1区全体図 (1/100) | 8 |
| 第6図 | 第25次地点2区全体図 (1/100) | 8 |
| 第7図 | 遺構4・出土遺物 (1/40・1/1) | 9 |
| 第8図 | 遺構6・出土遺物 (1/40・1/1) | 9 |
| 第9図 | 遺構10出土遺物 (1/1) | 9 |
| 第10図 | 遺構27・出土遺物 (1/40・1/30) | 10 |
| 第11図 | 遺構47・出土遺物 (1/40・1/30) | 10 |
| 第12図 | 25次地点出土土錐 (1/2) | 10 |
| 第13図 | 第25次調査地点全景 (東から) | 11 |
| 第14図 | 1区全景 (西から) | 12 |
| 第15図 | 2区土層 (南から) | 12 |
| 第16図 | 遺構27 (南から) | 12 |

| | | |
|------|---|----|
| 第17図 | 2区全景（西から） | 13 |
| 第18図 | 遺構6（北から） | 13 |
| 第19図 | A区遺構配置図（1/100） | 18 |
| 第20図 | A区北壁及び東壁土層図（1/50） | 19 |
| 第21図 | SB166実測図（1/80） | 20 |
| 第22図 | SK2・4・5・6・9・13・95・109実測図（1/40） | 21 |
| 第23図 | SK135・151・154・164実測図（1/40） | 22 |
| 第24図 | SK4・5・6・151・164出土遺物実測図（1/3） | 23 |
| 第25図 | B区遺構配置図（1/100） | 25 |
| 第26図 | B区第1・2面遺構配置図（1/200） | 26 |
| 第27図 | B区第3面遺構配置図（1/200） | 27 |
| 第28図 | B区東壁土層図（1/50） | 28 |
| 第29図 | B区西壁土層図（1/50） | 29 |
| 第30図 | B区北壁土層図（1/50） | 30 |
| 第31図 | B区南壁土層図（1/50） | 31 |
| 第32図 | SB697実測図（1/80） | 32 |
| 第33図 | SE434及び出土遺物実測図（1/40・1/3） | 34 |
| 第34図 | SE435及び出土遺物実測図（1/40・1/3） | 35 |
| 第35図 | SE438実測図（1/40） | 36 |
| 第36図 | SE438出土遺物実測図（1/1・1/3） | 37 |
| 第37図 | SE439実測図（1/40） | 38 |
| 第38図 | SE439出土遺物実測図（1/3） | 39 |
| 第39図 | SE477及び出土遺物実測図（1/40・1/3） | 40 |
| 第40図 | SE477出土遺物実測図（1/3） | 41 |
| 第41図 | SE478実測図（1/40） | 42 |
| 第42図 | SE478出土遺物実測図（1/3） | 43 |
| 第43図 | SK273・216・218・221・222・223・228・230・231実測図（1/20・1/40） | 45 |
| 第44図 | SK216・218・221・222・223・228・230・231出土遺物実測図（1/3） | 46 |
| 第45図 | SK240・252・275・282・285・366実測図（1/40） | 47 |
| 第46図 | SK240・252・275・282出土遺物実測図（1/1・1/3） | 48 |
| 第47図 | SK436・437・458・462・475実測図（1/40） | 49 |
| 第48図 | SK533・534・537・570・571実測図（1/40） | 50 |
| 第49図 | SK436・437・458出土遺物実測図（1/1・1/3） | 51 |
| 第50図 | SK462・475・534・537・570出土遺物実測図（1/3） | 52 |
| 第51図 | SK591・613・618・628実測図（1/40） | 53 |
| 第52図 | SK591・613・618・628出土遺物実測図（1/3） | 54 |
| 第53図 | SK出土遺物実測図（1/3） | 55 |
| 第54図 | SD202・271・693実測図（1/40） | 57 |
| 第55図 | SD271・693出土遺物実測図（1/3） | 58 |
| 第56図 | SP出土遺物（1/3） | 59 |

| | | |
|------|---|----|
| 第57図 | その他の出土遺物① (1/3) | 60 |
| 第58図 | その他の出土遺物② (1/3) | 61 |
| 第59図 | その他の出土遺物③ (1/3) | 62 |
| 第60図 | その他の出土遺物④ (1/1) | 63 |
| 第61図 | A 区全景 (西から) | 67 |
| 第62図 | 北壁土層 | 67 |
| 第63図 | 東壁土層 | 67 |
| 第64図 | 建物群 (西から) | 68 |
| 第65図 | SK 2 (北から) | 68 |
| 第66図 | SK 4 (南から) | 68 |
| 第67図 | SK 5 (南から) | 68 |
| 第68図 | SK 6 (東から) | 68 |
| 第69図 | SK151 (東から) | 68 |
| 第70図 | B 区 2 面全景 (西から) | 69 |
| 第71図 | B 区 3 面全景 (西から) | 69 |
| 第72図 | 北側拡張区 1 面 (東から) | 70 |
| 第73図 | 北側拡張区 3 面 (東から) | 70 |
| 第74図 | 北壁土層 | 70 |
| 第75図 | 東壁土層 | 70 |
| 第76図 | 焼土面 | 71 |
| 第77図 | SB697 (西から) | 71 |
| 第78図 | SE434 (北から) | 71 |
| 第79図 | SE435 (西から) | 71 |
| 第80図 | SE438 (西から) | 71 |
| 第81図 | SE439 (西から) | 71 |
| 第82図 | SE478 (西から) | 72 |
| 第83図 | SK273 (南から) | 72 |
| 第84図 | SK216 (北から) | 72 |
| 第85図 | SK221 (北から) | 72 |
| 第86図 | SK222・223 (西から) | 72 |
| 第87図 | SK230 (西から) | 72 |
| 第88図 | SK240 (西から) | 73 |
| 第89図 | SK436 (東から) | 73 |
| 第90図 | SK618 (北西から) | 73 |
| 第91図 | SK628 (北から) | 73 |
| 第92図 | SD271 (東から) | 73 |
| 第93図 | SD271遺物出土状況 (南から) | 73 |
| 第94図 | 出土遺物 | 74 |
| 第95図 | 箱崎遺跡第42次調査 (勝樂寺・箱崎阿恵線) 調査区全体図 (1/160) | 76 |
| 第96図 | 阿恵線調査区東半遺構配置図 (1/80) | 77 |

| | | |
|-------|--|----|
| 第97図 | SE-05実測図（1/40）およびSE-05・P-214・P-216出土遺物実測図（1/3） | 78 |
| 第98図 | 箱崎阿恵線調査区西半第1面・第2面造構配置図（1/80） | 79 |
| 第99図 | SX-13実測図（1/20）および出土遺物実測図（1/3） | 80 |
| 第100図 | SX-19実測図（1/60） | 81 |
| 第101図 | SX-18・19上層実測図およびSX-18上層疊群出土遺物実測図（1/3）（1/40） | 82 |
| 第102図 | SX-18実測図（1/40） | 83 |
| 第103図 | SX-18・19出土遺物実測図（1/3） | 84 |
| 第104図 | SK-22実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3） | 85 |
| 第105図 | SK-26実測図（1/40） | 85 |
| 第106図 | SK-27実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3） | 86 |
| 第107図 | SK-28実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3） | 86 |
| 第108図 | P-253・255・275・283・304実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3） | 87 |
| 第109図 | 箱崎遺跡第42次調査 東半全景（東から） | 90 |
| 第110図 | SE-05（東から） | 90 |
| 第111図 | 箱崎遺跡第42次調査 西半第1面全景（東から） | 91 |
| 第112図 | SX-18上層（北から） | 91 |
| 第113図 | SX-13および石敷遺構全景（北から） | 92 |
| 第114図 | SX-13（北から） | 92 |
| 第115図 | 箱崎遺跡第42次調査 西半第2面全景（東から） | 93 |
| 第116図 | SX-19（北から） | 93 |
| 第117図 | SX-18（北から） | 94 |
| 第118図 | SK-22（南から） | 94 |

I. はじめに

1. 調査に至る経過

第25・32次調査

平成12年11月14日、福岡市土木局芦崎連続立体開発事務所より福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課へ都市計画道路箱崎阿志線道路整備事業に伴う福岡市東区箱崎地内における埋蔵文化財の事前審査について依頼がなされた。これを受けた埋蔵文化財課では事業計画地が東側では周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡に含まれ、西側では元寇防塁の推定ラインにかかることから試掘調査が必要であるとの判断がなされた。平成12年11月15・21日、平成13年1月21日に試掘調査を行い、その結果、遺構が検出された。この成果をもとに協議を重ねたが現状での設計変更は不可能であり、恒久的施設であることから、調査が必要であるとの回答がなされた。平成13年3月19日、芦崎連続立体開発事務所より発掘調査の依頼がなされ、先行する下水道工事部分と本道部分を分割して調査を行うこととなった。調査は下水道部分が第25次調査として平成13年4月16日より開始し、同年4月26日に終了、本道部分が第32次調査として平成14年4月22日より開始し、同年9月20日に終了した。

第42次調査

平成15年7月18日、臨濟宗勝樂寺より斎場建設に伴う箱崎3丁目2379-1における埋蔵文化財の有無について照会がなされた。これを受けた埋蔵文化財課では試掘調査を行い、遺構が検出された。この成果をもとに協議を重ねたが現状での設計変更は不可能であり、調査が必要であるとの回答がなされた。

平成15年9月22日、土木局道路建設部東部建設課より、同線（3工区）舗装工事に伴う埋蔵文化財の事前審査について依頼がなされた。埋蔵文化財課では試掘調査を行い、遺構が確認されたため、調査が必要であるとの回答がなされた。この二者の依頼地点は隣接しており、調査の成果を上げるために3者による調査行程の協議を重ね同時に1地点として調査を行うこととなった。調査は第42次調査として平成15年10月21日より開始し、平成16年1月21日に終了した。

2. 調査体制

事業主体 福岡市土木局芦崎連続立体開発事務所

福岡市土木局道路建設部東部建設課

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 埋蔵文化財課長 山口謙治 山崎純男（前任）

調査第2係長 池崎謙二 田中壽夫（前任）力武卓治（前任）

事前審査 事前審査係長 浜石哲也 池崎謙二（前任）田中壽夫（前任）

事前審査係 井上薫子 田上勇一郎（前任）大塚紀宣（前任）瀧本正志（前任）

調査庶務 文化財整備課管理係 鈴木由喜 御手洗清（前任）

調査担当 第25次調査 主任文化財上事 杉山富雄

第32次調査 調査第2係 中村啓太郎

第42次調査 調査第2係 赤坂亨

II. 位置と環境

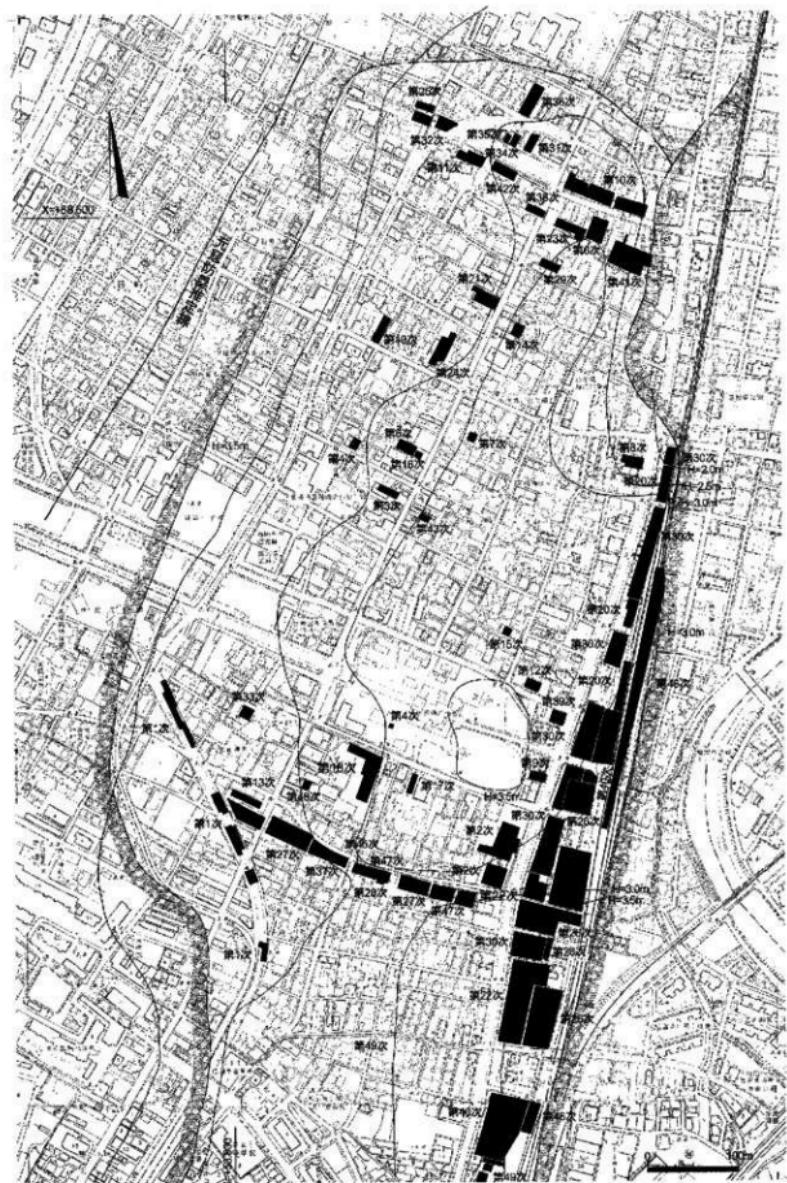
箱崎遺跡は宇美川下流域、多々良川河口左岸の博多湾に面し、南北に延びる砂丘上に位置する。この砂丘は箱崎砂層と呼ばれ、本遺跡付近から対見川河口付近まで分布しており、本遺跡を含め多くの遺跡が立地している。砂丘の形成時期は考古学的及び地質学的調査成果から縄文時代後期以降と考えられている。本遺跡が分布しているのは概ね南北1000m、東西500mの範囲で標高2.0~3.5mを測る。

本遺跡は1983年の佐世鉄建設に伴う第1次調査以来、50次を超える調査が行われているが、調査が本格化するのは1990年代以降で、縄文時代晚期~近世に至る各時期の遺構、遺物が確認されている。縄文時代晚期~弥生時代は第6次調査において出土した磨製石斧が最も古く、縄文時代晚期~弥生時代前期初頭のものと考えられるが、該期の遺構に伴わない。弥生時代中期~後期の土器は18・30次調査で確認されている。古墳時代は竪穴住居や円形及び方形周溝墓等が確認されている。8次調査では瓦陶壺を多量に出土しており、生業を考える上で興味深い。奈良時代になると遺物は散見されるものの遺構については判然としない。10世紀に入ると以降の箱崎遺跡の中心となる宮崎宮が創建される。延喜21年に八幡神の託宣により、穂波郡人分宮から遷座して延長元年に建てられたとされる。それは大分宮の節会に参詣する大宰府の役人が竜門宮に不敬を行ふ、郡司百姓等が騒動するに陥しい山越えをしなければならない、放生会を行うのに海ではないため不適当であるという3つの理由からとされる。しかし実際のところ、新羅に対する宗教的防護や、この地が対外貿易の地点として重要であったことも大きく作用したと考えられている。この時期の遺構は後の時期に比べてほど多くなく、宮崎宮の東を中心に分布する。これ以降遺跡は西側に拡大して行き、13世紀代以降にはほぼ全域に分布する。また25・32・36次調査によって遺跡の範囲が北及び北東側に拡大することが確認されている。

周辺の遺跡をみると南へ続く砂丘上に吉塚本町遺跡群、吉塚祝町遺跡、堅粕遺跡群、古塚遺跡群、博多遺跡群が存在している。吉塚本町遺跡群は弥生時代~古代にかけての遺物、遺構が確認されている。出土する瓦や硯から公共的施設の存在が考えられている。吉塚祝町遺跡は道路建設に伴って1996年に確認された遺跡である。遺跡を縦断するように行われた第1次調査では弥生時代から中世に至る各時期の遺構が確認され、弥生時代の甕棺墓、古墳時代の住居址、横穴式石室、石棺墓、上壙墓、古代~中世の集落が検出されており、古代においては越州系青磁が多量に出土しており注目されている。中世については13世紀~14世紀前半を中心にして、それ以降急速に衰退する。堅粕遺跡群は吉塚本町遺跡群の南に位置し、弥生時代~古代にかけての遺構が確認されている。北側に弥生時代~古墳時代の遺構が集中し、南側に古墳時代後期から古代の遺構が多くみられる。古代においては越州系青磁、綠釉陶器、墨書き土器等の出土遺物から公共的施設が存在する可能性が考えられている。吉塚遺跡群は吉塚祝町遺跡、堅粕遺跡群の南東に位置し、弥生時代~近世に至る遺物、遺構が検出されている。特筆すべき遺物として貨泉の出土が挙げられる。吉塚遺跡群の南には国際貿易都市として中世を代表する遺跡の一つであり、箱崎遺跡と関係の深い博多遺跡群が位置する。出土する輸入陶器類は質、量共に他を圧倒している。副食はすでに150次を超え、弥生時代~近世に至る遺構、遺物が確認されている。さらに南には住吉神社遺跡が位置する。2004年に第1次調査が行われ、中世の遺構が確認されている。



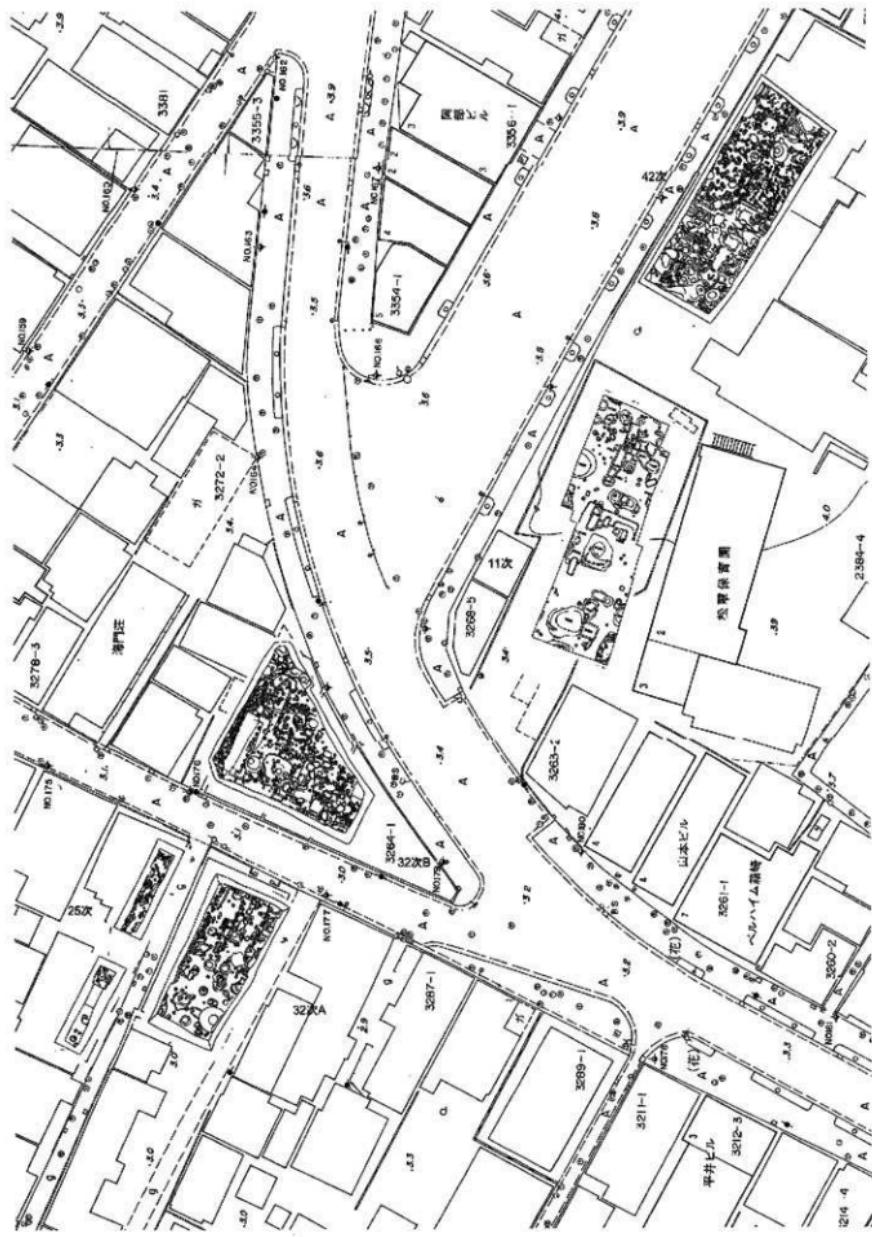
第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 箱崎遺跡調査区位置図 (1/5,000)

| 調査次数 | 所在地 | 面積 | 調査期間 | 時期 | 主な遺構 | 報告書 |
|------|----------------|-------------------------|----------------------|-------------------------------|--------------------------------|--------|
| 第1次 | 馬山5丁目地内 | 1600m ² | 1983.7.4~12.16 | 12世紀後半~13世紀 | 井戸 土坑 潟 井戸遺構 | 第153号 |
| 第2次 | 福崎3丁目18-32番 | 1500m ² | 1986.11.22~1987.1.30 | 10世紀後半~13世紀 | 井戸 潟 井戸 潟 井戸遺構 | 第278号 |
| 第3次 | 福崎1丁目2731-1 | 156m ² | 1990.1.09~2.21 | 12世紀中頃~13世紀 | 井戸 土坑 潟 | 第262号 |
| 第4次 | 福崎1丁目2761 | — | 1989.7.5 | 11世紀 | 土坑(瓦礫) | 平27N-4 |
| 第5次 | 福崎1丁目25-27 | 210m ² | 1995.9.9~10.30 | 12世紀~15世紀 | 獨立柱建物 破壊 井戸 上坑 潟 井戸 遺構 | 第278号 |
| 第6次 | 福崎3丁目2437-1, 4 | 430m ² | 1994.10.20~1995.1.31 | 12世紀後半~13世紀 | 井戸 土坑 潟 | 第459号 |
| 第7次 | 福崎1丁目711番外 | 85m ² | 1994.11.15~12.27 | 12世紀前半~13世紀 | 井戸 土坑 | 第459号 |
| 第8次 | 福崎1丁目2549 1番 | 225m ² | 1996.10.1~11.14 | 12世紀~13世紀 | 古墳時代の発穴式井戸 中世の土坑 井戸 上坑 | 第591号 |
| 第9次 | 福崎1丁目1656-1 | 191m ² | 1996.10.2~10.29 | 11世紀~15世紀 | 井戸 上坑 潟 | 第550号 |
| 第10次 | 福崎1丁目地内 | 1030m ² | 1996.11.11~1997.1.31 | 12世紀前半~13世紀 | 井戸 土坑 潟 | 第551号 |
| 第11次 | 福崎3丁目2266-1番 | 385m ² | 1997.4.30~6.27 | 12世紀後半~14世紀 | 井戸 土坑 ピット | 第560号 |
| 第12次 | 福崎1丁目2050-1, 3 | 355m ² | 1997.8.19~9.22 | 11世紀~12世紀 | 井戸 上坑 潟 井戸 遺構 | 整理中 |
| 第13次 | 馬山5丁目520-521 | 29/m ² | 1997.10.27~12.2 | 13世紀 | 獨立柱建物 井戸 上坑 潟 | 第592号 |
| 第14次 | 福崎1丁目24-15 | 36m ² | 1998.1.2~5.23 | 12世紀後半~14世紀前半 | 土坑 潟 | 第605号 |
| 第15次 | 若崎1丁目2615 | 36m ² | 1998.5.25~6.5 | 12世紀後半~13世紀 | 上坑 潟 | 第610号 |
| 第16次 | 福崎1丁目2725 | 50m ² | 1998.1.18~1.29 | 11世紀~15世紀 | 井戸 土坑 | 第703号 |
| 第17次 | 福崎1丁目前20-19 | 40m ² | 1999.3.13~3.21 | 12世紀中頃~17世紀 | 土坑 潟 ピット | 第704号 |
| 第18次 | 馬山5丁目470 | 920m ² | 1999.5.14~9.28 | 12世紀中頃~16世紀 | 井戸 上坑 潟 | 第664号 |
| 第19次 | 福崎1丁目2401-1 | 160m ² | 1999.7.29~8.27 | 12世紀後半~14世紀 | 独立柱建物 井戸 上坑 潟 | 第661号 |
| 第20次 | 福崎1丁目21番地内 | 882m ² | 1999.12.13~2000.3.31 | 古墳時代 H~13世紀 | 古墳時代の発穴式井戸 中世の土坑 井戸 上坑 潟 井戸 遺構 | 第705号 |
| 第21次 | 福崎1丁目2480 | 545m ² (2箇所) | 2000.1.29~6.26 | 12世紀後半~14世紀 | 独立柱建物 井戸 土坑 潟 井戸 遺構 | 第705号 |
| 第22次 | 馬山5丁目・福崎1丁目 | 2976m ² | 2000.7.24~2001.3.31 | 古墳時代 古代式~中世 | 古墳時代の発穴式井戸 中世の土坑 潟 井戸 遺構 | 第811号 |
| 第23次 | 福崎3丁目2604 | 1880m ² | 2000.9.22~2000.11.2 | 13世紀~17世紀 | 井戸 土坑 | 第704号 |
| 第24次 | 福崎1丁目2511番 | 387m ² | 2000.10.31~2001.1.31 | 12世紀後半~14世紀 | 井戸 土坑 木棺墓 | 第708号 |
| 第25次 | 福崎3丁目地内 | 87m ² | 2001.4.1~6.24 | 13世紀後半~14世紀 | 土坑 | 第805号 |
| 第26次 | 福崎1丁目地内 | 5253m ² | 2001.5.5~2002.3.29 | 古墳時代 H~13世紀 | 古墳時代の施設類 中世の土坑 井戸 土坑 遺構 | 第816号 |
| 第27次 | 馬山5丁目地内 | 1449m ² | 2001.6.7~2002.9.10 | 12世紀~近世 | 井戸 上坑 潟 井戸 遺構 | 第812号 |
| 第28次 | 馬山5丁目24-8 | 41m ² | 2001.7.2~7.12 | 中世後半 | 土坑 ピット | 整理中 |
| 第29次 | 福崎3丁目2358番 | 80m ² | 2002.4.1~2002.4.26 | 12世紀~13世紀 | 上坑 潟 式状土坑 | 第813号 |
| 第30次 | 福崎1丁目地内 | 4997m ² | 2002.4.9~2003.3.15 | 3世紀時 古代式~中世 | 輪郭構造 井戸 潟 井戸 土坑 潟 井戸 遺構 | 整理中 |
| 第31次 | 福崎1丁目3358-1 | 80m ² | 2002.5.9~2002.6.14 | 12世紀~3世紀 | 井戸 土坑 潟 | 第813号 |
| 第32次 | 福崎3丁目地内 | 445m ² | 2002.4.22~9.20 | 13世紀~ | 井戸 土坑 潟 井戸 遺構 | 第895号 |
| 第33次 | 馬山5丁目602-503 | 920m ² | 2002.9.24~10.8 | 12世紀~ | 井戸 土坑 潟 井戸 遺構 | 整理中 |
| 第34次 | 福崎3丁目3356-1 | 70m ² | 2002.11.14~12.2 | 12世紀後半~14世紀 | 井戸 土坑 | 整理中 |
| 第35次 | 福崎3丁目29-33 | 32m ² | 2002.12.2~12.10 | 12世紀後半~14世紀 | 井戸 土坑 潟 | 整理中 |
| 第36次 | 福崎3丁目3380 | 199m ² | 2002.12.11~2003.2.21 | 14世紀~15世紀 | 井戸 土坑 潟 | 整理中 |
| 第37次 | 馬山5丁目地内 | 493m ² | 2002.12.12~2003.3.31 | 12世紀~ | 井戸 土坑 潟 | 整理中 |
| 第38次 | 福崎3丁目9-9 | 90m ² | 2003.3.3~3.8 | 12世紀~ 近世 | 井戸 土坑 | 第814号 |
| 第39次 | 福崎1丁目2031番 | 145m ² | 2003.4.10~5.9 | 12世紀代 | 井戸 土坑 潟 | 第851号 |
| 第40次 | 馬山5丁目24番地内 | 2900m ² | 2003.5.14~ | 輪郭構造 潟 井戸 潟 井戸 土坑 小井戸 方形式穴状遺構 | 整理中 | |
| 第41次 | 福崎3丁目2426番 | 1000m ² | 2003.5.16~12.11 | 12世紀後半~13世紀 | 井戸 土坑 潟 井戸 遺構 | 第854号 |
| 第42次 | 福崎3丁目1 | 260m ² | 2003.5.21~2004.1.21 | 12~14世紀 | 井戸 土坑 潟 | 第896号 |
| 第43次 | 福崎1丁目2697-1 | 85m ² | 2003.11.21~12.5 | 11世紀~12世紀 | 土坑 ピット | 整理中 |
| 第44次 | 福崎1丁目38-3 | 144m ² | 2004.2.16~3.15 | 12~14世紀 | 井戸 土坑 ピット | 第854号 |
| 第45次 | 馬山5丁目地内 | 182m ² | 2004.3.1~3.22 | 12~13世紀 | 井戸 土坑 ピット | 整理中 |
| 第46次 | 馬山5丁目地内 | 1000m ² | 2004.7.21~ | 古代後半~中世後半 | 井戸 土坑 潟 | 整理中 |
| 第47次 | 馬山5丁目451-1 | 87m ² | 2004.11.26~11.78 | 近世 | 土坑 ピット | 整理中 |
| 第48次 | 馬山5丁目330地内 | 559m ² | 2005.4.1~2006.2.13 | 古墳時代~12~14世紀 | 井戸 土坑 ピット 潟 井戸 遺構 方形式穴状遺構 | 整理中 |
| 第49次 | 馬山5丁目481-1 | 69m ² | 2005.3.22~6.4 | 中世後半~近世 | 独立柱建物 井戸 土坑 潟 井戸 遺構 | 整理中 |

表1 箱崎遺跡調査一覧



第3図 第25・32・42次調査区位置図(1/600)

III. 第25次調査

1. 調査概要

試掘調査の結果を受け、推定された遺構分布範囲について調査することとし、機力により表土剥ぎを行った。調査地は周囲が民家および道路に隣接していることから、安全確保のため四方に控えをとり、柵を設置した。これにより、調査範囲は東西27m、幅3.5mとなった。また、表土・地山層が砂層であったことから法面勾配を小さくする必要が生じ、調査面で幅2m程の規模で、トレンチ状の調査区となつた。加えて対象地中央に既設の埋設管があったこと、通路確保の必要があったことから調査対象から外さざるを得なかつた。そこで、この部分を境に東半分を1区、西半分の調査区を2区として調査を進めることがとなつた。1・2区とも長さ12mほどである。

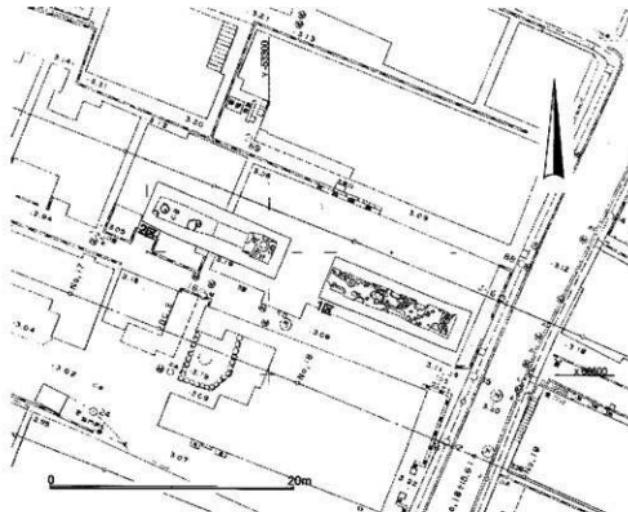
発掘調査は、2001年(平成13年)4月16日着手し、4月26日終了した。調査面積は87m²である。

土層

現況地盤標高3.9mを前後し、現況の生活面である。それから0.9m掘り下げた位置を調査開始面とした。本地点の土層は、2区深掘り部での観察からすると、以下のようなものである。

現地表面を基準にして、

- 1) 0--0.2m 現在の整地層(石炭殻の薄層)
- 2) -0.2--0.6m 暗褐色砂層(薄層を識別できる部分がある)
- 3) -0.6--0.9m 調査開始面で、黄褐色砂上面。さらに、深掘り位置では、この黄褐色砂は無遺物層で、全体に一様、深掘りした-1.4m以下にも続く。以下は色調の変化はないものの、粗砂の薄層がみられ、本遺跡が立地する基盤の砂州堆積物と考えられる。



第4図 第25次調査地点 (1/100)

2. 調査遺構と出土遺物

検出遺構(表1～3)

遺物が出土したこと、遺構として登録したものは、構成が近現代に及び擾乱したもの、不整な形状で人為的ではないと考えられるものを含めて47基である。遺構の特徴と、遺物構成を表1～3に示す。これとは別に遺物の出土がなく、個別の登録をしていないものがある。調査区ごとにみると以下のようなものであった。

1区 遺構には、小穴、土壤がある。全体に覆土は、黒褐色の砂質土である。遺構のうち、小穴とするものでは掌大かそれ以上の礫が検出できるものがあるが、調査範囲が狭小であることもあってか、柱穴として建物を復原できるものはない。大形の

掘り込みを土壤として記録した。円形、隅円の方形・長方形のものがある。出土遺物の構成の検討からする限り、近世以降に掘削されたと考えられるものが多々ある。ただし、時期の判断に土器以外の遺物を加味しており、不確定な部分もある。

第5図 第25次地点1区全体図
(1/100)

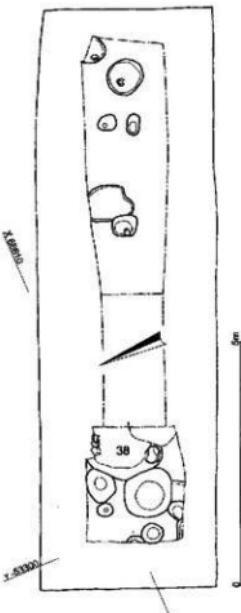
2区 1区寄りに小穴、

土壤が集中する。それ以内では分布は散漫で、かつ浅いものとなる。また、大半は、遺物の構成そのほかから近世以降のものと考えられる。このような分布のあり方は、近世に行われたような規則形の地割りによる土地利用を前提とするならば、全面道路に面した建物とその後背地といったあり方を示すものである可能性もある。

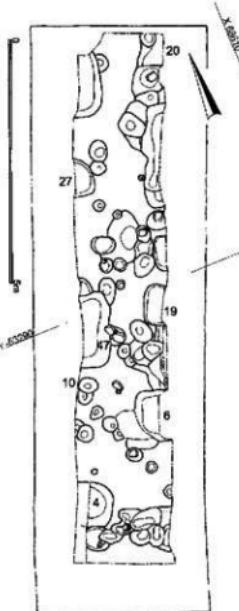
出土遺物

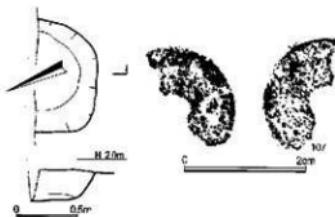
遺物は総量で収納コンテナ1箱ほどの分量である。大半は、細分化した土器片である。遺構以外で検出した遺物は小量で、近世を通じての包含層が発達していないか、削平されたかしているようである。遺跡の周縁部であることからすると、前者である可能性を考えたい。遺物の構成は、ほぼ1/2が土器片埋直の類が占める。判別可能な資料の底部は系切底である。陶磁器には、龍泉窯系青磁碗、玉緑白磁、明代のものとみられる柴付がある。鉢類には瓦質土器擂鉢、土器器鍋がある。

以下、主要な遺構と出土遺物について述べる。



第6図 第25次地点2区全体図
(1/100)





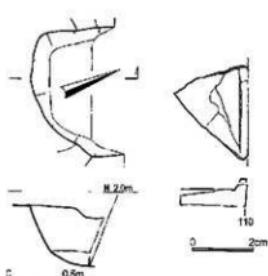
第7図 遺構4・出土遺物 (1/40・1/1)

銹が覆い、銘を判別できない。現状で重量1.4g、径は復原すると25.6mmとなる。

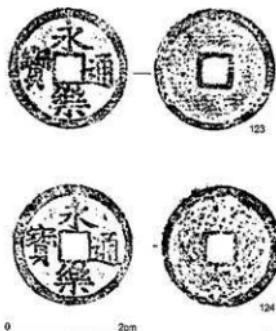
遺構6 (第8・18図)

1区東半部の遺構である。平面形は隅円の方形か。幅1.1m、深さ0.5mを測る。覆土は黒褐色砂で全体に一様である。

出土遺物 遺物は覆土中から小量が散漫に出土した。土師器皿は系切底である。外底面に板目はない。



第8図 遺構6・出土遺物 (1/40・1/1)



第9図 遺構10出土遺物 (1/10)

遺構4 (第7図)

1区東端部で検出した。平面形は隅円の方形か。現状で幅0.9m、深さ0.4mを測る。覆土は黒褐色砂で全体に一様である。

出土遺物 遺物は覆土中から極小量が散漫に出土した。土師器皿は系切底である。ほかに、土師器鍋、瓦質土器擂鉢が出土した。鉄製品1点があり、銹のようである。銹の状態から新しい時代の可能性を残す。

銅錢107を示す。刃程が遺存する。全体に

銹が覆い、銘を判別できない。

遺構6 (第8・18図)

1区東半部の遺構である。平面形は隅円の方形か。幅1.1m、深さ0.5mを測る。覆土は黒褐色砂で全体に一様である。

出土遺物 遺物は覆土中から小量が散漫に出土した。土師器皿は系切底である。外底面に板目はない。ほかに須恵器、土師器で鍋がある。陶器に白磁皿がある。中世末とできようか。別に陶器に龍泉窯系青磁碗〔大宰府1-5類〕がある。土鍬も出土した(第12図-111)。

図示する硯110は、海部付近の極細片資料である素材をすり削って平面長方形の板状に成形する。石材は粘板岩か、灰色〔2.5PB 3.5/0.5〕を呈する。下面が剥落しており計測不能。

遺構10 (第9図)

1区東半部で検出した。平面形が精円形の小穴で長さ0.4m、幅0.3m、深さ0.1mの規模である。覆土は黒色砂質土。

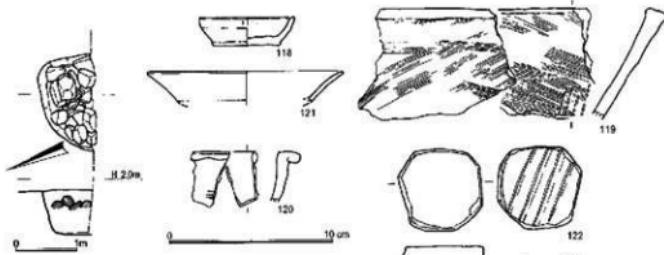
出土遺物 覆土中から散漫に小量出土した。土師器鍋、土鍬(第12図-112)のほかに銅錢2点が出土した。ともに「永樂通寶」である。銅錢123は径24.9mm、厚さ1.1mm、重量3.4gを測る。銅錢124は径21.8mm、厚さ1.2mm、重量3.5gを測る。

遺構27 (第10-16図)

1区西半部南壁にかかる位置で検出した。現状で幅0.8m、深さ0.4mを測る。覆土は軟質の黒褐色砂質土である。底面から刃程の位置まで掌大蝶が詰まっている。

出土遺物 遺物は覆土中から小量が散漫に出土した。土器は細片から小破片の資料がある。

118は上師器皿で、系切底、内底面中央に指痕



第10図 遺構27・出土遺物 (1/40・1/30)

跡がある。器表は灰みの黄赤色 [2.5YR 6/4] を呈す。口径58mm、底径42mm、器高18mmを復原できる。119は土師器擂鉢で、内外面とも刷毛目調整、内面では下位と上位とでは工具を替えている。擦り目は極粗い。器表は明るい灰みの黄赤色 [4 YR 7/4] を呈す。120は土師器鍋で、内外面とも撫で調整の後外面に刷毛目調整を施す。122は、土師器擂鉢体部破片の周縁部を擦り削りして不整な円盤状に整形したものである。器表はくすんだ黄赤色 [2YR 6/8] を呈す。径43mm、厚さ9mm、重量14.5gを測る。

遺構47(第11図)

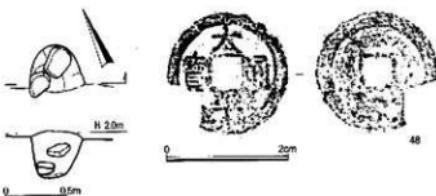
1区中央部で検出した。底部近くと中位に板状の繊を入れている。現状で幅0.4m、断面は深い台形状を呈し0.4mを測る。覆土は黒褐色砂質土である。

出土遺物 遺物は覆土中から銅錢が出土した。銅錢48は一部を欠く資料である。全体に鋸が著しいが、銭銘は「太平通寶」と読める。径は25.2mm、厚さ1.0mm、重量は現状で2.3gを測る。

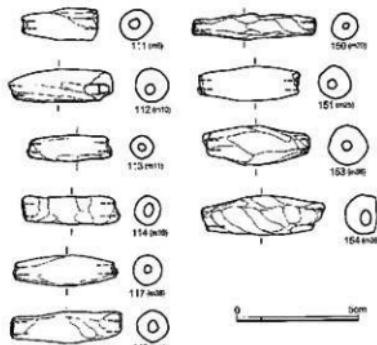
土錘(第12図)

複数の遺構、包含層から土錘が出土した。全部で26点が出土した。1区遺構から13点、遺構検出面から3点、2区遺構から2点、遺構検出面から2点という分布である。すべて素焼きで、遺存状態良好である。時期については不明確であるが、集成して図示する。

図示しない資料も含めて大半は紡錘形を呈するなかに、やや異形の113・149・150が混じる。以下に要目を列記する。



第11図 遺構47・出土遺物 (1/40・1/30)



第12図 25次地点出土土錘 (1/2)

| 遺物 | 長さ | 径 | 孔径 | 色調 | (遺存状態) 数値はmm |
|------------|----|----|----|-----------------|--------------|
| 土錘111(m6) | 31 | 13 | 4 | 2.5YR 6/6 橙色 | (彌欠) |
| 土錘112(m10) | 43 | 14 | 5 | 7.5YR 7/6 橙色 | (端部欠) |
| 土錘113(m11) | 34 | 11 | 4 | 10YR 7/3 にぶい黄橙色 | (端部欠) |
| 土錘114(m19) | 40 | 12 | 5 | 7.5YR 8/4 浅黄橙色 | (完存) |
| 土錘117(m38) | 43 | 13 | 4 | 7.5YR 8/4 浅黄橙色 | (完存) |
| 土錘149(m20) | 45 | 14 | 5 | 5Y4/1 灰色 | (完存) |
| 土錘150(m20) | 51 | 11 | 3 | 10R 6/3 にぶい黄橙色 | (完存) |
| 土錘151(m20) | 42 | 14 | 4 | 7.5YR 6/3 にぶい褐色 | (端部欠) |
| 土錘153(m20) | 44 | 17 | 4 | 2.5YR 7/6 橙色 | (彌欠) |
| 土錘154(m20) | 51 | 17 | 6 | 7.5YR 7/4 にぶい橙色 | (彌欠) |

3. 小結

箱崎第25次調査は、対象範囲の形状、周辺の条件により、遺跡周縁部を横断する方向に設けたトレンチ状の調査となった。遺構は遺跡中心寄り、旧西海道に沿う位置に偏って分布する。その年代は中世後半を上限とし、近世とみられるものが多い。遺構には小穴、土壙があり、礫を埋め込むなど柱穴とみえるものが複数あった。しかし、建物として復原できたものはなかった。また、建物が復原できたとしてその年代は近世である可能性が大きい。



第13図 第25次調査地点全景（東から）



第14図 1区全景（西から）



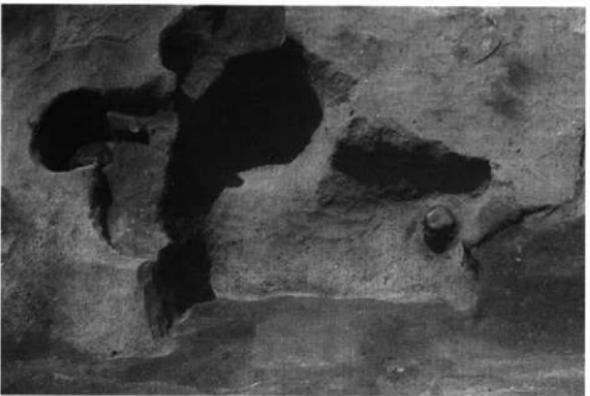
第15図 2区土層（南から）



第16図 遺構27（南から）



第17図 2区全景（西から）



第18図 遺構6（北から）

| 通報番号 | 通報箇所 | 通報現象特記 | 塵土 | 遺存状態 | 分類 | 遺物の構成 | 年代 |
|------|-------|-----------|--------------|---------|--|---|-----|
| 1 | 不整な小穴 | 少々の灰質化 | 黒褐色砂 | 細片 | ごく小量 | +中世以降 +土質粘土(堆積物) [1] | 近世 |
| 2 | 不整な小穴 | mに成る | 黒褐色砂 | 細片 - 破片 | 小量 | +中世 ? + 鋼鐵 [+ 黄銅(黄銅)] | 中世? |
| 3 | 小穴 | 浅い | 黒褐色砂 | 細片 | 小量 | +中世不明 + 土質粘土(堆積物) [1] | 中世? |
| 4 | 小穴 | | 黒褐色砂 | 細片、器表良好 | 小量 | +中世 ? + 土質粘土 [+ 塵土] [2] [+ 鉛銅 [+ 銅]] | 中世? |
| 5 | 無乱 | | | 細片、器表良好 | ごく小量 | +中世 (未) ? + 宝寶器 [+ 磁] [+ 銅] [+ 銀] [+ 鎌銅 [+ 銅]] | 中世? |
| 6 | 土壤 | 黒褐色砂 | 細片、器表良好 | 小量 | +中世 (未) ? + 宝寶器 [+ 銅] [+ 銀] [+ 鎌銅 [+ 銅]] | 中世? | |
| 7 | 小穴 | 黒褐色砂(粘土味) | 細片、器表良好 | 極少量 | +中世 (未) ? + 宝寶器 [+ 銅] [+ 銀] [+ 鎌銅 [+ 銅]] | 中世? | |
| 8 | 小穴 | 黒褐色粘質砂 | 細片、器表良好のもの含む | 小量 | +中世 (未) ? + 宝寶器 [+ 銅] [+ 銀] [+ 鎌銅 [+ 銅]] | 中世? | |
| 9 | 小穴 | | 細片 | 極少量 | +中世 (未) ? + 土質粘土 [+ 銅] [+ 銀] [+ 鎌銅 [+ 銅]] | 中世? | |
| 10 | 小穴 | | 細片 | 小量 | +中世 (未) ? + 土質粘土 [+ 銅] [+ 銀] [+ 鎌銅 [+ 銅]] | 中世? | |
| 11 | 小穴 | | 細片 | 小量 | +中世 (未) ? + 土質粘土 [+ 銅] [+ 銀] [+ 鎌銅 [+ 銅]] | 中世? | |
| 12 | 小穴 | | 細片、良好 | 極少量 | +中世 + 土質粘土 [+ 銅] [+ 銀] [+ 鎌銅 [+ 銅]] | 中世 | |
| 13 | 土壤 | | 細片(二種類前)、良好 | 極少量 | +中世(未) ? + 土質粘土 [+ 銅] [+ 銀] [+ 鎌銅 [+ 銅]] | 中世 | |
| 14 | 小穴 | | 細片(良好)、良好 | 極少量(個体) | +中世(未) ? + 土質粘土 [+ 銅] [+ 銀] [+ 鎌銅 [+ 銅]] | 中世 | |
| 15 | 小穴 | | 細片 - 人絞片 | 小粒 | +中世(未) ? + 土質粘土 [+ 銅] [+ 銀] [+ 鎌銅 [+ 銅]] | 中世 | |
| 16 | | | | | +近世 ? + 土製品 + 鉄石 [+ 銅] [+ 銀] [+ 鎌銅 [+ 銅]] | 近世 | |

| | | | | | | | | | |
|----|------|-------------------------------|----------|-------------------|--------------|----------------------------|----------------------------|--|-----|
| 17 | 土塚 | 半圓形不整 | 細片、良好 | 細片、良好 | 小量 少々多く水垢 | 土ぬる 少々多く水垢 | + 中段 + 断面 | 1.断面片～繊維片 2.柱状断面片、層状断面片 3.柱状断面片、層状断面片 4.柱状不詳(近世以降か) | 近世 |
| 18 | | | | | | | | | 発見 |
| 19 | 土塚 | 「引」形、川砂で 張り出る、川砂で 上層の残存 | 土器：繊維片 | 土器：繊維片 | 細小量 | + 土器片 + 繊維片 | + 土器片 + 繊維片 | + 土器片 + 繊維片 | 近世 |
| 20 | | | | | 少量 | + 土器片 + 繊維片 | + 土器片 + 繊維片 | + 土器片 + 繊維片 | 近世 |
| 21 | 土塚 | | | 繊維片 | 細小量 | + 土器片 + 繊維片 + 細部の繊維片 | + 土器片 + 繊維片 + 細部の繊維片 | + 土器片 + 繊維片 + 細部の繊維片 | 近世 |
| 22 | | | | 繊維片 | 少量 | + 土器片 + 繊維片 + 細部の繊維片 | + 土器片 + 繊維片 + 細部の繊維片 | + 土器片 + 繊維片 + 細部の繊維片 | 近世 |
| 23 | 不整な穴 | 黒褐色砂質土 | 繊維片 | 繊維片 | 細小量 | + 土器片 + 繊維片 | + 土器片 + 繊維片 | + 土器片 + 繊維片 | 中世 |
| 24 | 小穴 | 黒褐色砂質土 | 繊維片～一小破片 | 細片 | 小量 | + 土器片 + 土器片 | + 土器片 + 土器片 | + 土器片 + 土器片 | 中世 |
| 25 | 土塚 | | | | | | | | |
| 26 | 土塚 | 破壊を免へ 黒褐色砂質土 | 繊維片 | 繊維片 | 細小量 | + 土器片 + 土器片 | + 土器片 + 土器片 | + 土器片 + 土器片 | 近世？ |
| 27 | | | | | | | | | 中世 |
| 28 | 小穴 | | | 繊維片 | 細小量 | + 土器片 + 土器片 | + 土器片 + 土器片 | + 土器片 + 土器片 | 中世 |
| 29 | 井戸 | | | 繊維片、豊富な 黒褐色砂質土 | 細小量 | + 土器片 + 土器片 | + 土器片 + 土器片 | + 土器片 + 土器片 | 現代 |
| 30 | | | | | | | | | |
| 31 | 小穴 | | | 繊維片 | 細小量 | + 土器片 + 繊維片 | + 土器片 + 繊維片 | + 土器片 + 繊維片 | 中世 |
| 32 | 小穴 | | | 繊維片～小破片 | 少量 | + 土器片 + 土器片 | + 土器片 + 土器片 | + 土器片 + 土器片 | 中世 |
| 33 | 小穴 | | | 繊維片、良好 | 細小量 | + 土器片 + 土器片 | + 土器片 + 土器片 | + 土器片 + 土器片 | 中世 |

| 遺物番号 | 遺物種別 | 遺物形態性記 | 層土 | 分量 | | | 遺物の構成 | | | 年代 |
|------|---------|-------------------|---------|-------|-------|-------|--------|----------|----|------|
| | | | | 細片 | 中粒 | 粗粒 | + 土動植物 | + 环礁、壳切片 | 地質 | |
| 34 | 小穴 | 細研所やや荒れ | 細小粒 | + + + | + + + | + + + | + 土動植物 | + 环礁、壳切片 | 小粒 | 近世？ |
| 35 | 土壤 | 細研所やや荒れ / 粗研所やや荒れ | 小粒 | + + + | + + + | + + + | + 土動植物 | + 环礁、壳切片 | 小粒 | 近世？ |
| 36 | 土壤 | 粗研所やや荒れ | 粗粒 | + + + | + + + | + + + | + 土動植物 | + 环礁、壳切片 | 粗粒 | 近世以降 |
| 38 | 土壤 | 内底面 | 粗粒 | + + + | + + + | + + + | + 土動植物 | + 环礁、壳切片 | 粗粒 | 近代以前 |
| 39 | 土壤 | 円毛状 | 粗粒 | + + + | + + + | + + + | + 土動植物 | + 环礁、壳切片 | 粗粒 | 近世？ |
| 40 | 二層 | 不整な円筒状 | 細片 | + + + | + + + | + + + | + 土動植物 | + 环礁、壳切片 | 中粒 | 中世？ |
| 42 | 小穴 | 円形 | 細片 / 良好 | + + + | + + + | + + + | + 土動植物 | + 环礁、壳切片 | 中粒 | 中世 |
| 43 | 小穴 | 不整形 | 細片 / 良好 | + + + | + + + | + + + | + 土動植物 | + 环礁、壳切片 | 中粒 | 中世 |
| 44 | 不整な落ち込み | 浅く、不整形 | 細片 | + + + | + + + | + + + | + 土動植物 | + 环礁、壳切片 | 中粒 | 中世 |
| 46 | 小穴 | - | 細片 | + + + | + + + | + + + | + 土動植物 | + 环礁、壳切片 | 中粒 | 中世 |

第25次調查地點遺構(2)

IV 第32次調査

1. 調査概要

第32次調査地点は箱崎遺跡の北西部に位置する。第25次調査地点を含むこの地点は従来の福岡市文化財分布地図（東部Ⅰ）の範囲外にあたり、今回の都市計画道路箱崎河恵線建設事業に伴い実施した試掘調査によって遺跡の範囲が拡大することが確認された地点である。調査区は南北に延びる道路を挟んで2地点に分かれ、西部をA区、東部をB区とした。A区の北側に接して第25次調査地点が位置する。遺構面はA区が標高2.2m前後、B区が1.8~2.4mを測る。

調査は平成14年4月22日よりA区から開始した。調査区の設定はA区が遺跡の北西端に位置するため、第25次調査の成果をもとに、重機による遺構面までの掘削を東部から西部に向かって行い、遺構がほぼ確認できなくなってきたところまでとした。北側は車両通行幅を確保するための引きを取った上、周囲にメッシュシートによる外構を設置したため第25次調査との間に未調査部分が発生した。検出遺構は建物、井戸、土坑、柱穴等である。

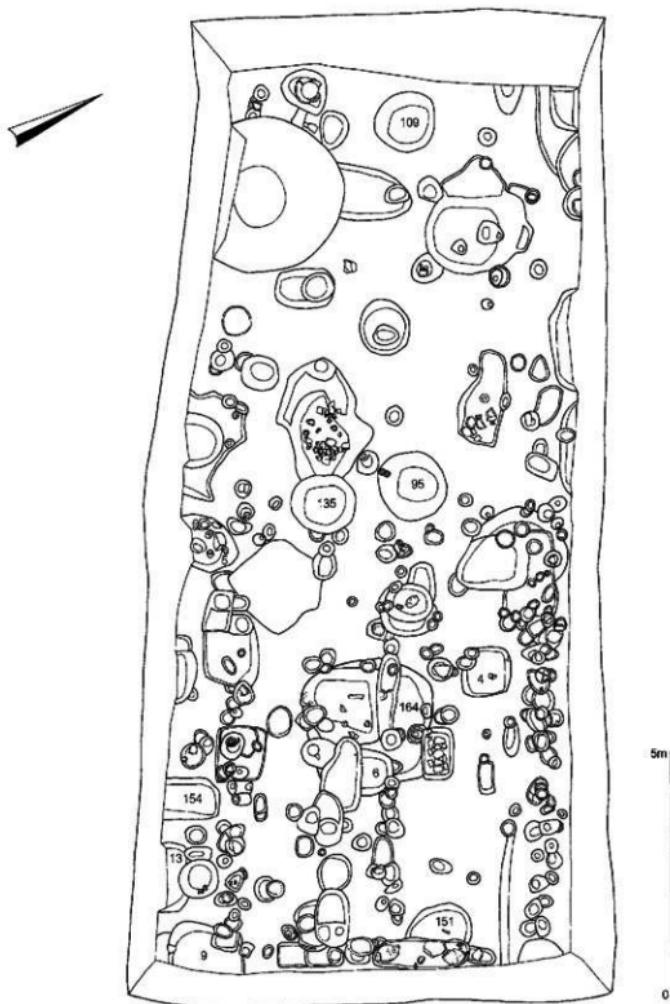
B区は調査開始予定日までに既存建物の解体が終了していなかった。このためB区の試掘は行っていなかったが遺跡のより端部である25次調査やA区で遺構が確認されたため直接、本調査を行った。調査は3面で行ったが、第1面は確認が遅れてしまい、北側は第2面まで重機で下げてしまった。第1面及び2面北側以下は人力により遺構面の検出をおこなった。当初、北側の生活道路を確保するため大きく引きを取ったが調査の結果、遺構の密度が高く北側へ広がることを確認した。原局と協議を重ね、周辺住民の理解を得て調査区を拡張した。北側拡張区の着手まで諸条件整備に時間がかかり、1ヶ月以上満喰を中断したが平成14年9月20日に無事終了した。検出遺構は建物、井戸、土坑、溝、柱穴等である。調査面積はA区が182.8m²、B区が259.7m²で合計442.5m²である。

遺構番号はその種類や検出面にかかわらず通し番号とし、調査時にA区は1~164、B区は201~696まで付し、その後推定した建物に165、697を付した。また今後新たに確認した建物等にはそれぞれ続きの番号を付す予定である。尚、474・488・497・503・530の5遺構は遺物取り上げ時のミスにより遺物は存在するが現在のところ地点不明となっている。

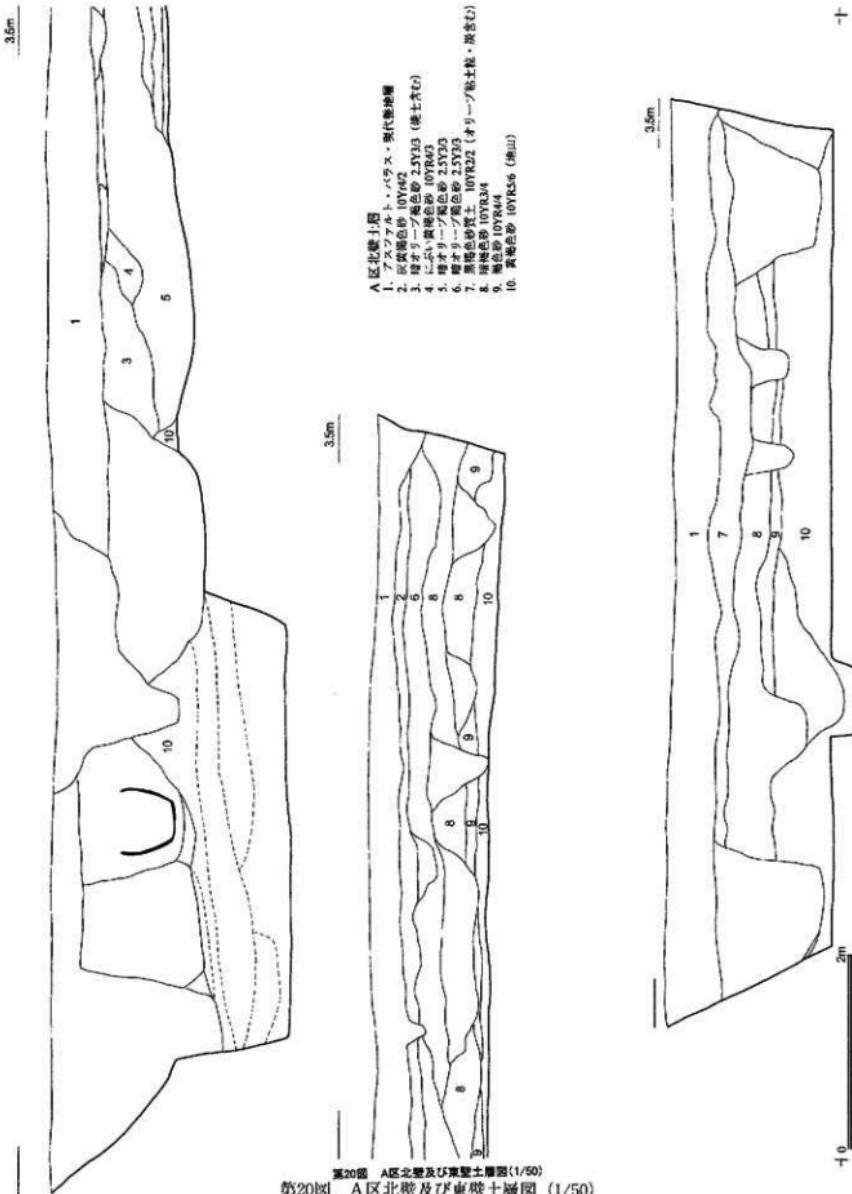
遺物はA・B区の総量でコンテナ45箱出土した。

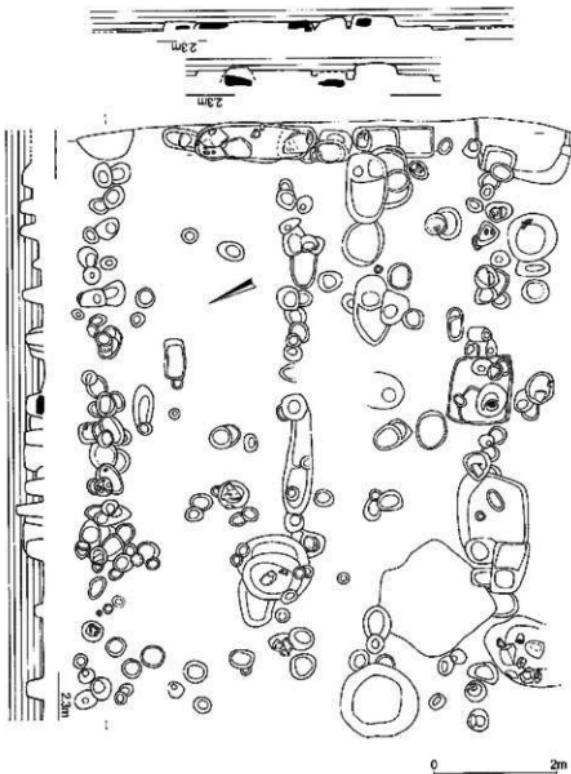
2. A区

A区は東西20m、南北8~10mの長方形の調査区を成す。基本層序は1. アスファルト・パラス・現代整地層 2. 灰黄褐色砂10YR4/2 3. 暗オリーブ褐色砂2.5Y3/3 4. 黒褐色砂質土10YR2/2（オリーブ粘土粒・炭含む） 5. 暗褐色砂10YR3/4 6. 褐色砂10YR4/4 7. 黄褐色砂10YR5/6（地山）となる。北壁土層の3~5層は遺構の可能性がある。遺構面の標高は東で2m、西で2.2mとなりほぼ水平である。検出遺構は建物、井戸、土坑、柱穴であるが大半は近世以降のもとのと考えられる。調査区東に密度が高く、西は低くなる。



第19図 A区造構配置図 (1/100)





第21図 SB166実測図 (1/80)

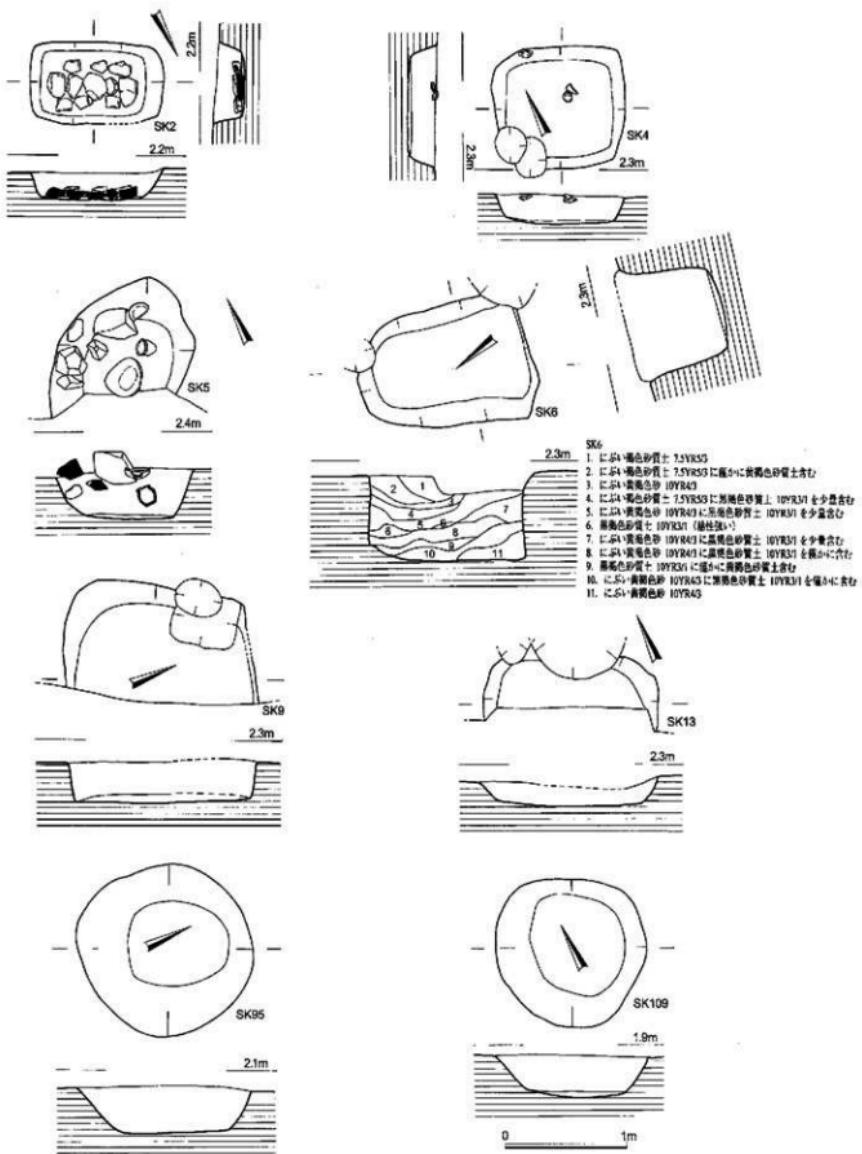
1) 建物 (SB)

SB166 (第21図)

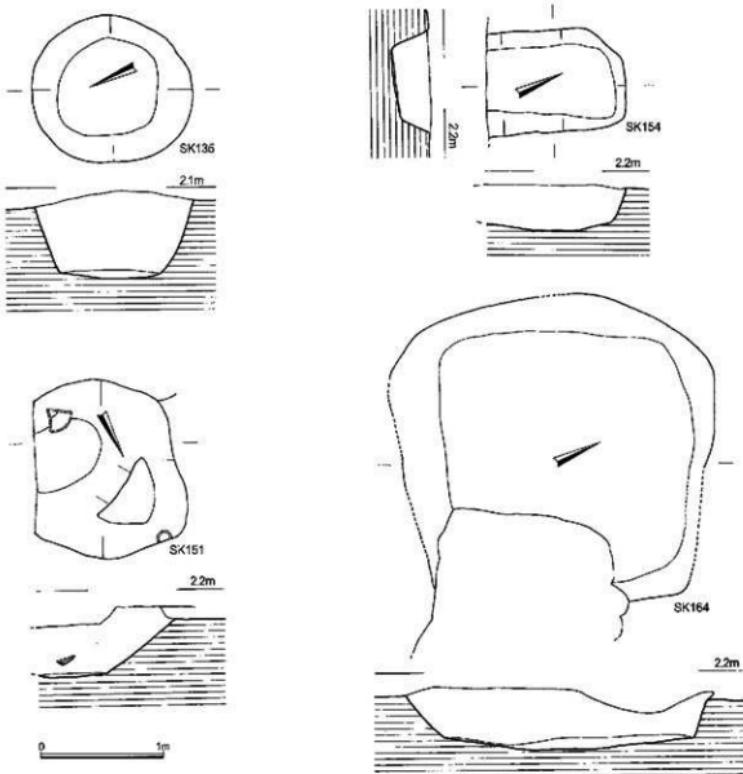
調査区東、道路上に沿うように位置する。南北1間が約3m、東西長約8mを測る。25次調査でも同方向の柱列が確認されており、南北方向は延びる可能性がある。長屋的な建物と考えられる。東西方向の柱穴は集中しており、複数回の建て替えがみられる。それぞれの柱穴の対応関係は不明。柱穴には根石を有するものがある。近世以降と考えられる。同様の配置をとる建物が南に位置する13・27次調査A区で確認されている。

2) 土坑 (SK)

土坑は調査区全体に分布するが、東側に位置するものは方形、長方形のものが多く、柱列に平行、或いは直交するものが多い。



第22図 SK 2・4・5・6・9・13・95・109実測図 (1/40)



第23図 SK135・151・154・164実測図 (1/40)

SK 2 (第22図)

調査区東に位置する。平面形は長方形を呈し、長さ108cm、幅68cm、深さ25cmを測る。底面に10~25cmの大の扁平な石を水平に敷く。台石か。出土遺物取り上げ時に他の遺物が混入してしまい時期不明。

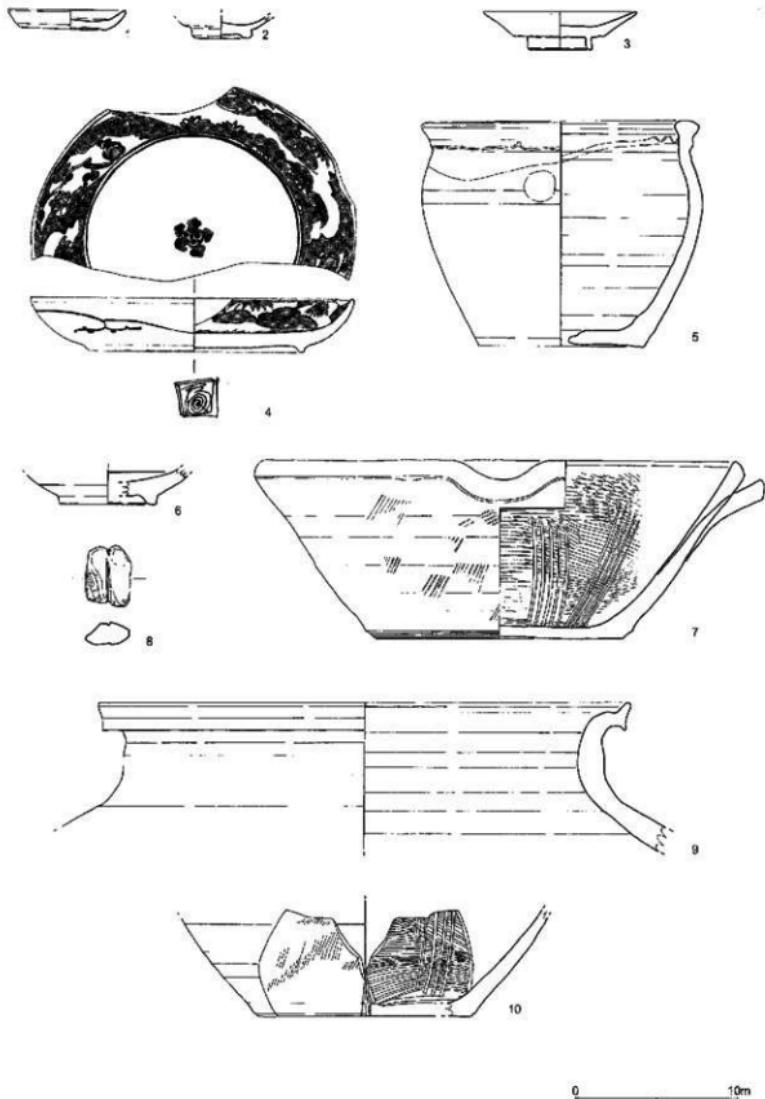
SK 4 (第22図)

調査区東部に位置する。平面形は方形を呈し、1辺100cm前後、深さ25cmを測る。
出土遺物 (第23図) 1は上部器小皿で口径7.2cm、器高1.2cmを測る。底部は回転糸切り。2は白磁の小碗か。

SK 5 (第22図)

調査区中央に位置し、南側が調査区外に延びる。平面形は不規則な橢円形を呈し、幅112cm、深さ45cmを測る。遺物の他に15~30cm大の石が混入している。

出土遺物 (第24図) 3は白磁の皿。口径9.4cm、器高2.3cmを測る。全面に施釉後、高台盤付き部の



第24図 SK 4・5・6・151・164出土遺物実測図 (1/3)

み搔き取っている。4は肥前系染付の皿。口径19.8cm、器高3.3cmを測る。5は陶器の壺。口径17.0cm、器高18.8cmを測る。釉は口縁部が灰白色、胴部がオリーブ黄色を呈する。底部に穿孔が施される。

SK 6 (第22図)

調査区東部に位置し、SK164を切る。平面形は長方形を呈し、壁が立つ。長さ142cm、幅98cm、深さ80cmを測る。

出土遺物 (第24図) 6は象嵌青磁の碗。釉は明オリーブ灰色を呈する。

SK 9 (第22図)

調査区東端に位置し、調査区外に延びる。平面形は隅丸方形か。長さ145cm、深さ30cmを測る。遺物は土師器、青磁、染付の細片が出上している。

SK13 (第22図)

調査区東部に位置し、南側が調査区外に延びる。平面形は隅丸方形か。深さ17cmを測る。遺物は土師器、須恵器、陶器の細片が出上している。

SK95 (第22図)

調査区中央に位置する。平面形は円形を呈し、径140~150cm、深さ40cmを測る。遺物は土師器、染付、陶器の細片が出上している。

SK109 (第22図)

調査区西端に位置する。平面形はやや不整な円形を呈し、径125cm前後、深さ35cmを測る。遺物は土師器壺の細片が出上している。

SK135 (第23図)

調査区中央に位置する。平面形は円形を呈し、径130cm前後、深さ73cmを測る。遺物は土師器、染付、陶器の細片が出上している。

SK151 (第23図)

調査区東端に位置し、建物に切られる。平面形は梢円形か。深さ34cmを測る。

出土遺物 (第24図) 7は瓦質の擂鉢。復原口径30.0cm、器高10.9cmを測る。調整は外面がハケメ後ナデ、内面はハケメ後5条単位の擂目を施す。8は滑石製石錘。

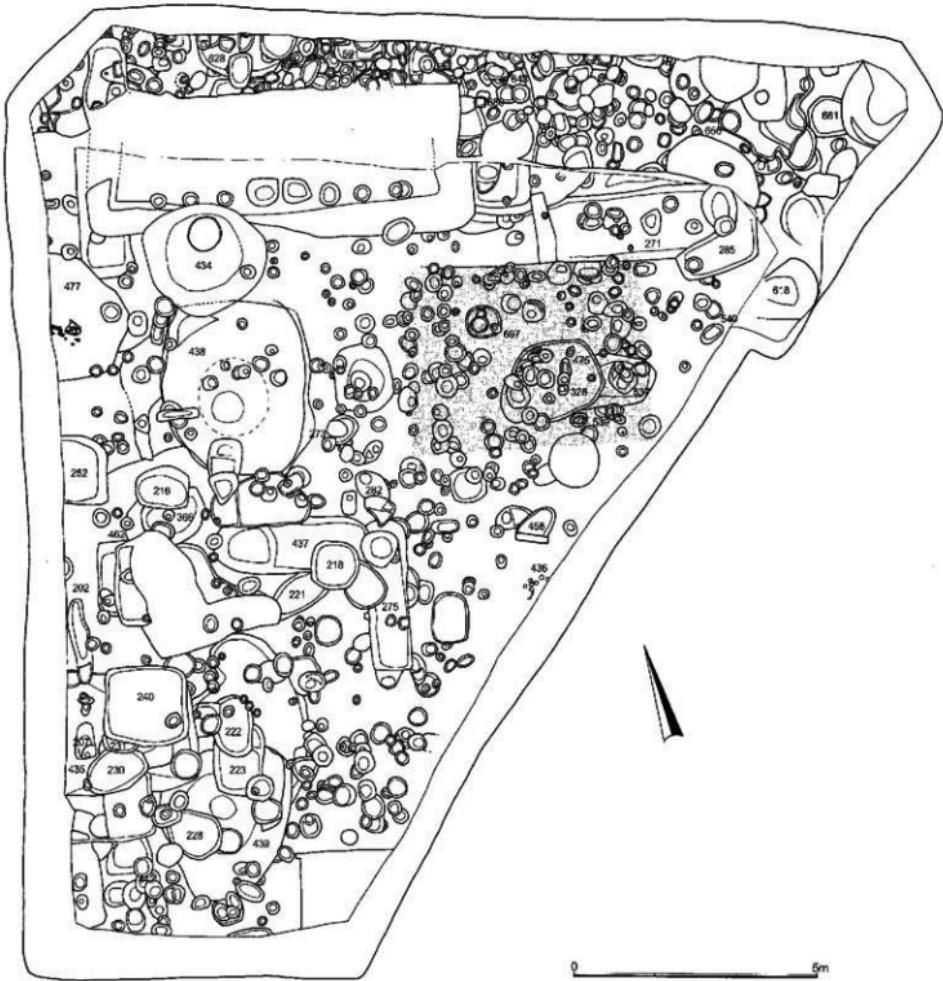
SK154 (第23図)

調査区東部に位置し、南側が調査区外に延びる。平面形は長方形を呈し、幅80cm、深さ35cmを測る。遺物は陶器、瓦質土器、土師器の細片が出上している。

SK164 (第23図)

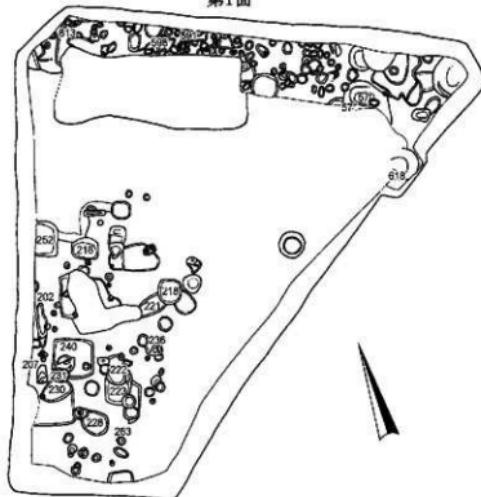
調査区東部に位置する。建物やSK 2・6に切られる。平面形は方形を呈し、一辺250cm前後、深さ50cmを測る。

出土遺物 (第24図) 9は陶器の壺。復原口径32.6cmを測る。口縁部が赤褐色、他が灰オリーブ色を呈する。10は瓦質の擂鉢。調整は外面がハケメ後ナデ、内面はハケメ後5条単位の擂目を施す。

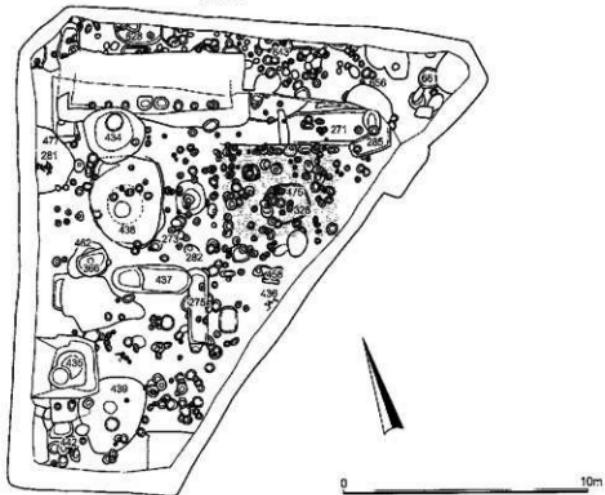


第25図 B区造構配置図 (1/100)

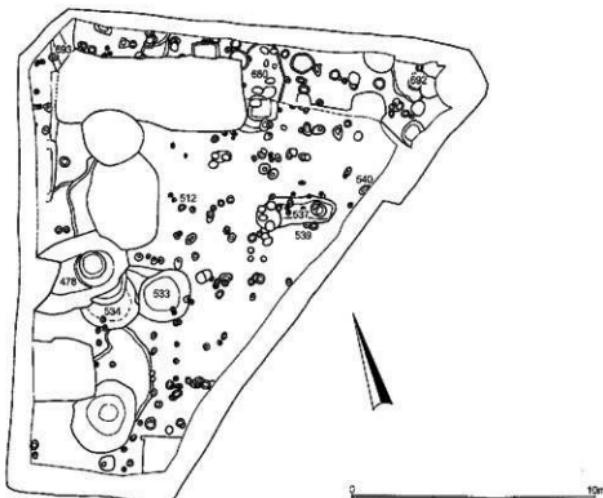
第1面



第2面



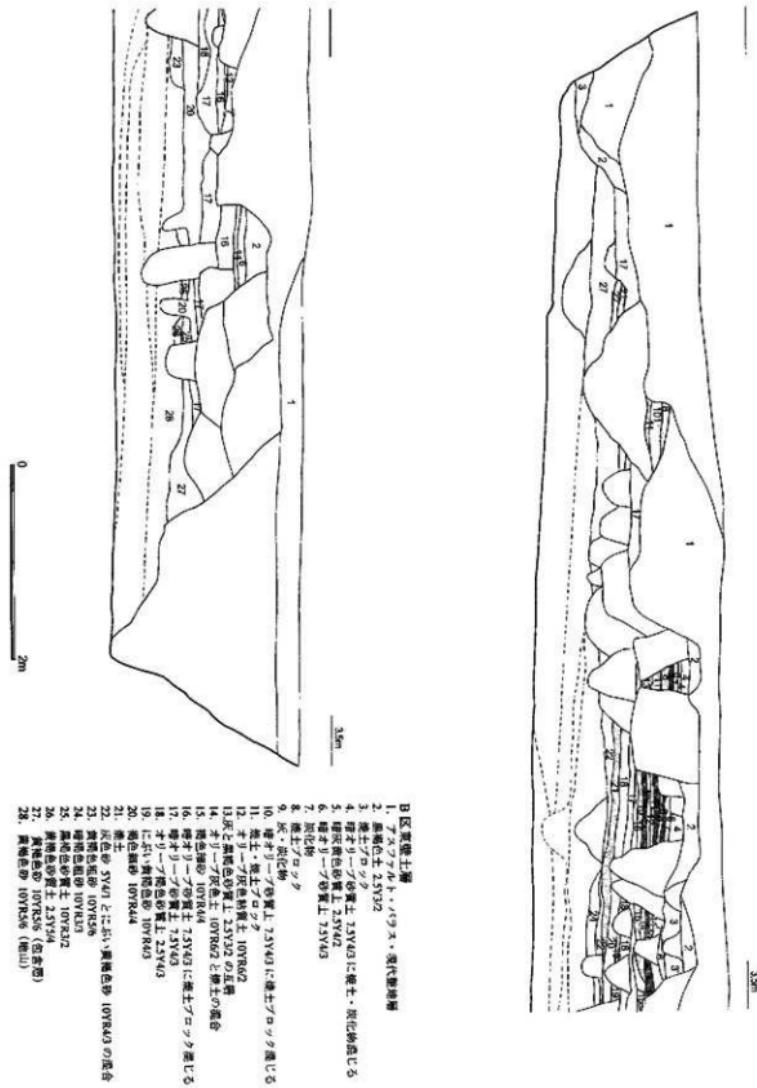
第26図 B区第1・2面造構配置図 (1/200)



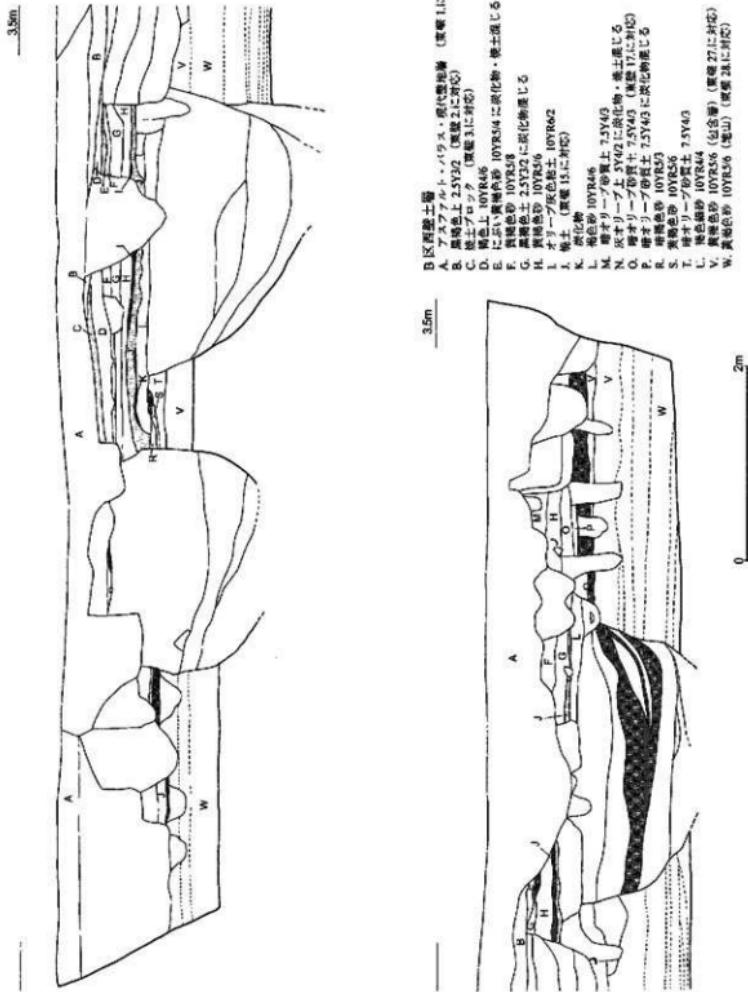
第27図 B区第3面遺構配置図 (1/200)

3. B区

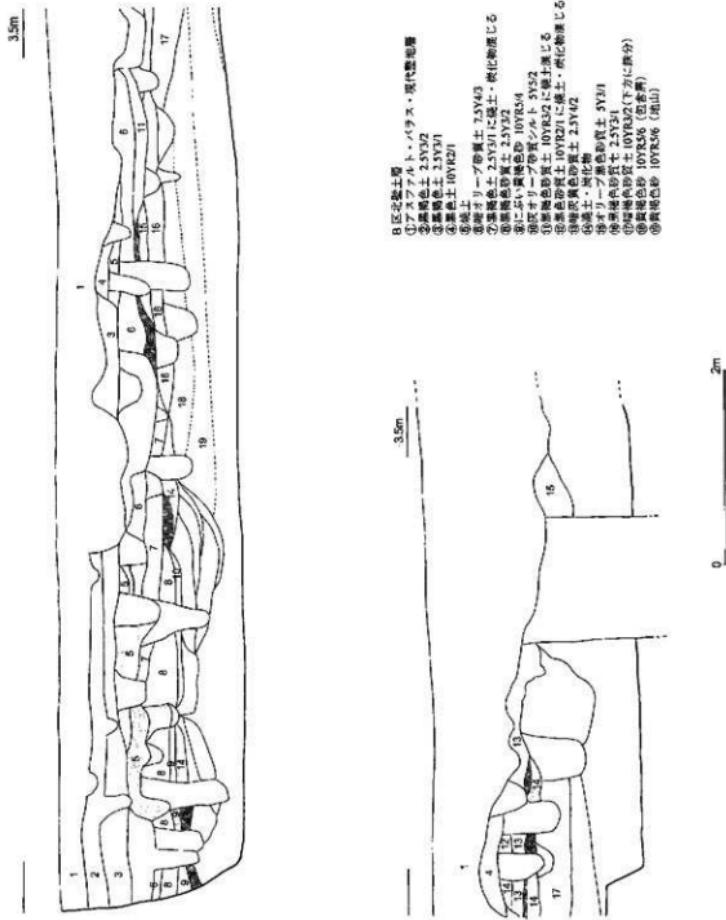
B区は道路が2段に分かれる地点に位置し三角形の調査区を成す。層序は第28~31図に示したとおりである。東壁でみてみると現況の標高は約3.3mであるが、これから標高2.9mまでは現代の整地層となる。(1層) その下に20cm程の黒褐色土が堆積する。(2層) この層は解体時の削平で残らない部分も多い。これ以下に焼土層、炭化物層、暗オリーブ粘質土層の互層となった整地層が遺存状況の良い部分で厚さ約80cm程見られる。(3~22層) 以下、黄褐色粗粒砂、暗褐色粗粒砂、黒褐色砂質土、黄褐色粘質土となり、標高2.0mで黄褐色砂となる。(27・28層) 27層は土質的には地山の28層と区別がつかないが、遺物を包含している。この土層で特徴的なのはA区からの連続性が認められず、少なくとも2層以上の焼土層や焼土や炭化物を含む厚い整地層が見られる点である。そしてこれに伴い複数の遺構面が確認できた。またこの層から出土する陶磁器類には釉がただれている等の2次的な熱を受けたと考えられるものがある。調査は3面で行ったが、調査概要で述べたとおり、未試掘で表土掘削を行った。この段階ではA区の調査成果から、A区と同様で遺構面は地山面の黄褐色砂での1面のみと考えていたことや既存建物解体時の基礎抜き取り作業で上層がかなり荒されていたことにより第1面の確認が遅れてしまいその多くを失ってしまった。このため遺構の大半は第2面で検出されているが本来、第1面のものを多く含むと考えられる。調査は第1面を標高2.4m前後、第2面を2.1m前後、第3面を1.8m前後で設定して行ったが本来の遺構面と対応しきれていない。



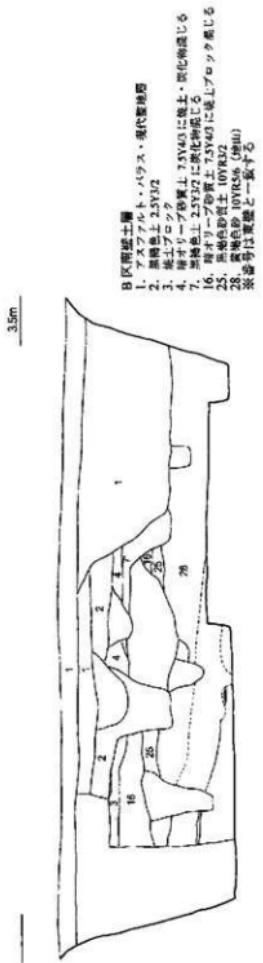
第28図 B区東壁土層図 (1/50)



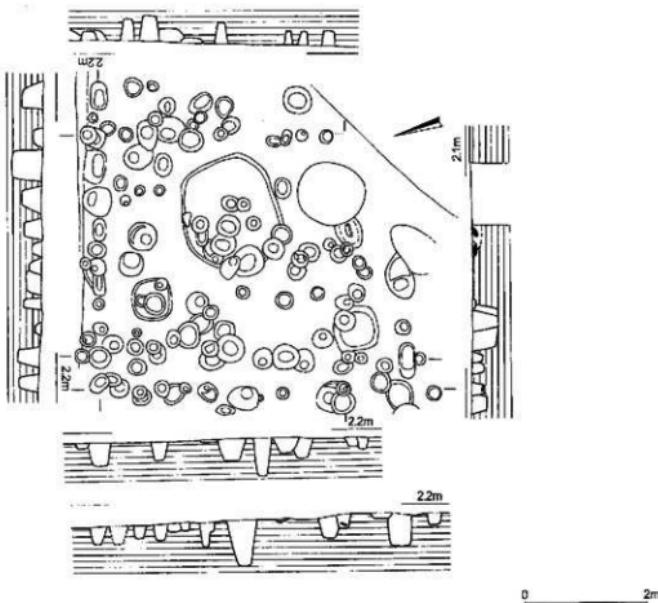
第29図 B区西壁土層図 (1/50)



第30図 B区北壁土層図 (1/50)



第31図 B区南端上層図 (1/50)



第32図 SB697実測図 (1/80)

1) 建物 (SB)

復原したのはSB6971棟のみであるが、同軸方向に柱筋が通っておりさらに数棟存在すると思われる。後述する溝や土坑に同方向に沿うものが見られ関連遺構であろう。尚、A区検出の建物に対応するものは確認されなかった。

SB697 (第32図)

2面検出。調査区中央東に位置する。東西約5m、南北4.2mの底を有する建物に復原したが西側柱穴列が延びており、規模が拡大する可能性がある。同軸状に多数の柱穴が切り合っており、複数回の建て替えがみられる。柱穴それぞれの対応関係は不明。柱穴からは青磁、陶器、底部回転糸切りの土師器等の細片が出上している。

2) 井戸 (S E)

井戸は調査区西側に分布するものが多い。

SE434 (第33図)

2面検出。調査区北西に位置し、北側を切られる。掘方の平面形はやや不整な円形を呈し、径220~250cm、深さ145cmを測る。標高1.9mで段を有し、北寄りに井筒を据える。井筒は幅約10cmの板材を組み合わせた径70cmの桶が用いられる。

出土遺物 (第33図) 11~13は土師器の小皿。復原口径7.6~8.6cm、器高0.9~1.1cmを測る。底部は回転糸切りで12は板状圧痕を有する。14は瓦器碗。復原口径13.6cm、器高4.0cmを測る。調整は外面は口縁部がヨコナデで以下は未調整。内面はミガキを施す。15は白磁の水注。16~18は龍泉窯系青磁で16・17は碗。16はI類で復原口径15.0cmを測る。17はII類。18は坏III類。13世紀後半~14世紀と考えられる。

SE435 (第34図)

2面検出。調査区南西に位置し、西側は調査区外に延びる。掘方の平面形は長方形を呈し、長さ260cm以上、幅260cm、深さ150cmを測る。標高1.2m、1.7mで段を有し、南寄りに井筒を据える径90cmの掘方を有する。井筒は確認できなかった。

出土遺物 (第34図) 19~21は土師器で19・20は小皿。復原口径8.8~10.0cm、器高1.5~1.0cmを測る。底部は回転糸切り。21は坏で復原口径12.8cm、器高2.9cmを測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。22・23は白磁。22は碗IX類。復原口径14.1cm、器高5.6cmを測る。23は皿濯-2 b類。復原口径12.8cm、器高2.6cmを測る。24~26は龍泉窯系青磁。24・25は碗。24はI-1 a類。復原口径16.2cmを測る。25はII類。外面に錫連弁を施す。26は香炉。27・28は陶器。27は盤か。口縁部に目跡を有する。釉は暗赤褐色を呈する。28は鉢。胎土は砂粒が多く、釉は灰オリーブ色を呈する。13世紀後半~14世紀と考えられる。

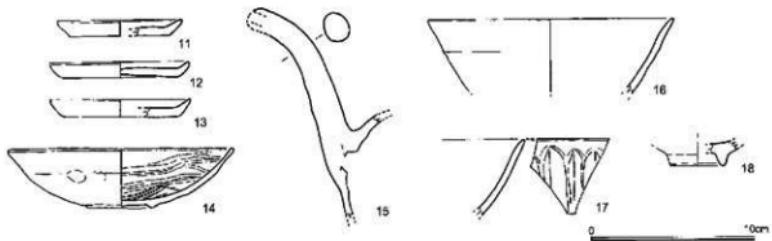
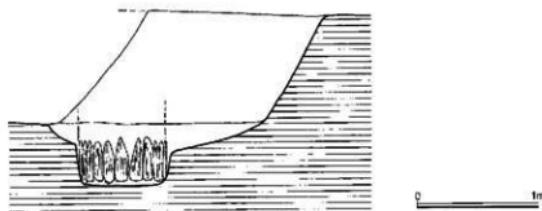
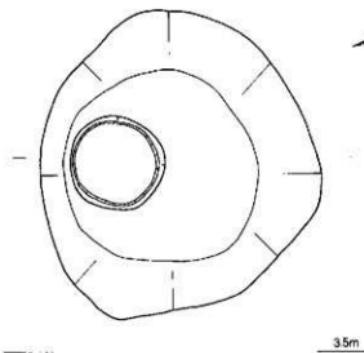
SE438 (第35図)

2面検出。調査区西に位置する。焼上面を切り込む。北側をSE434に切られる。掘方の平面形は不整な楕円形を呈し、径225~250cm、深さ143cmを測る。北側にテラスを有する。南寄りに井筒を据える。井筒は幅約10cmの板材を組み合わせた径70cmのものが用いられる。標高約0.5mで湧水したため完掘できず底面は未確認。掲載した下部の井筒の図は板材を抜き取り、その長さから復原したものである。

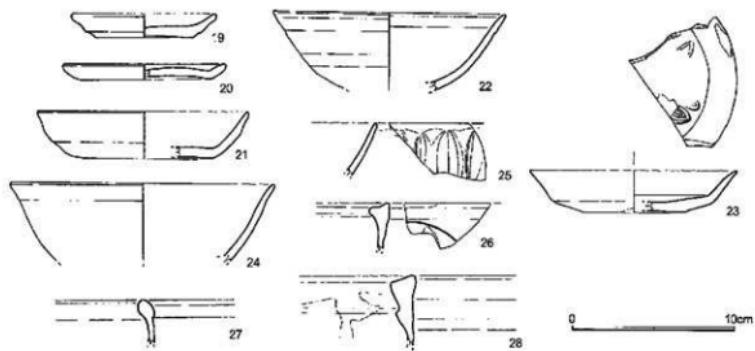
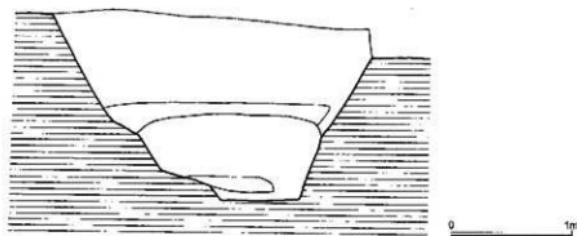
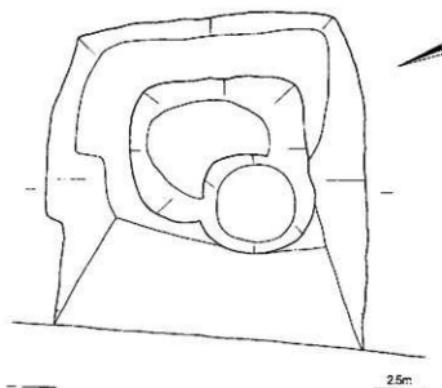
出土遺物 (第36図) 29・30は土師器の小皿。復原口径9.0~8.8cm、器高1.2~1.1cmを測る。底部は回転糸切りで30は板状圧痕を有する。31・32は坏。復原口径14.8~15.0cm、器高2.4~2.5cmを測る。底部は回転糸切り。33は白磁IX類。34~36は龍泉窯系青磁碗。34はI-2類。35はII-c類。口径17.2cm、器高6.7cmを測る。外面に錫連弁を施し、内面見込みに草花文を有する。36はIII-2類。37は土師質の羽釜。外面に煤が付着する。38は陶器。口縁部に目跡を有する。灰色を呈する。39は滑石製石錘。40は銅鏡で皇宋通寶。なお出土鏡について表4に一覧を掲載している。これらから13世紀後半~14世紀と考えられる。

SE439 (第37図)

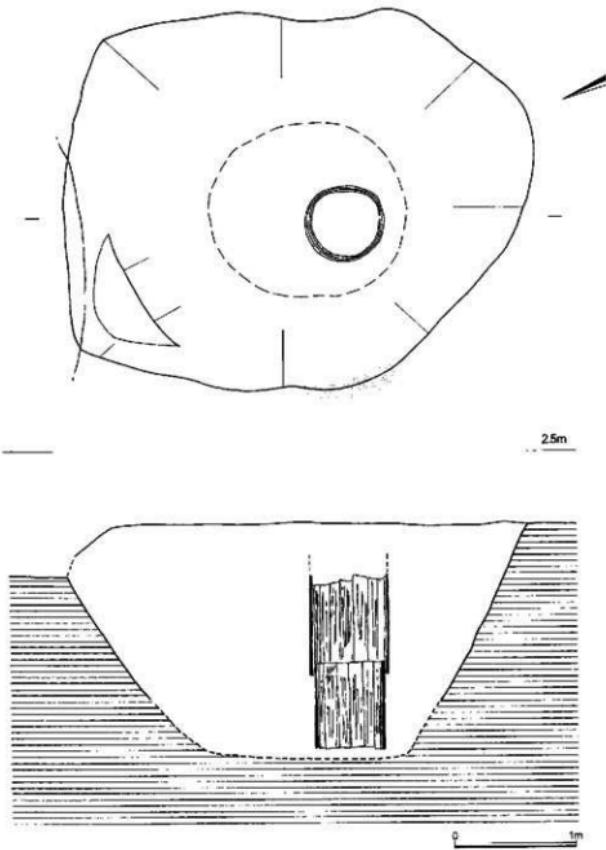
2面検出。調査区南西に位置し、掘方の平面形はやや不整な円形を呈し、長さ382cm、幅270cmを測る。標高0.6mで段を有し、南寄りに井筒を据える。井筒は確認できなかった。最下部は湧水 (標高約0.5m) により完掘できなかった。



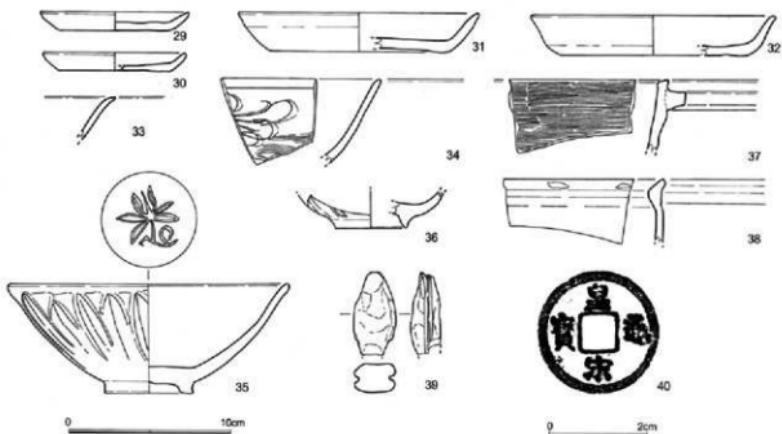
第33図 SE434及び出土遺物実測図 (1/40・1/3)



第34図 SE435及び出土遺物実測図 (1/40・1/3)



第35図 SE438実測図 (1/40)



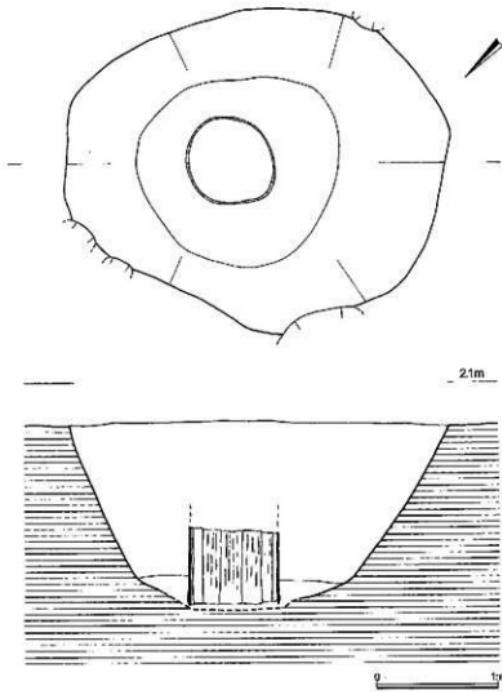
第36図 SE438出土遺物実測図 (1/1 · 1/3)

出土遺物（第38図）41~43は土師器壊。復原口径11.6~12.8cm、器高2.1~2.6cmを測る。底部は回転糸切りで41・42は板状圧痕を有する。44は白磁碗IX類。45~49は同安窯系青磁碗。45は2次的な熱を受けた可能性がある。46は復原口径14.8cmを測る。47は復原口径16.6cmを測る。50は龍泉窯系青磁碗I類。51・52は同安窯系青磁皿I~2b類。復原口径9.8~10.0cm、器高2.4~2.1cmを測る。53は陶器の壺。復原口径14.0cmを測る。口縁部に目跡を有する。釉は灰色を呈する。54は陶器皿。復原口径8.6cm、器高2.8cmを測る。釉は褐色を呈する。55~57は盤或いは鉢の口縁部。55は褐色、56は暗灰黄色を呈する。57は浅黄色を呈し、口縁部に目跡を有する。13世紀後半~14世紀と考えられる。

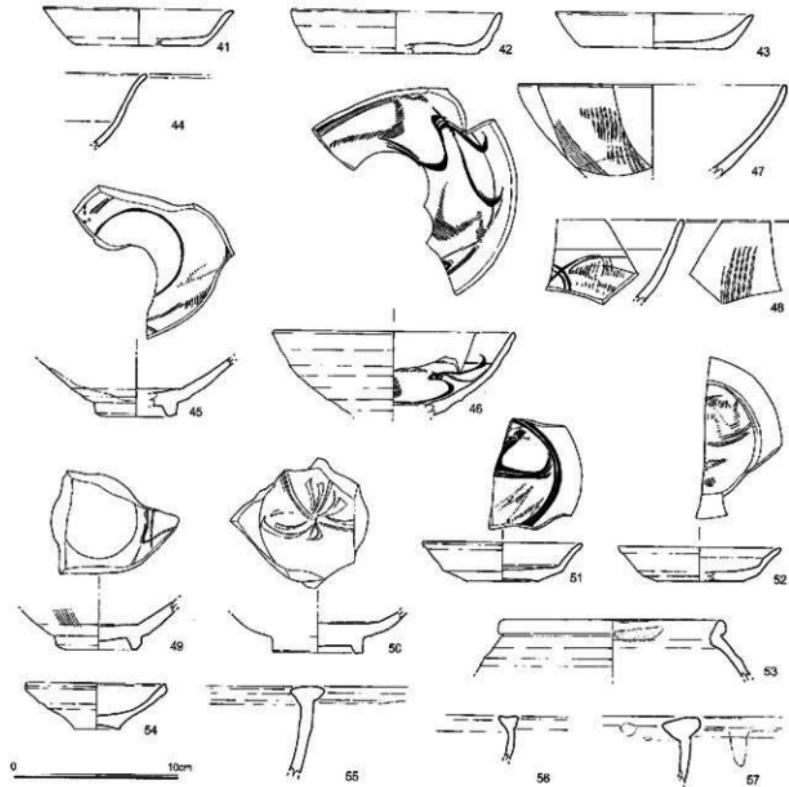
SE477 (第39図)

2面検出。調査区北西に位置し、西側は調査区外に延びる。掘方の平面形は円形か。大きさから井戸と考えられるが井筒は確認できていない。半分が区外のため完掘できなかった。覆土の中層にやや粘性のある炭化物層が厚く堆積している。

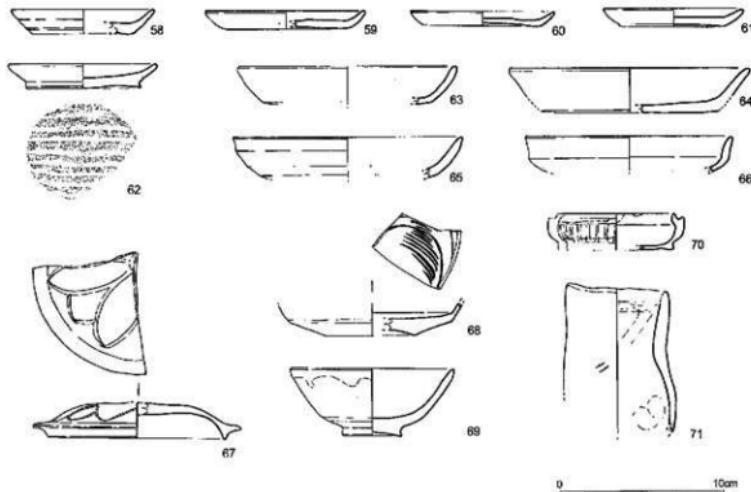
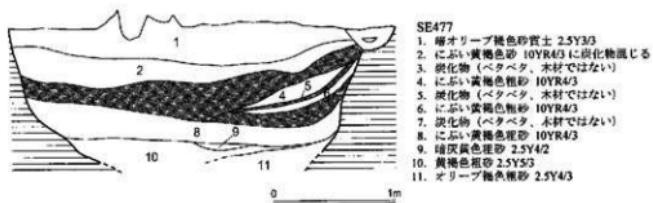
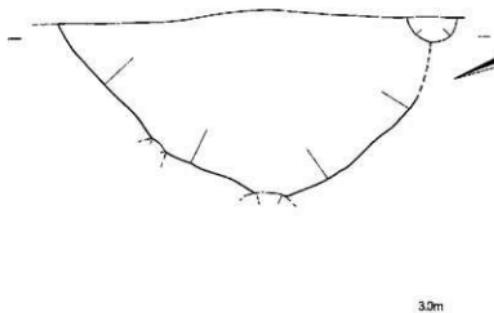
出土遺物（第39・40図）58~62は土師器小皿。復原口径8.6~9.6cm、器高0.9~1.5cmを測る。底部は回転糸切りで59以外は板状圧痕を有する。63~66は土師器壊。復原口径12.6~14.6cm、器高2.2~2.5cmを測る。63~65の底部は回転糸切り。67~69は青磁。67は蓋で復原口径10.8cmを測る。天井部に連弁文を有する。受け部は露胎で橙色に発色する。68は同安窯系の皿。69は龍泉窯系青磁小碗I~1a類。復原口径10.0cm、器高4.1cmを測る。70は青白磁合子の身。復原口径7.2cm、器高2.5cmを測る。71は土師器の鉢。口径6.2cmを測る。調整は口縁部がヨコナデ、内面に指頭圧痕が残る。72は土師器の土鍋。復原口径31.6cmを測る。調整は内外面ともハケメを施す。外面口縁部以下には煤が付着する。13世紀後半~14世紀と考えられる。



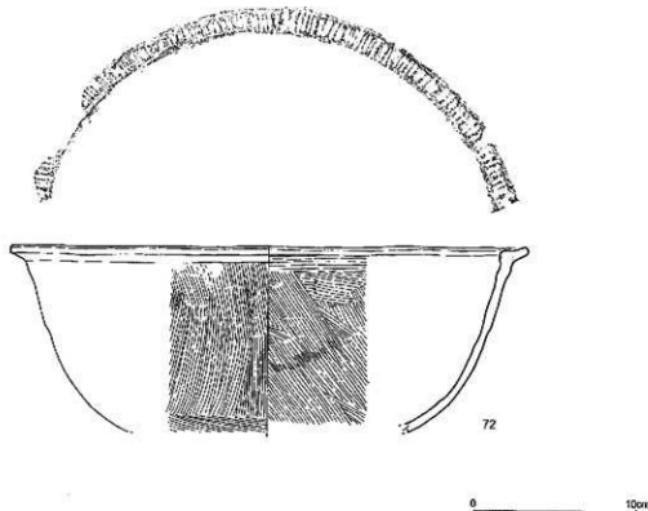
第37図 SE439実測図 (1/40)



第38図 SE439出土遺物実測図 (1/3)



第39図 SE477及び出土遺物実測図 (1/40・1/3)

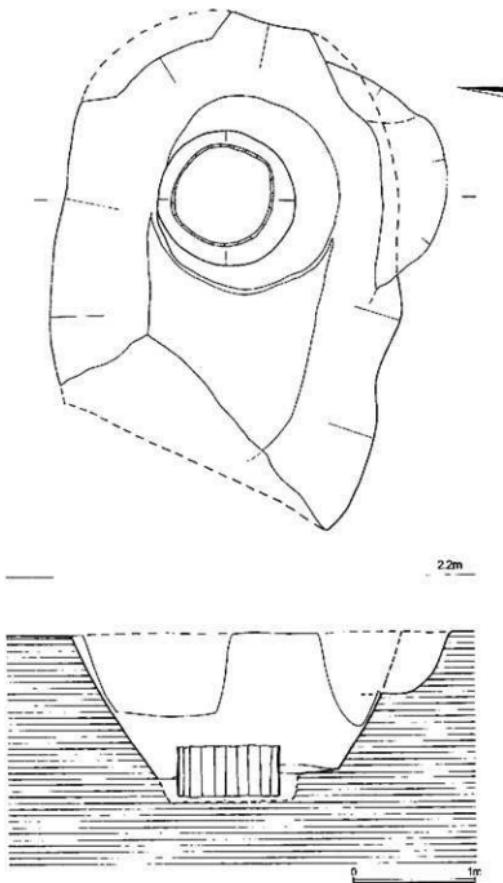


第40図 SE477出土遺物実測図 (1/3)

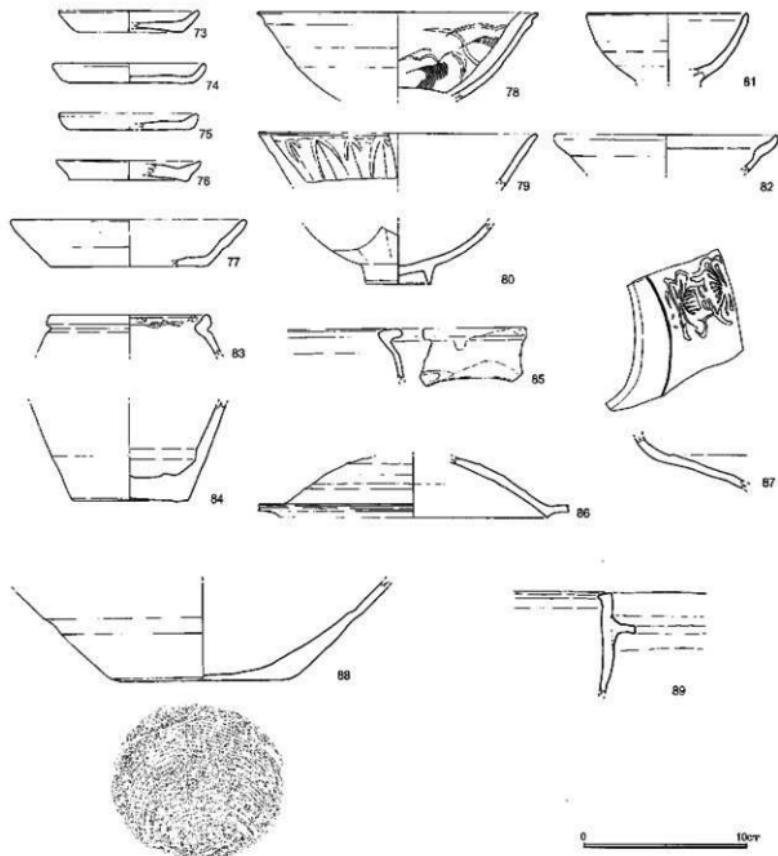
SE478 (第41図)

3面検出。調査区南西に位置する。掘方の平面形は椭円形を呈すると思われる。西側は調査区外に延びる。長さ400cm以上、幅290cm、深さ140cmを測る。標高0.6mで段を有し、東寄りに井筒を据える。井筒は幅約10cmの板材を組み合わせた径80cmの桶が用いられる。最下部は湧水により完掘できなかつた。

出土遺物 (第42図) 73~76は土師器小皿。復原口径8.4~9.4cm、器高1.0~1.3cmを測る。底部は回転糸切りで73のみ板状压痕を有する。77は土師器坏。復原口径14.4cm、器高2.9cmを測る。底部は回転糸切り。内面に煤が付着する。78は白磁碗V-4 c類。復原口径17.2cmを測る。79~82は龍泉窯系青磁。79は碗II類。復原口径17.0cmを測る。外面に鎬連弁を施す。80は皿類。81は小碗。復原口径10.0cmを測る。82は坏III類。復原口径13.6cmを測る。83~87は陶器。83・84は盃。83は復原口径9.4cmを測る。釉はにぶい黄褐色を呈し、口縁部に目跡を有する。84は黒褐色を呈する。85は盤か。86は蓋。復原口径16.8cmを測る。天井部のみ施釉され他は露胎。胎上はにぶい黄褐色、釉は黒褐色を呈する。87は壺で褐色を呈する。88は須恵器の鉢で底部は回転糸切り。89は瓦質の羽釜。13世紀中頃~14世紀と考えられる。



第41図 SE478実測図 (1/40)



第42図 SE478出土遺物実測図 (1/3)

2) 土坑（SK）

土坑は調査区全面で確認できるが、平面形が方形、長方形のものは柱列に平行或いは直交するものが多いようである。

SK273（第43図）

2面検出。調査区中央に位置する。平面形はやや不整な円形を呈し、径40cm前後、深さ10cmを測る。この小穴に頭蓋骨のみが左側頭部を下にして収められていた。骨は頭部のみの遺存で顎部以下は消失していた。また他部分の骨は周辺も含め確認できなかった。収められた人骨は熟年の女性と推定されている。（付論参照）出土状況から頭蓋骨が混入したとは考えられない。遺構の形状、大きさからそれを収めるために掘削されたものであろうが、通常の埋葬遺構とは考え難い。出土遺物は副葬品を含め混入品も認められず、時期は不明である。

SK216（第43図）

1面検出。調査区中央西に位置する。平面形は不整な楕円形を呈し、長さ110cm、幅90cm、深さ30cmを測る。

出土遺物（第44図）90は土師器小皿。復原口径8.0cm、器高1.7cmを測る。底部は回転糸切り。91は染付の碗。92は青磁碗。復原口径14.8cmを測る。

SK218（第43図）

1面検出。調査区中央に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、南北100cm、東西95cm、深さ15cmを測る。

出土遺物（第44図）93は土師器小皿。94は土師器壺。ともに底部は回転糸切り。

SK221（第43図）

1面検出。調査区中央に位置し、両端部を切られる。断面形は半円形を呈し、幅75cm、深さ19cmを測る。

出土遺物（第44図）95は龍泉窯系青磁壺III-1a類。釉は厚く明オリーブ灰色を呈する。口径8.6cm、器高3.4cmを測る。

SK222（第43図）

1面検出。調査区南に位置する。平面形は楕円形を呈し、長さ127cm、幅80cm程度、深さ35cmを測る。

出土遺物（第44図）96は土師器小皿。復原口径10.2cm、器高2.3cmを測る。底部は回転糸切り。97は白磁碗IX類。98は染付皿。99は青磁碗。復原口径18.6cmを測る。100は青磁香炉。101は龍泉窯系青磁碗I類。

SK223（第43図）

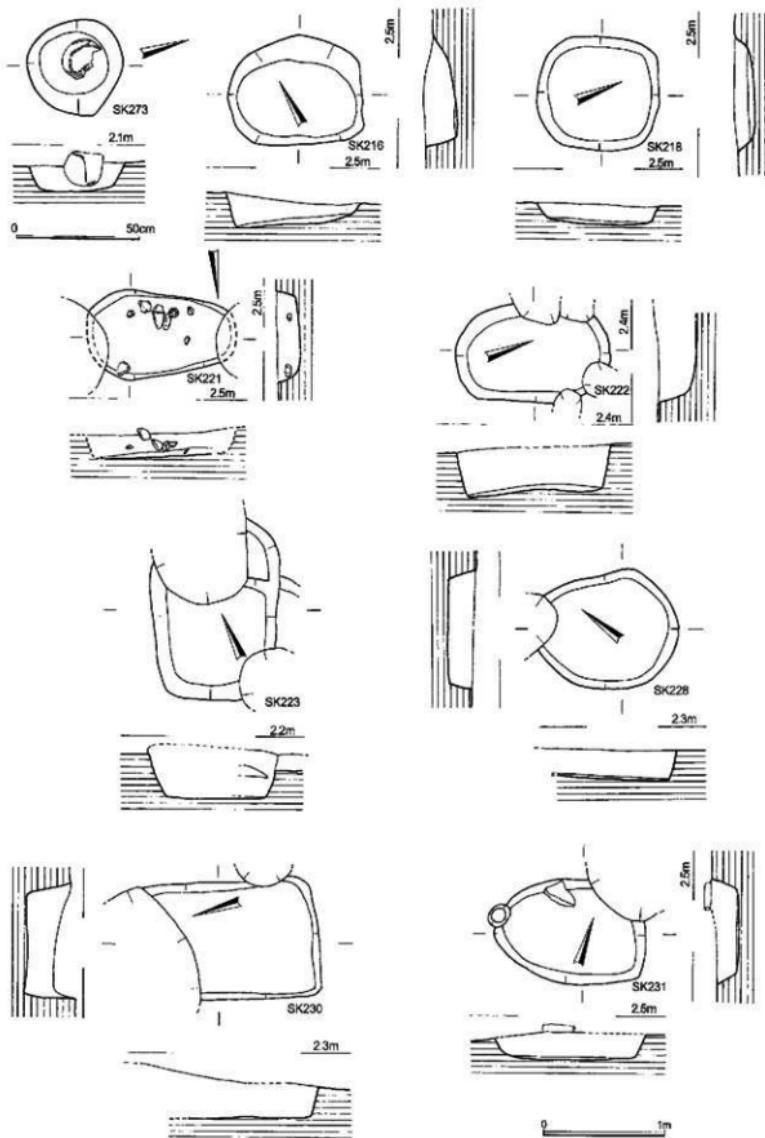
1面検出。調査区南に位置する。平面形は長方形を呈し、北側にテラスを有する。長さ150cm以上、幅110cm、深さ40cmを測る。

出土遺物（第44図）102は土師器小皿。復原口径8.6cm、器高1.0cmを測る。底部は回転糸切り。

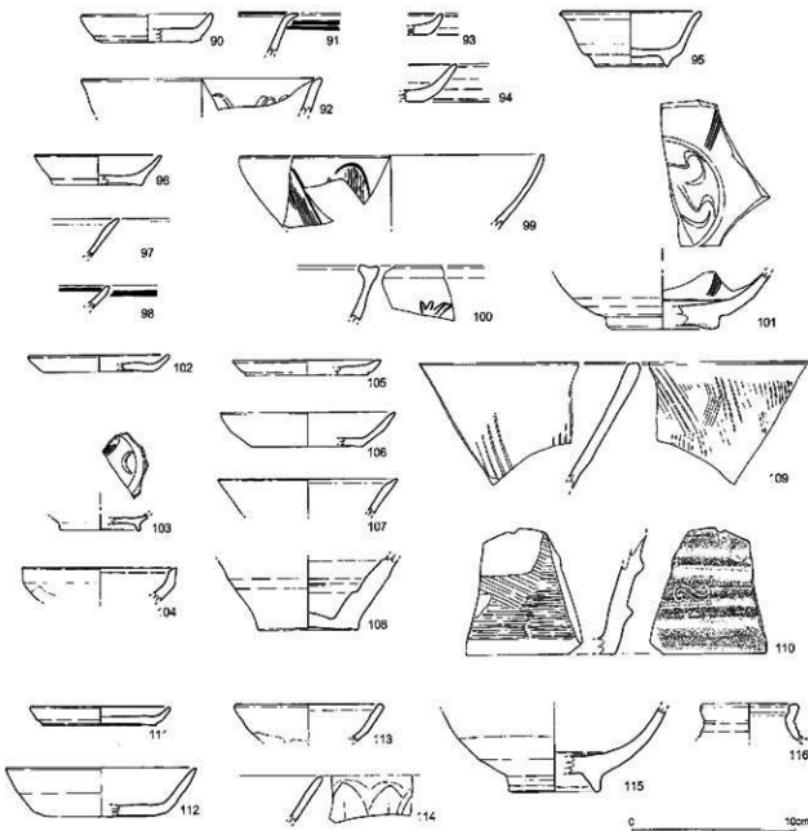
SK228（第43図）

1面検出。調査区南に位置する。平面形はやや不整な楕円形を呈し、長さ110cm以上、幅98cm、深さ24cmを測る。

出土遺物（第44図）103は白磁の高台部。器壁は薄く、見込みに型文を施す。104は大口茶碗。復原口径9.3cmを測る。



第43図 SK273・216・218・221・222・223・228・230・231実測図 (1/20・1/40)



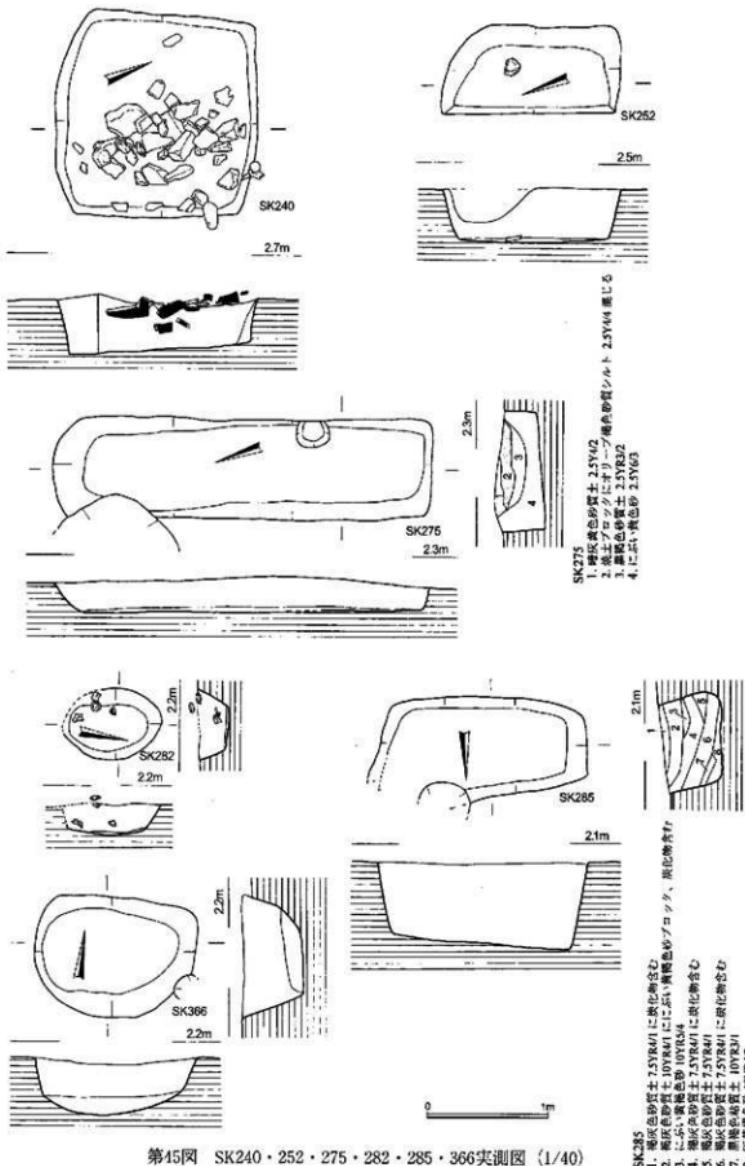
第44図 SK216・218・221・222・223・228・230・231出土遺物実測図 (1/3)

SK230 (第43図)

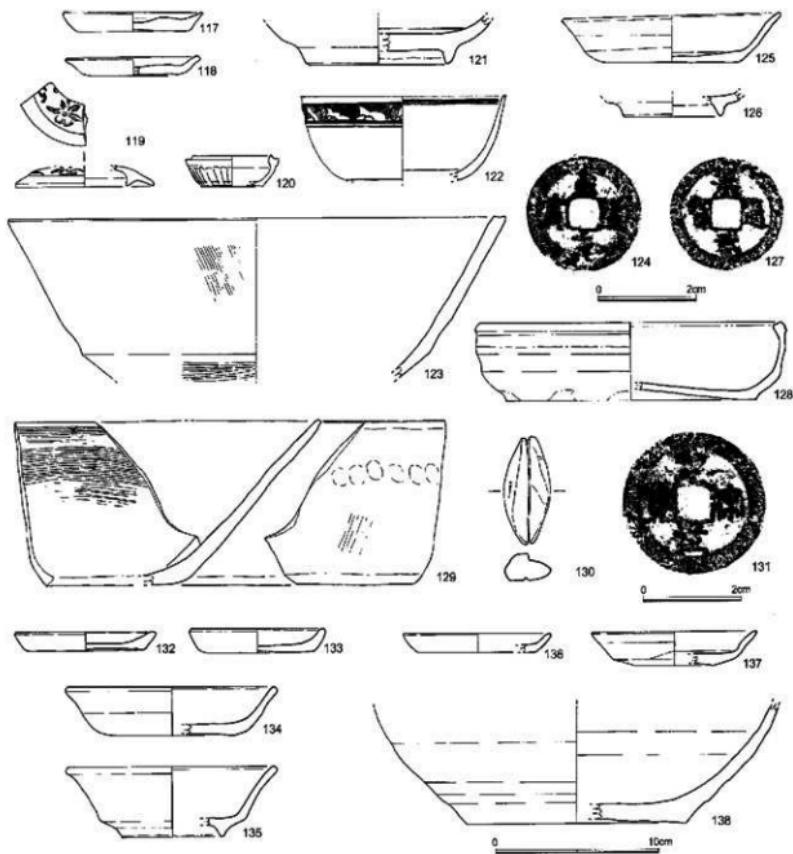
1面検出。調査区南に位置し、SK231に切られる。平面形は長方形を呈し、幅95cm、深さ35cmを測る。出土遺物（第44図）105は土師器小皿。復原口径9.0cm、器高0.9cmを測る。底部は回転糸切り。106は土師器坏。107は白磁皿。108は陶器壺。釉は灰～灰オリーブ色を呈する。109は瓦質擂鉢。110は瓦質火鉢。

SK231 (第43図)

1面検出。SK230を切って位置する。平面形は橢円形を呈し、長さ122cm、幅88cm、深さ20cmを測る。出土遺物（第44図）111は土師器小皿。復原口径8.4cm、器高1.2cmを測る。底部は回転糸切り。112は土師器坏。復原口径11.6cm、器高2.9cmを測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。113は白磁



第45図 SK240・252・275・282・285・366実測図 (1/40)



第46図 SK240・252・275・282出土遺物実測図 (1/1・1/3)

III. 復原口径9.0cmを測る。114は龍泉窯系青磁碗。115は碗。116は陶器の壺。

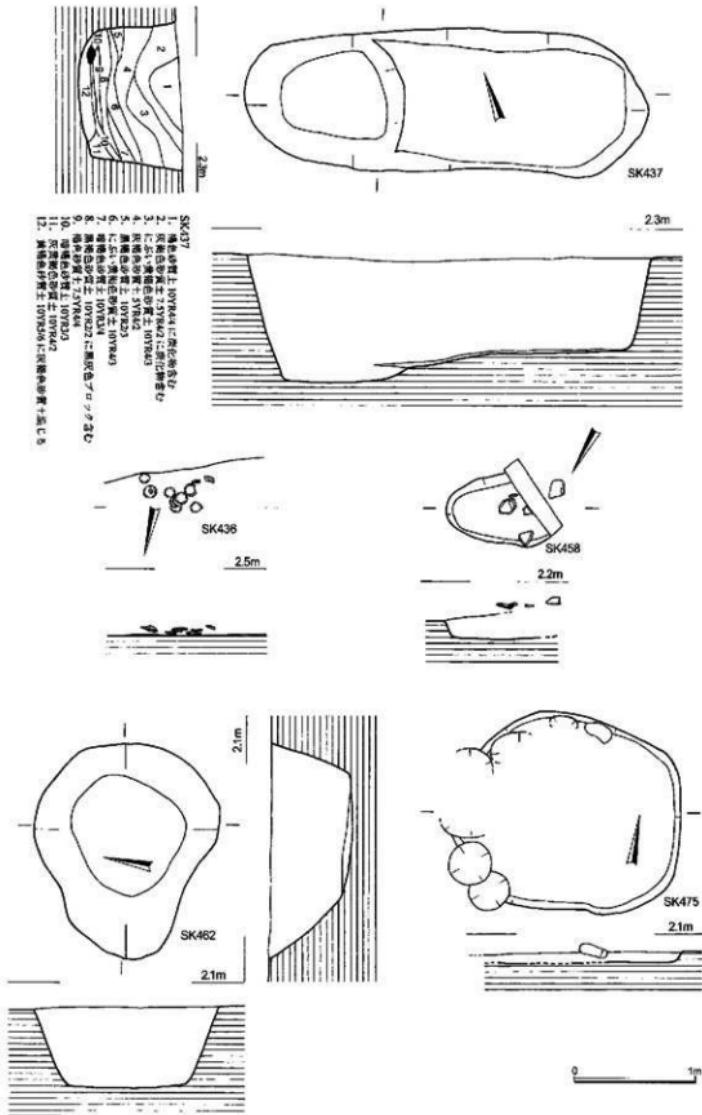
SK240 (第45図)

1面検出。調査区南に位置する。平面形は方形を呈し、一辺140~160cm、深さ50cmを測る。10~35cmの大の石が廃棄されていた。

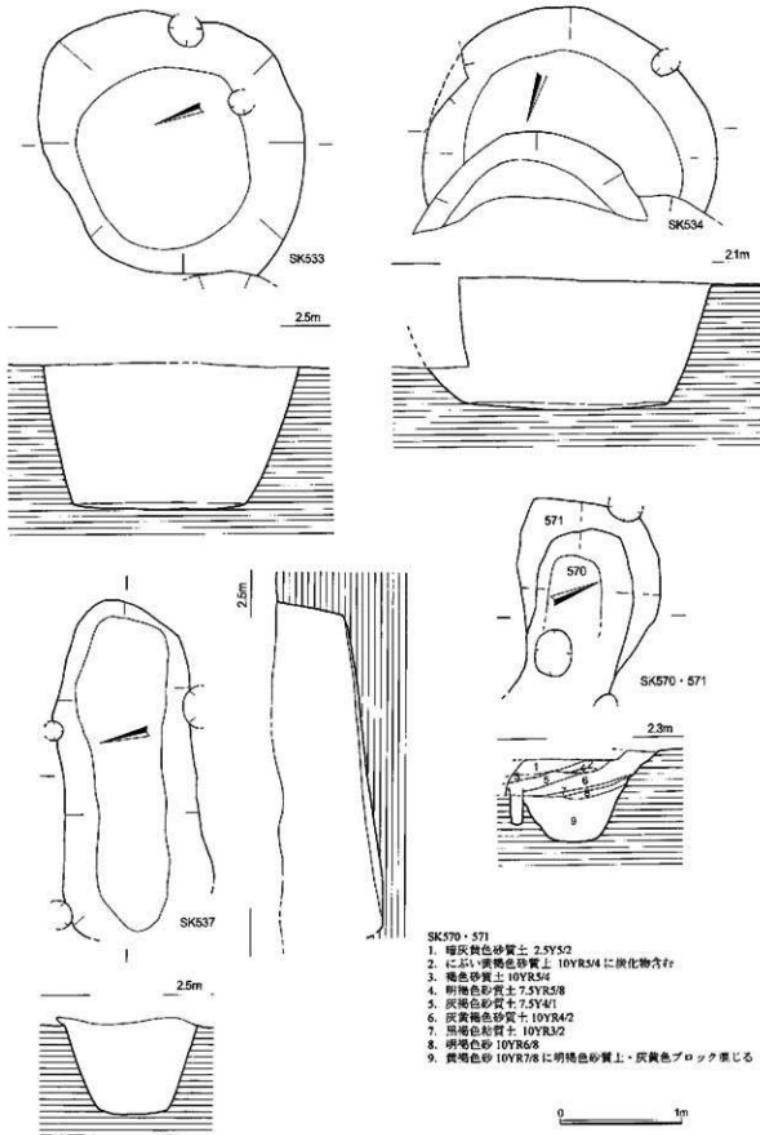
出土遺物 (第46図) 117・118は土師器小皿。口径8.4・8.2cm、器高1.3・1.1cmを測る。底部は回転糸切り。119は青白磁の合子蓋。120は白磁の合子身。121は青磁碗。122は肥前系染付の碗。復原口径12.6cmを測る。123は瓦質の鉢。復原口径30.4cmを測る。124は銅錢で至道元寶。

SK252 (第45図)

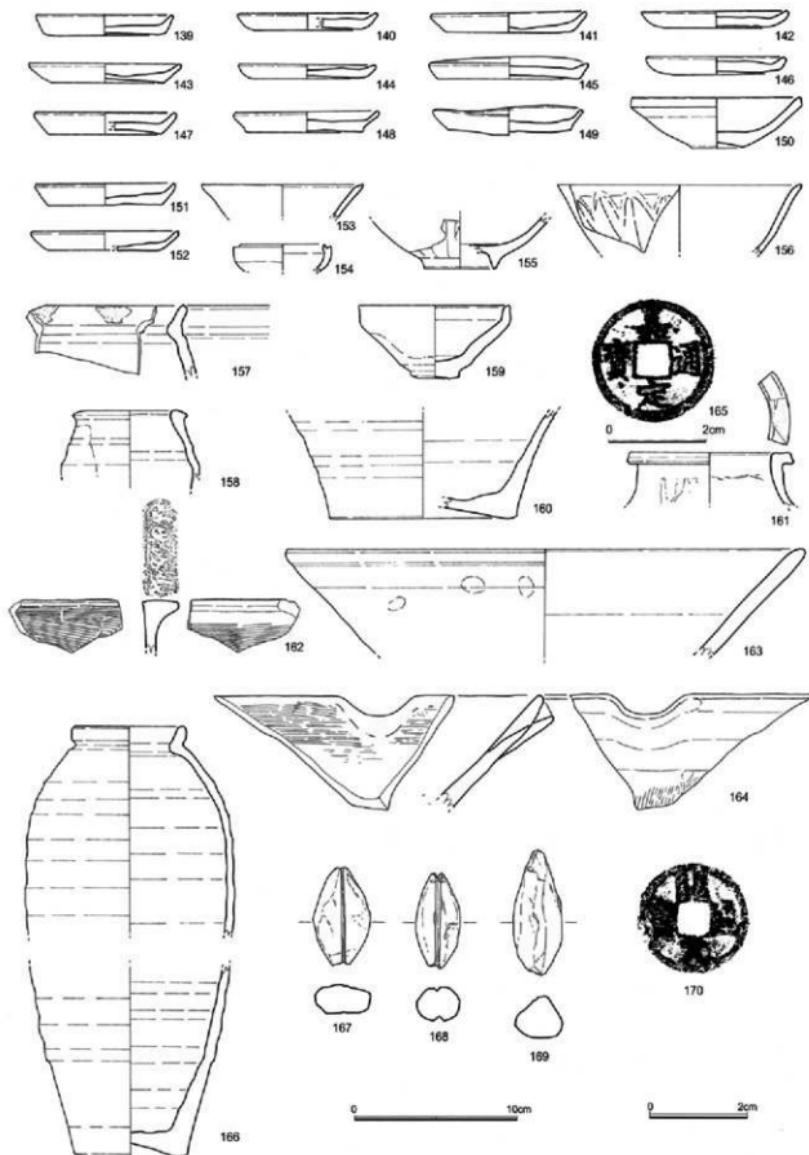
1面検出。調査区中央西に位置する。平面形は長方形か。長さ148cm、深さ42cmを測る。



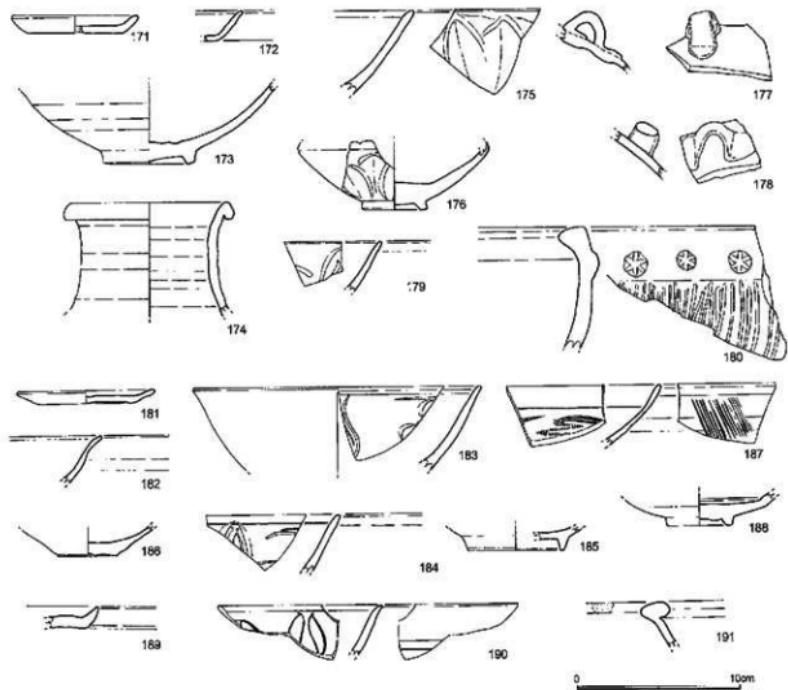
第47図 SK436・437・458・462・475実測図 (1/40)



第48図 SK533・534・537・570・571実測図 (1/40)



第49図 SK436・437・458出土遺物実測図 (1/1・1/3)



第50図 SK462・475・534・537・570出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物（第46図）125は土師器坏。復原口径13.2cm、器高3.0cmを測る。底部は回転糸切りで板状に痕を有する。126は青磁碗。127は銅錢で洪武通寶。

SK275 (第45回)

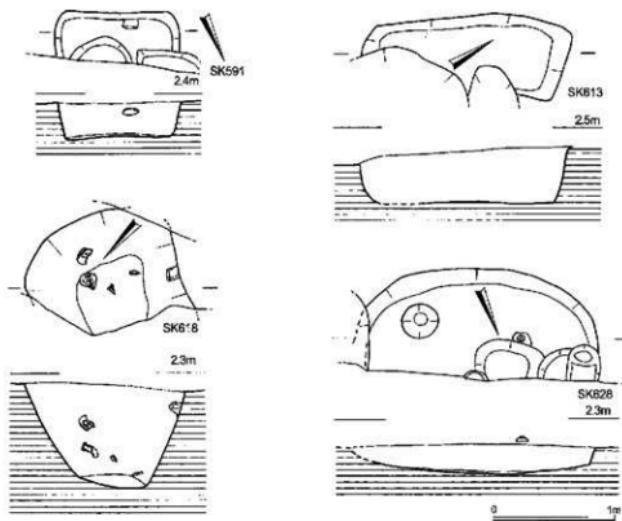
調査区中央に位置する。平面形は長方形を呈し、長さ308cm、幅80cm、深さ25cmを測る。主軸が建物と同方向であり関連遺構の可能性がある。覆土には焼土ブロックを多量に含んでいた。

出土遺物（第46図）128は陶器の小盤。復原口径19.0cm、器高4.8cmを測る。釉は純い黄色を呈する。129は瓦質の鉢。130は滑石製石錘。131は銅鏡で聖壯元寶。

SK282 (第45図)

2面検出。調査区中央に位置する。平面形は梢円形を呈し、長さ80cm、幅58cm、深さ26cmを測る。覆土には焼土・炭化物を多量に含んでいた。

出土遺物(第46図)132・133は土師器小皿。口径8.6・8.3cm、器高1.2・1.5cmを測る。底部は回転糸切りで133は板状圧痕を有する。134は上師器坏。復原口径12.8cm、器高3.0cmを測る。底部は回転糸切り。135は龍泉窯系青磁坏III-a類。復原口径12.8cm、器高4.3cmを測る。



第51図 SK591・613・618・628実測図 (1/40)

SK285 (第45図)

2面検出。調査区北東に位置する。平面形は長方形を呈し、縁が立つ。長さ170cm、幅75cm、深さ75cmを測る。

出土遺物（第46図）136は十節器小皿。復原口径9.0cm、器高1.2cmを測る。底部は回転糸切り。137は同安窯系青磁皿I-1a類。復原口径10.0cm、器高2.1cmを測る。138は無釉陶器の鉢。

SK366 (第45図)

2面検出。調査区中央に位置する。平面形はやや不整な楕円形を呈し、長さ133cm、幅102cm、深さ50cmを測る。遺物は底部回転糸切りの土師器坏、陶器の耳壺が出土している。

SK436 (第47図)

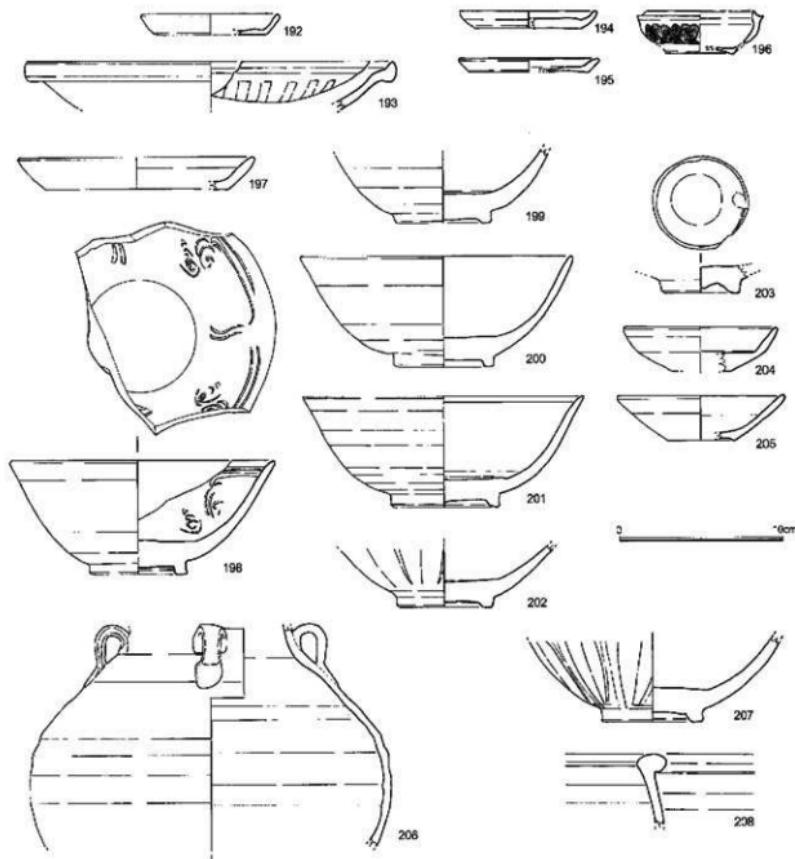
2面検出。調査区東に位置する。土器が出土するまで造構は確認できなかったが土器の出土状況から土坑と思われる。

出土遺物（第49図）139～149は土師器小皿。復原口径8.4～10.3cm、器高0.9～1.4cmを測る。底部は回転糸切りで139・141・143・146・147は板状圧痕を有する。150は陶器皿。口径10.3cm、器高3.1cmを測る。釉はぶい赤褐色を呈する。

SK437 (第47図)

2面検出。調査区中央に位置しSK275を切る。平面形は長方形を呈し西側が1段低くなる。長さ330cm、幅120cm、深さ115cmを測る。

出土遺物（第49図）151・152は土師器小皿。復原口径8.6・9.0cm、器高1.3・1.2cmを測る。底部は回転糸切り。153は白磁皿II類。復原口径10.0cmを測る。154は白磁合子身。復原口径5.0cmを測る。155・156は龍泉窯系青磁碗。155はII-2類。156はII-b類。復原口径15.0cmを測る。157～161は陶器。

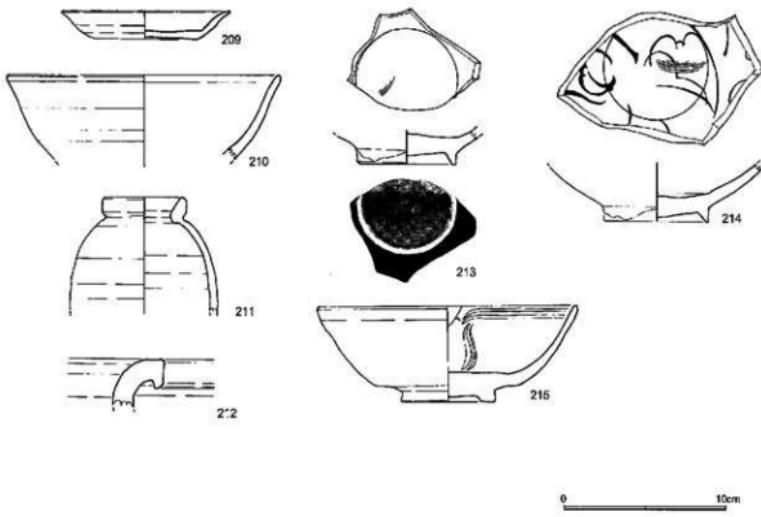


第52図 SK591・613・618・628出土遺物実測図 (1/3)

157は口縁部に目跡を有する。釉は暗褐色を呈する。158は壺で復原口径7.0cmを測る。釉は暗褐色を呈する。2次的な熱を受けたためか内面の一部が赤変する。159は犬口茶碗。復原口径9.4cm、器高4.9cmを測る。釉は黒～黒褐色を呈す。160は壺か。161は壺。復原口径9.8cmを測り、口縁部に目跡を有する。釉は黒褐色を呈する。162は土師質の土鍋。163・164は須恵質の鉢。165は銅鏡で嘉定通寶。SK458 (第47図)

2面検出。調査区中央東に位置する。平面形は不整な指円形を呈し、幅60cm程度、深さ20cmを測る。遺構上面には焼土層が覆っていた。

出土遺物 (第49図) 166は陶器の壺。復原口径7.0cmを測る。釉は灰黄褐色を呈する。167～169は滑



第53図 SK出土遺物実測図 (1/3)

石製石錘。169は未製品か。170は銅鏡で開元通寶。

SK462 (第47図)

2面検出。調査区中央西に位置する。平面形は不整な楕円形を呈し、長さ175cm、幅150cm、深さ63cmを測る。

出土遺物（第50図）171は土師器小皿。復原口径7.6cm、器高1.1cmを測る。底部は回転糸切り。172～174は白磁。172は皿IX類。173は碗。174は壺。175・176は龍泉窯系青磁。175は碗II-b類。176は束口碗II-b類。177・178は陶器の耳壺。釉は177は褐色、178は暗褐色を呈する。

SK475 (第47図)

2面検出。調査区中央東に位置する。平面形は不整な楕円形を呈し、長さ160cm以上、幅162cm、深さ10cmを測る。

出土遺物（第50図）179は龍泉窯系青磁碗。180は瓦質火鉢。

SK533 (第48図)

3面検出。調査区南に位置する。平面形はやや不整な楕円形を呈し、長さ250cm、幅205cm、深さ120cmを測る。遺物は白磁、同安窯系青磁碗、瓦器椀、底部回転糸切りの土師器、陶器等の細片が出土している。

SK534 (第48図)

3面検出。調査区南に位置する。平面形は円形か。幅240cm、深さ105cmを測る。

出土遺物（第50図）181は土師器小皿。復原口径8.4cm、器高0.8cmを測る。底部は回転糸切り。182は白磁碗IX類。183～185は龍泉窯系青磁。183は碗I-4類。復原口径17.6cmを測る。184は碗I-2

類。185は杯Ⅲ類。186は陶器の皿。釉は黒褐色を呈す。2次的な熱を受けた可能性がある。

SK537 (第48図)

3面検出。調査区東に位置する。平面形は不整な長方形を呈し、長さ270cm以上、幅110cm、深さ80cmを測る。

出土遺物 (第50図) 187は同安窯系青磁碗。188は碗か。

SK570 (第48図)

1面検出。調査区北に位置する。SK571を切られる。SK571の中に取まるため当初は気付かなかった。平面形は隅丸長方形か。

出土遺物 (第50図) 189は土師器小皿。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。190は龍泉窯系青磁碗I-2類。191は陶器。黒褐色を呈し、口縁部に目跡を有する。

SK571 (第48図)

1面検出。SK570を切り、南側を切られる。下部にSK570が存在したため底面は断面でしか確認できていない。遺物は土師器の二鍋、青磁、陶器の細片が出士している。

SK591 (第51図)

1面検出。調査区北に位置する。北側を切られる。平面形は方形か。幅100cm、深さ30cmを測る。

出土遺物 (第52図) 192は土師器小皿。復原口径8.4cm、器高1.2cmを測る。底部は回転糸切り。193は青磁の盤。復原口径22.6cmを測る。

SK613 (第51図)

1面検出。調査区北に位置する。平面形はやや不整な長方形を呈し、東側長辺を切られる。長さ170cm、幅65cm程度、深さ45cmを測る。

出土遺物 (第52図) 194・195は土師器小皿。復原口径8.4・8.6cm、器高1.1・0.8cmを測る。底部は回転糸切り。196は白磁で合子身。復原口径7.6cmを測る。

SK618 (第51図)

1面検出。調査区北に位置する。平面形は方形か。長さ140cm、深さ85cmを測る。

出土遺物 (第52図) 197は土師器坏で復原口径15.4cm、器高2.0cmを測る。198~202は龍泉窯系青磁碗。198はI-4-a類。復原口径16.0cm、器高7.0cmを測る。199~201はI-1-a類。200が復原口径16.6cm、器高6.8cm、201が口径17.1cm、器高6.8cmを測る。202はII-5類。203は碗底部の周縁を打ち欠いて円盤状に加工したもの。204は龍泉窯系青磁皿。復原口径9.4cmを測る。205は陶器の皿。復原口径10.2cm、器高2.8cmを測る。釉は暗褐色を呈する。206は耳壺で釉は暗オリーブ色を呈する。

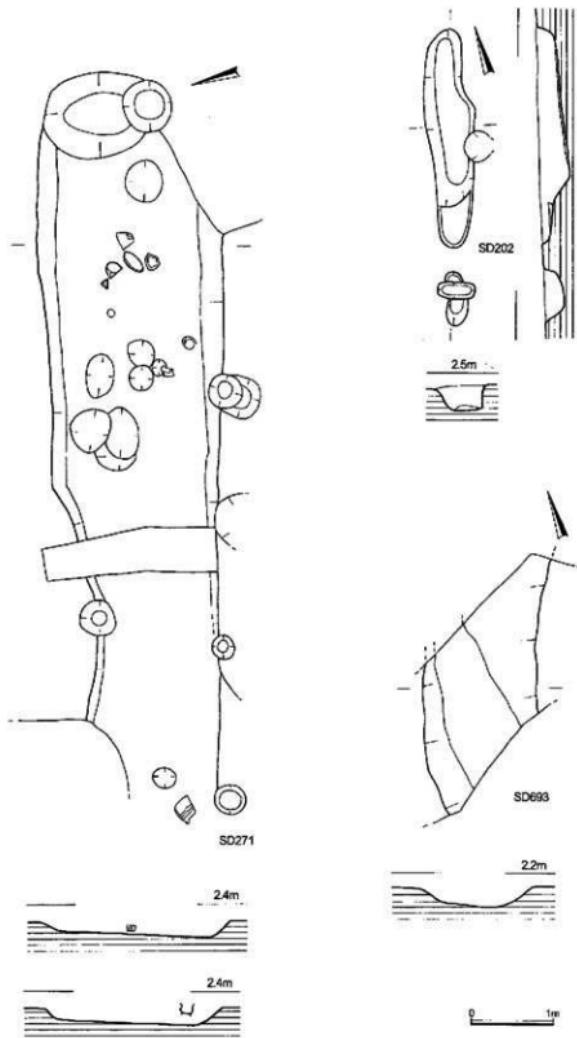
SK628 (第51図)

2面検出。調査区北に位置する。平面形は稍凹形か。北側を切られる。幅200cm程度、深さ27cmを測る。

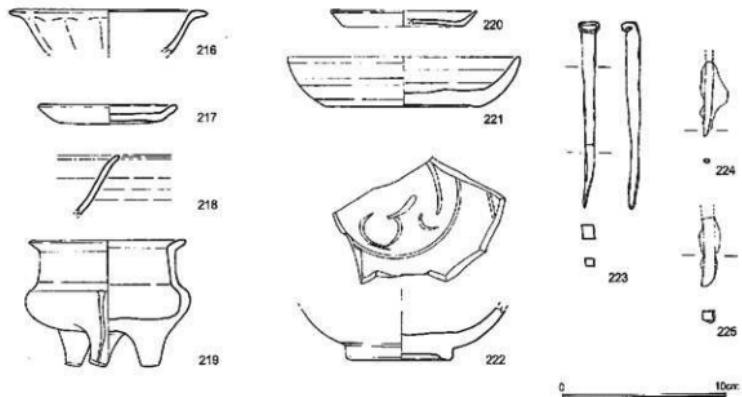
出土遺物 (第52図) 207は龍泉窯系青磁碗II-b類。208は陶器の鉢。釉は暗赤褐色を呈する。

その他の土坑出土遺物 (第53図)

209~212はSK661出土。209は口禿の皿。復原口径10.6cm、器高1.7cmを測る。210は龍泉窯系青磁碗I-1-a類。211は陶器の壺で釉は暗褐色を呈する。212は須恵質の壺。213・214はSK680出土。白磁碗は外底部に墨書きを有する。215はSK692出土。龍泉窯系青磁碗I-4-a類。復原口径16.0cm、器高5.9cmを測る。



第54図 SD202・271・693実測図 (1/40)



第55図 SD271 · 693出土物実測図 (1/3)

4) 溝状造構 (SD)

SD202 (第54図)

1面検出。調査区西に位置する。上層の焼上を切り込む。幅40cm前後、深さ25cmを測る。

出土遺物 (第55図) 216は龍泉窯系青磁壊。Ⅲ-4類か。復原口径12.0cm、器高3.7cmを測る。外面はにぶい簞連弁文か。他に土師器、陶器の細片が出土している。

SD271 (第54図)

2面検出。調査区北、SB697の北に沿って位置し、SK284に切られる。幅150cm、深さ10cmを測る。位置と方向から建物に関連する可能性が高い。底面は炭化物が覆っていた。

出土遺物 (第55図) 217は土師器小皿。口径8.4cm、器高1.2cmを測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。218は白磁碗Ⅴ類。219は青磁香炉。口径9.5cm、器高7.7cmを測る。釉は緑灰色を呈する。口縁下や底部の釉がややただれおり、2次的な熱を受けた可能性がある。他に赤変した土壁片状のものが出土している。

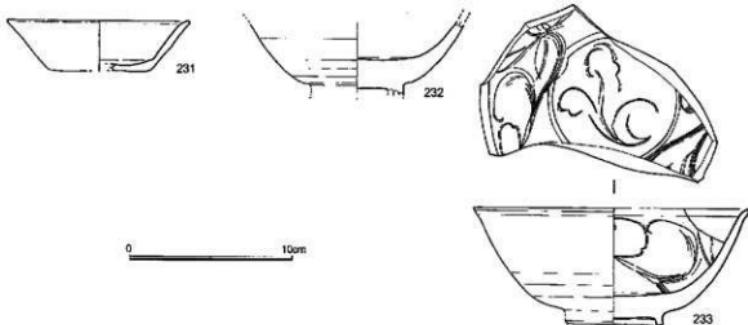
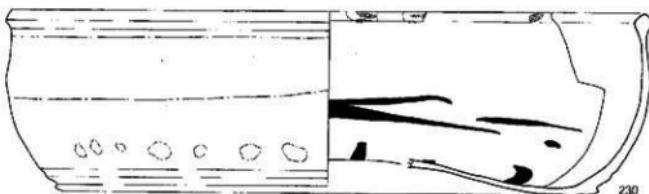
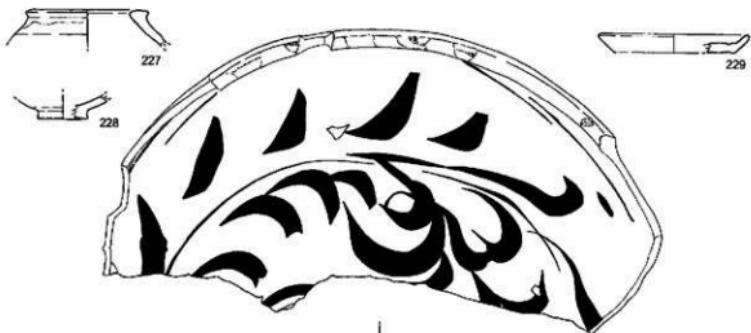
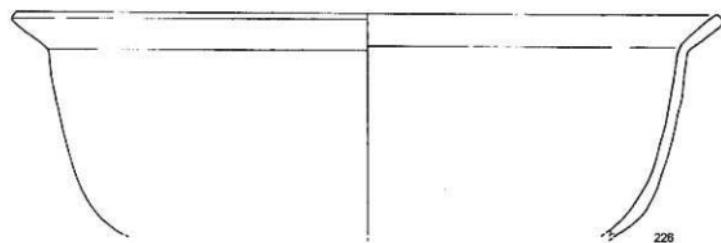
SD693 (第54図)

1面検出。調査区北に位置する。幅95cm、深さ16cmを測る。

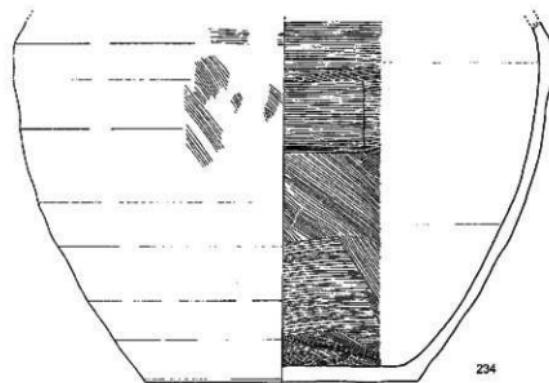
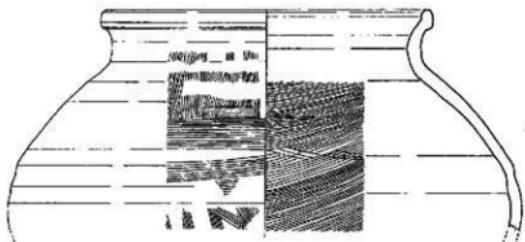
出土遺物 (第55図) 220は土師器小皿。復原口径9.0cm、器高1.0cmを測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。221は土師器壊で口径14.2cm、器高3.0cmを測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。222は龍泉窯系青磁壊I-2類。223-225は鉄釘。223は長さ11.4cmを測る。

5) その他の出土遺物 (第56~60図)

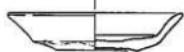
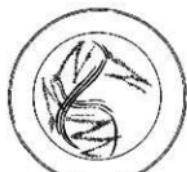
226はSP236出土。土師質の土鍋。復原口径43.6cmを測る。外面には厚く煤が付着する。内面は強いナデを施す。227はSP263出土。陶器の壺で復原口径7.4cmを測る。釉は黒褐色を呈する。228は龍泉窯系青磁の小碗。229・230はSP540出土。229は土師器小皿で復原口径9.2cm、器高1.0cmを測る。底部は回転糸切り。230は陶器の黄釉鉄絵盤I-2b類。復原口径39.6cm、器高11.2cmを測る。胎土



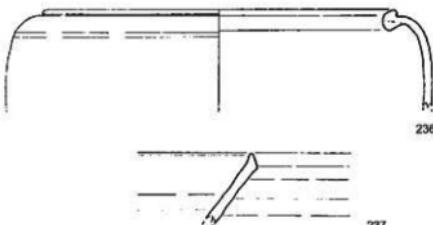
第56図 SP出土遺物 (1/3)



234



235



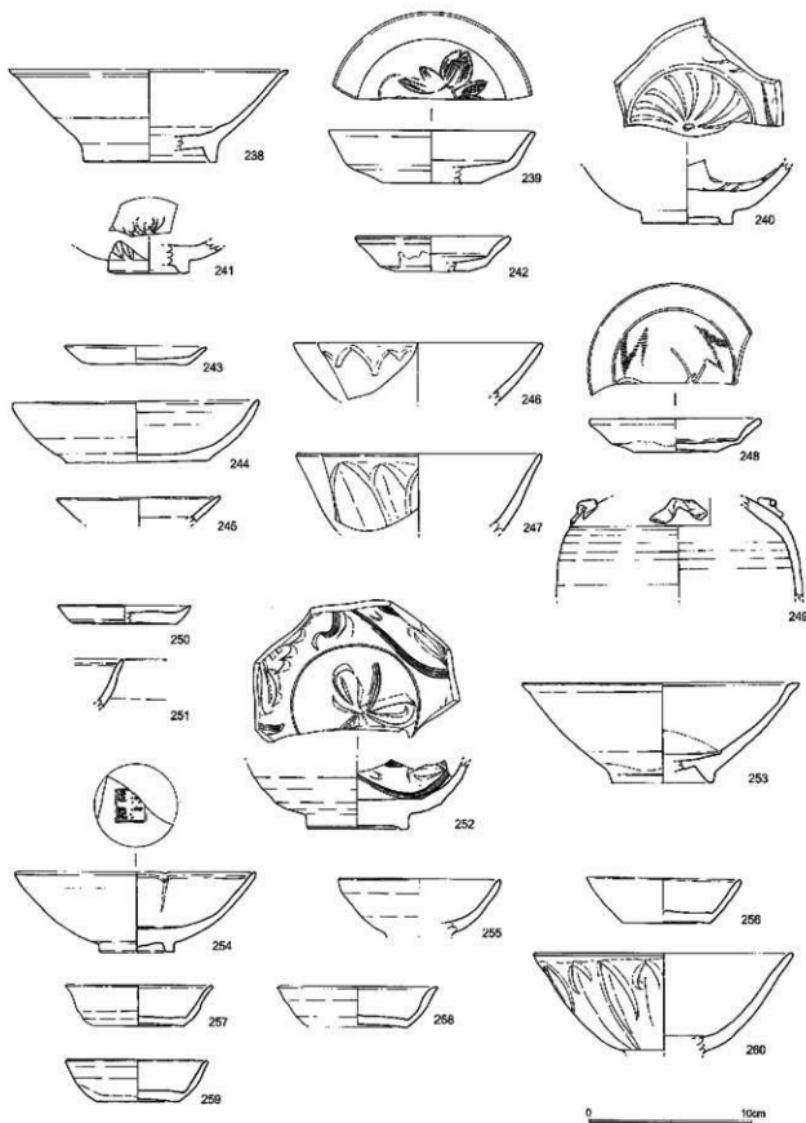
236



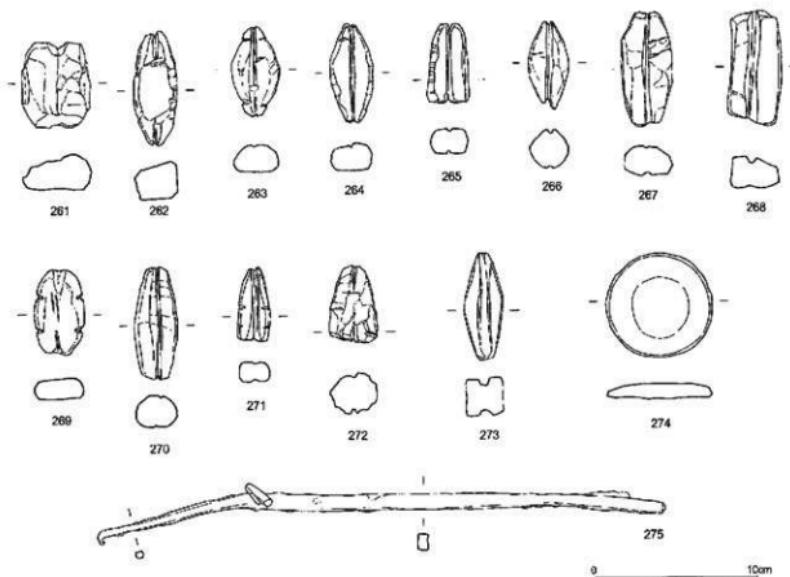
237

0 10cm

第57図 その他の出土遺物① (1/3)



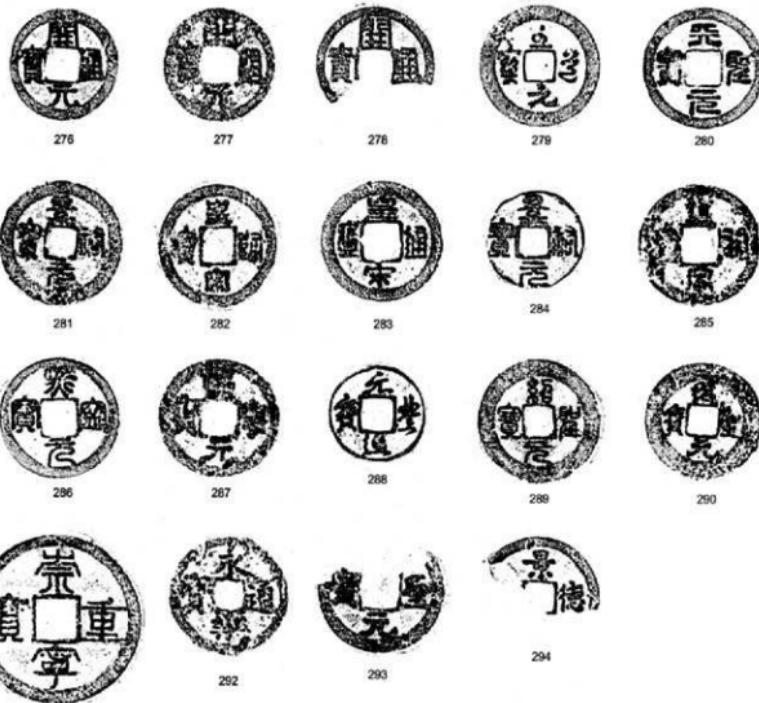
第58図 その他の出土遺物② (1/3)



第59図 その他の出土遺物③ (1/3)

| 報告書番号 | 実測番号 | 遺構 | 層位・R番号 | 遺物の種類 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 重さ(g) | 備考 |
|-------|------|-----------------|--------|-------|--------|-------|-------|-------|
| 8 | 271 | SK151 | | 石鋸 | 3.7 | 2.7 | 17 | |
| 130 | 81 | SK275 | | 石鋸 | 6.6 | 2.8 | 42 | |
| 167 | 144 | SK458 | | 石鋸 | 5.9 | 3.5 | 49 | |
| 168 | 145 | SK458 | | 石鋸 | 5.8 | 2.7 | 40 | |
| 169 | 146 | SK458 | 付近 | 石鋸 | 7.1 | 3.0 | 59 | 未製品 |
| 261 | 252 | SP207 | | 石鋸 | 5.3 | 4.1 | 66 | |
| 262 | 253 | SP512 | | 石鋸 | 7.0 | 2.6 | 66 | |
| 263 | 254 | SP328 | | 石鋸 | 5.4 | 2.9 | 31 | |
| 264 | 255 | SP539 | | 石鋸 | 6.1 | 2.5 | 35 | |
| 265 | 256 | SP643 | | 石鋸 | 4.8 | 2.6 | 34 | |
| 266 | 257 | 2面R-7 | | 石鋸 | 6.2 | 2.4 | 35 | |
| 267 | 258 | 北側抜堀区第1面振り下げ | | 石鋸 | 7.1 | 3.1 | 51 | |
| 268 | 260 | 焼上面第1面振り下げ中央部中心 | | 石鋸 | 7.1 | 3.0 | 74 | 石鋸軋用 |
| 269 | 261 | 北側抜堀区第1面振り下げ西部 | | 石鋸 | 5.3 | 3.0 | 34 | |
| 270 | 262 | 3面清掃時 | | 石鋸 | 6.5 | 2.6 | 50 | |
| 271 | 263 | B区 | | 石鋸 | 4.5 | 1.9 | 16 | |
| 272 | 264 | 北側抜堀区第2面振り下げ西半部 | | 石鋸 | 4.7 | 3.0 | 44 | |
| 274 | 265 | | | 石製品 | 6.4 | 6.4 | | 石鋸軋用? |

表3 石製品一覧表



第60図 その他の出土遺物④ (1/1)

| 掲載番号 | 区 | 遺構 | 出土位置 | 銘名 | 铸造年 | 初鋲年 | 備考 |
|------|---|-----|---------------|----------|------|--------|-------------|
| 40 | B | 438 | 井筒 | 皇宋通寶 | 1038 | 寶元元年 | 板輪錢。 |
| 124 | B | 240 | | 半坐元寶 | 995 | 至道元年 | |
| 127 | B | 282 | | 洪武通寶 | 1368 | 洪武元年 | |
| 131 | B | 275 | | 聖宋元宝 | 1101 | 紹中靖國元年 | 折二錢 背文は九 |
| 165 | B | 437 | | 嘉定通寶 | 1208 | 嘉定元年 | |
| 170 | B | 458 | 付近 | 開元通寶 | 621 | 武德4年 | |
| 276 | B | 360 | | 開元通寶 | 621 | 武德4年 | |
| 277 | B | | 神田町 | 開元通寶 | 621 | 武德4年 | 寶函 下月 |
| 278 | B | | 北側比叡区 北側及び表塀 | 開(元)通寶 | 621 | 武德4年 | |
| 279 | B | | 北側比叡区第1面掘り下げ | 聖道元寶 | 995 | 聖道元年 | 寶函 上月 |
| 280 | B | 474 | | 天聖元寶 | 1023 | 天聖元年 | |
| 281 | B | | 第3面北側 | 景德元寶 | 1034 | 景德元年 | |
| 282 | B | 381 | | 皇宋通寶 | 1038 | 寶元元年 | |
| 283 | B | | カクラン I | 皇宋通寶 | 1038 | 寶元元年 | 星孔 |
| 284 | B | | 神田町 | 景祐元寶 | 1034 | 景祐元年 | 板輪錢 |
| 285 | B | | | 皇宋通寶 | 1038 | 寶元元年 | |
| 286 | B | 301 | | 熙寧元寶 | 1068 | 熙寧元年 | |
| 287 | B | | 神田町 第2線上直上 中心 | 熙寧元寶 | 1068 | 熙寧元年 | |
| 288 | B | | (内側) 第2面掘り下げ | 大聖通寶 | 1078 | 元豐元年 | |
| 289 | B | | 神田町 | 新開元寶 | 1094 | 新開元年 | 板輪錢 |
| 290 | B | | 第2面 掘り下げ西側 | 開元通寶 | 1094 | 開元通年 | |
| 291 | B | 331 | | 開元通寶 | 1103 | 開元2年 | 当十錢 |
| 292 | B | | 神田町 | 永樂通寶 | 1408 | 永樂6年 | |
| 293 | B | | 神田町 | (ノ) 次無元寶 | | | 真希の天聖元寶。 |

表4 出土銭一覧

は粗く、口縁部と肩部に凹跡を有する。231はSP598出土。白磁皿IX-2 c類。復原口径11.0cm、器高3.1cmを測る。232はSP656出土。龍泉窯系青磁碗I-1 a類。233はSP657出土。龍泉窯系青磁碗I-2類。復原口径17.0cm、器高5.8cmを測る。234はSX281出土。正置した状態で出土したが掘り方は確認できなかった。検出面は2面。須恵質の甕で口径20.1cmを測る。調整は肩部内外面ともハケメを施す。235~237は530(不明遺構)出土。235は同安窯系青磁皿I-1 b類。口径10.6cm、器高2.3cmを測る。外底に墨書を有する。236は陶器の鉢IV-2類。復原口径21.2cmを測る。釉は赤黒色を呈する。237は須恵質の鉢。238~242は北側拡張区2面掘り下げ時出土。238は白磁碗V類。239は白磁皿VII-2 b類。240は龍泉窯系青磁碗I-2類。241は龍泉窯系青磁碗II-c類。242は龍泉窯系青磁皿I-2 a類。243~249は3面検出時出土。243は土師器小皿。口径8.6cm、器高1.2cmを測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。244は土師器坏。復原口径13.0cm、器高3.7cmを測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。245は白磁皿IX類。復原口径10.0cmを測る。246・247は龍泉窯系青磁碗II類。復原口径16.2・15.0cmを測る。248は同安窯系青磁皿I-1 b類。口径10.4cm、器高2.0cmを測る。249は陶器の耳壺。釉は緑灰色を呈する。250・251は北壁6層出土。250は土師器小皿。口径8.7cm、器高1.1cmを測る。底部は回転糸切りで板状圧痕を有する。251は白磁碗IX類。252は北壁14層を切り込む遺構からの出土。龍泉窯系青磁碗I-2類。253は北壁14層からの出土。白磁碗V-4類。復原口径17.0cm、器高6.1cmを測る。254は北壁18層出土。龍泉窯系青磁碗I-4 c類。見込みに「河濱造範」の印文を有する。255・256は西壁N層出土。255は龍泉窯系青磁小碗。256は白磁皿IX-1類。257は西壁J層出土。白磁皿IX-1類。258はSE477を切る遺構からの出土。白磁皿IX-1類。259は上層焼土面出土。白磁皿IX-1類。260は表面採集。龍泉窯系青磁碗II類。261~272は滑石製石錘。273は十錘。274は滑石製品。円盤状に加工している。275は鉄製火箸。長さ31.7cmを測る。276~294は銅鏡。

4.まとめ

A区

検出した遺構は建物、井戸、土坑、柱穴等で、一部中世に属する可能性があるが、大半は近世に属するものと考えられる。その配置は建物、柱穴が検査区東に分布し、道路に面するように位置する。建物の裏手にあたる西側は東に比べ遺構密度は低くなり井戸、土坑が分布するが柱穴はほとんど見られない。同様の遺構配置が遺跡の南に位置する13・27次調査で確認されており、町屋であることが指摘されている。箱崎遺跡の北においても町屋の広がりを確認できたことは重要であろう。

B区

検出した遺構は建物、井戸、土坑、溝状遺構、柱穴等である。今回建物はSB697の1棟のみを復原したが、周囲の柱穴群、溝状遺構には建物に沿うものがみられ、建物の規模の拡大や数が増加する可能性が高い。

また、B区において3面の焼土層及び焼土・炭化物を含む整地層が確認した。この3面の焼土層は厚さ約60cmの中に含まれており、土層観察で確認できたものの、上層の焼土層は遺存が悪く面として捉えていない。面として確認したのは標高2.4・2.1m前後の中・下層焼土層である。この焼土層と整地層について不確定な要素が多いが年代について考えたい。

地山直上の包含層である北壁18層壁面から龍泉窯系青磁碗254が出土しており、整地層形成の上限は12世紀後半をさかのばらない。地山面の3面検出時に243~249が出土している。見落とした上層遺構の遺物を含む可能性は十分あり、12世紀後半~14世紀までの遺物が含まれるが13世紀を中心とするよ

うである。北壁6層壁面の251、SE477直上の西壁J層（中層焼土層）壁面の256、N層壁面の257はすべて白磁ⅢX類で整地層は13世紀後半以降に形成されたものと考えられる。13世紀後半～14世紀と考えられるSE438が下層焼土層を切り込んでおり、下層焼土層の時期はこれを下らない。整地層上面については南側の一部と北側拡張区のみの調査であるためさらに不確実ではあるが、15世紀代～近世と考えられる。壁面出土の遺物は確実であるが点数が少ない、検出時、掘り下げ時出土遺物は混入遺物が含まれる問題があるが、これらから黄褐色砂層上層の形成が12世紀後半～13世紀、中・下層焼土層が13世紀後半～14世紀、その直後から上層の整地層が形成されると考えられる。

この焼土層及び整地層についてはこれまで第2・5・11・16・21・24・31・34・35・38・42・44次調査、現在調査中である51次調査に於いても確認されている。これらのうち本調査を含め31・51次調査で複数面の焼土層を確認している。その分布は2次調査を除き、本調査区を含め菅崎宮の北側の西斜面に集中している。焼土層についてはすでに言及されており、元寇によるものとすると考えや菅崎合戦（1336年）（注1）によるものとする考えが示されている。今回の調査で複数面の焼土層が確認されたことにより、この両者を含む可能性が考えられる。また整地については各地点の状況が似ており、広範囲を短期間で一齊に行なったように見受けられ、被災後、計画的に行なわれたように感じられる。

調査着手時の認識不足から焼土層及び整地層の調査が十分に行えなかつた事は悔やまれるが、今後の調査を待つて検討を進みたい。

箱崎遺跡の土地利用については12世紀後半から遺跡の西斜面が利用されはじめ13～14世紀にかけてさらに積極的に拡大していくことが指摘されているが、（注2）今回の調査でも13世紀以前の遺構は確認されておらずこれを追認したと言えよう。そして中世箱崎遺跡の範囲についてはB区の層序説明で述べたように、A区には焼土層及び整地層が存在せず、連續性が認められないこと。遺構、遺物がほとんど存在しないことからB区西側の道路までが遺跡北部の西限と考えられる。

最後に何度も述べた事であるが、整地層上面の検出が遅れた原因の1つに既存建物の解体時に必要以上に擾乱されたことがあげられる。調査着手直前に遺跡の一部が失われたことを考えると今後の調査に於いて解体方法の協議や立会も必要であろう。

注1 佐伯弘次2001「軍事拠点としての中世箱崎城」博多研究会誌 第9号

注2 櫻本義樹2003「福岡古所在の箱崎遺跡について」中世都市研究会2003年九州大会 資料集

付 論

福岡市箱崎遺跡32次調査出土中世人骨

中橋孝博（九州大学）

はじめに

福岡市東部に位置する箱崎遺跡では、これまで古代～中世期の人骨が相当数出土しており（例えば第7次調査で12世紀前半～13世紀初めの男性頭蓋（中橋、1993）、20次、21次調査で計5体の同時期の人骨（中橋、2002）、22次調査でやはり12～13世紀の人骨5体（中橋、2004）、全国的にも数少ない当期の人骨資料の貴重な供給源の一つとなっている。2002年度の福岡市教育委員会による当遺跡の第32次の調査によって、新たに中世期のものと思われる頭蓋が出土した。残念ながら保存状態が悪く、その特徴の詳細は不明ながら、以下に得られた知見について報告しておく。

遺跡・資料

箱崎遺跡は福岡市東部の、西側を博多湾に、東側を宇美川（多々良川の支流）に区切られた古砂丘上に位置する。2002年度の福岡市教育委員会による調査によって、ピット状の遺構から頭蓋1個が出土した。副葬品等は見あたらず、埋葬遺構か否かの確定も困難である。所属時代を示す遺物は無いが、出土状況に関する考古学的な考察から、13～15世紀頃の中世人骨と考えられている。

所見

出土した人骨は頭蓋のみで、左側頭部を下にした状態で検出された。遺存部は、頭冠部左後半部（顔面部、前頭部、右頭頂骨から右側頭骨、及び頭蓋底を欠く）のみで、顔面部や四肢など体部骨は見あたらない。

性判定に有効な部位は欠落しているので明確な判定は困難だが、外後頭隆起乳突上後部の発達が弱く、女性の可能性が高い。また、矢状縫合、ラムダ縫合の一部に瘻合が認められ、老年以上の年齢に達した個体と見なされる。

形態的特徴として、頭蓋冠右半は土圧による歪みが認められるが、ある程度原形を保っていると思われる左半部を見る限り、上面観において額幅の小ささが顕著であり、かなりの長頭傾向が窺える。これまで近隣の博多遺跡群出土の古代～中世人骨でも同傾向が見られ、今回の資料もまたそれを追認させるものである。

文献

- 中橋孝博（1993）：「箱崎遺跡群第7次調査出土の中世人骨」、福岡市埋蔵文化財調査報告書459。
中橋孝博（2002）：「福岡市箱崎遺跡群第20次・21次調査出土人骨」、福岡市埋蔵文化財調査報告書705。
中橋孝博（2004）：「福岡市箱崎遺跡群第22次調査出土の中世人骨」「箱崎17」、福岡市埋蔵文化財調査報告書



第61図 A区全景（西から）



第62図 北壁土層



第63図 東壁土層



第64図 建物群（西から）



第65図 SK2(北から)



第66図 SK4(南から)



第67図 SK 5 (南から)



第68図 SK6 (東から)



第69図 SK151 (東から)



第70図 B区2面全景（西から）



第71図 B区3面全景（西から）



第72図 北側拡張区1面（東から）



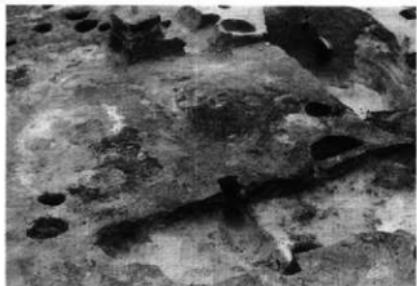
第73図 北側拡張区3面（東から）



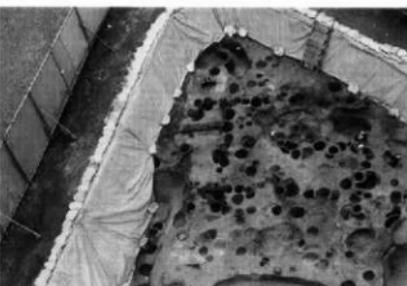
第74図 北壁土層



第75図 東壁土層



第76図 焼土面



第77図 SB697(西から)



第78図 SE434 (北から)



第79図 SE435 (西から)



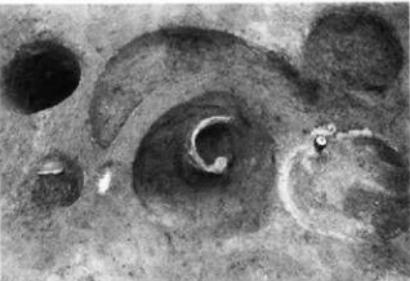
第80図 SE438 (西から)



第81図 SE439 (西から)



第82図 SE478（西から）



第83図 SK273（南から）



第84図 SK216（北から）



第85図 SK221（北から）



第86図 SK222・223（西から）



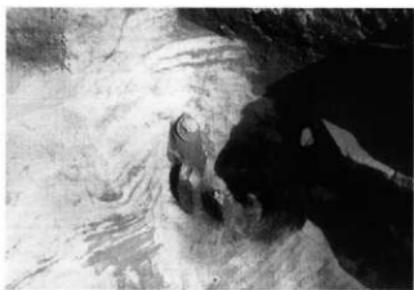
第87図 SK230（西から）



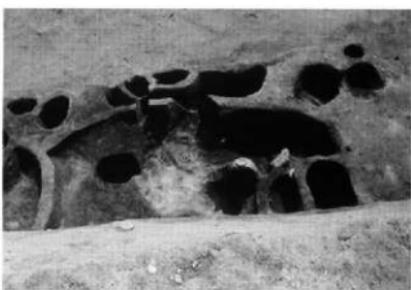
第88図 SK240（西から）



第89図 SK436（東から）



第90図 SK618（北西から）



第91図 SK628（北から）



第92図 SD271（東から）



第93図 SD271遺物出土状況（南から）



第94図 出土遺物

V. 第42次調査

1. 調査概要

今回報告する箱崎遺跡第42次調査は、箱崎遺跡の北を東西に横断するように計画された都市計画道路箱崎阿恵線の拡幅工事に伴うものである。対象地は箱崎阿恵線が拡幅工事で広がる南側部分で、南北幅3m東西幅34mの細長い調査区である。試掘調査は平成15年7月10日に行われ、地表下-90~-110cmで遺構面第1面が、調査区東側では地表下-150cmで遺構面第2面が確認され、中世のピットが検出された。なお土砂移動の効率性と職員配置の関係上、平成15年7月18日付けで臨済宗勝樂寺代表役員坪島禪徹氏より福岡市教育委員会埋蔵文化財課宛に、福岡市博多区箱崎3丁目2379番1の物件に関して、斎場建設に関わる埋蔵文化財事前審査申請書が提出された（事前審査番号15-2-362）南に隣接する勝樂寺部分の調査と箱崎阿恵線の調査を並行して行うことになった。調査対象面積は412.02m²（箱崎阿恵線と勝樂寺の合計）である。

調査期間は平成15年10月21日から平成16年1月27日までである（調査番号0351）。調査面積は箱崎阿恵線が45.61m²、勝樂寺が263.21m²である。遺物は両調査合計でコンテナ47箱分出土した。

場内で土砂反転をおこなうため調査区を東半と西半に二分割し、東半より調査に着手した。平成15年10月21・22日、バックホウによる東半の表土剥ぎを行う。30日より作業員を入れ遺構検出を行う。11月18日、東半遺構完掘。図面作成開始。21日、高所作業車から調査区東半全景の写真撮影。12月1・2日、バックホウによる上砂反転および西半の表土剥ぎを行い、西半第1面の遺構検出を行う。5日、第1面遺構完掘。図面作成開始。12日、トレーナーを設定してトレーナーの掘り下げを行う。16日、トレーナー掘り下げ完了、図面作成開始。24日、第2面遺構検出。12月27日から作業を中断。平成16年1月5日より作業再開。14日、第2面遺構完掘。高所作業車から調査区西半第2面全景の写真撮影。21日、遺物・機材の引き上げ。21日、バックホウにより埋め戻しを行い、調査を終了した。

検出した遺構については、調査時に遺構を示す記号Sを付し、検出順にS-01、S-02のように通し番号を付け、ピットにはP-1、P-2のように番号を付けた。遺構・ピットとも箱崎阿恵線と勝樂寺とにまたがって存在するものが多いため、両調査で分けることなく遺構番号を付けた。本文ではこの番号に遺構の性格を示すアルファベットをSのあとに付しSC-1のように記述する。なお本文の記述は通し番号順ではなく、遺構毎に記述した。箱崎阿恵線調査部分の遺構は第5表の通りである。P-283・290・334は勝樂寺部分にあるがSX-19窟内にあるため、阿恵線の遺構として処理した。

調査の結果、箱崎阿恵線調査部分からは、古代末から中世にあたる12~14世紀の井戸1基、性格不明遺構3基、土坑4基、ピット5基を検出した。調査区西半では、標高約3.2mで第一面、標高約2.9mで第二面の存在を確認した。周辺調査区で検出された焼上層の広がりは確認されなかった。

第5表 箱崎遺跡第42次調査 箱崎阿恵線調査部分遺物出土遺構一覧

| 遺構番号 | 位置 | 遺構番号 | 位置 | 遺構番号 | 位置 | 遺構番号 | 位置 | 遺構番号 | 位置 | 遺構番号 | 位置 |
|-------|-----|-------|----|-------|----|-------|-----|-------|-----|---------------------------|------|
| SR-05 | 東下 | P-1 | 東半 | P-172 | 東半 | P-223 | 東半 | P-249 | 西半2 | P-275 | 西半2 |
| SE-12 | 東半 | P-2 | 東半 | P-2-3 | 東半 | P-224 | 東下 | P-253 | 西半2 | P-275 | 西半2 |
| SX-13 | 西半1 | P-3 | 東半 | P-2-4 | 東半 | P-225 | 東半 | P-254 | 西半2 | P-277 | 西半2 |
| SX-18 | 西下 | P-167 | 東半 | P-215 | 東半 | P-226 | 東半 | P-255 | 西半2 | P-278 | 西半2 |
| SX-19 | 西半 | P-158 | 東半 | P-216 | 東半 | P-227 | 東下 | P-256 | 西半2 | P-283 | 勝樂寺 |
| SK-22 | 西半2 | P-169 | 東半 | P-217 | 東半 | P-228 | 東半 | P-257 | 西半2 | P-290 | Tr-A |
| SK-27 | 西半2 | P-170 | 東半 | P-218 | 東下 | P-229 | 東半 | P-258 | 西半2 | P-324 | 西半2 |
| SK-28 | 西半2 | P-171 | 東半 | P-222 | 東半 | P-248 | 西下2 | P-267 | 西半2 | P-334 | 勝樂寺 |
| | | | | | | | | | | K=既存 Gr=グラッド Tr=レンチ | |

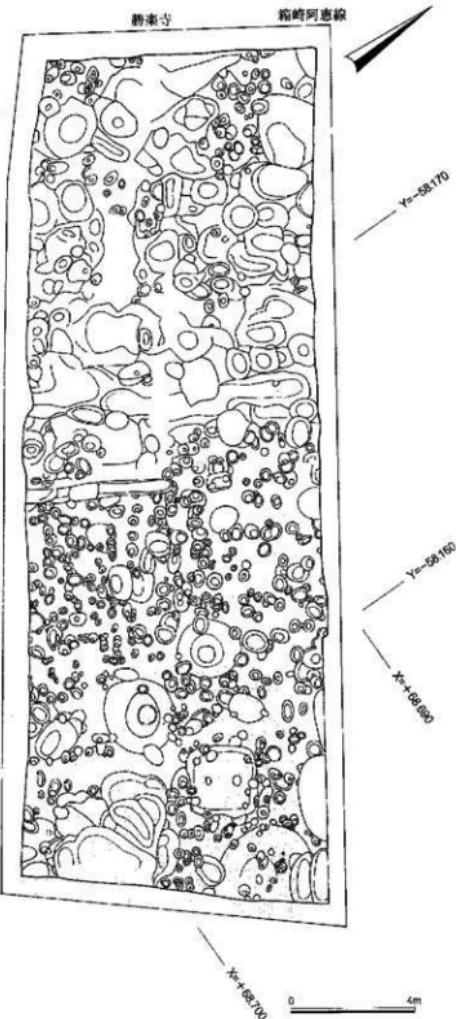
2. 調査区東半

1) 概要

調査区のはば中央で東西に分けて調査を行った。正しくは調査区北西半・南東半とすべきであるが、調査時に西半・東半を使用していたので本報告書でもこれを踏襲する。調査区東半は下端で1.0m×14.4mの細長い長方形を呈する。勝楽寺分と併せて遺構をみると、調査区東半は西半と比べて、ピットが多く、土坑が少なく、井戸が多いという傾向がある。また、西半のように隙間無く多重に土坑が切り合うという状況ではないため砂丘面の残りがよい。東半と西半では、中世において土地の利用の仕方が異なっていた可能性がある。地山の砂丘面は東半の北西側では標高2,700m、南東側では2,600mで確認された。砂丘面まで削平は受けていないことから、砂丘は本調査地点付近から緩やかに南東方向に向かって傾斜するものと考えられる。現在でも箱崎阿忠線は箱崎駅に向かって緩やかに下っており、旧地形を残している。

2) 層序

調査区の東壁で基本層序を確認した(第97図)。43層と90層の境界面が遺構検出面であり、標高2,600mを測る。90層より上層は黒褐色系の粘質土である。表土の掘削時には確認できなかつたが、土層観察の結果、90層と92層の境界面(3,000m)と、97層と104層の境界面(3,200m)が、遺構面と認定できた。黒褐色土の中での違ひのため、重機による表土剥ぎの時点では、平面的に捉えられなかつた。調査は2,600m付近まで重機で掘り下げた後に行った。



第95図 箱崎遺跡第42次調査(勝楽寺・箱崎阿忠線)
調査区全体図(1/160)

3) 遺構と遺物

井戸 (SE)

SE-05 (第97図)

遺構

調査区の東端に位置する。遺構の半分は調査区外に延び、北側をP-1、P-2に切られる。箱崎阿恵線調査部分には北側の一部がかかるのみであるが、整理の関係上、箱崎阿恵線調査の遺構に含めることとした。堀方の径は推定3.3mである。

壁に法を付けながら掘り下げたために、井戸中心の井戸枠まで掘ることはできなかった。標高1.000m~1.200mで平坦面をつくり、そこから井戸枠を掘り込むようである。

土層観察の結果、第97図1~3層が堆積したのち、4~14・36・37・38層の褐色系の砂が堆積し、15~35・44~46層が堆積したことがわかった。

1回目と2回目の堆積は井戸枠を入れた後に堀方を埋めた時のもので、3回目の堆積は井戸枠が崩れた後の埋没である。

遺物

1・2・3が出土した。1は同安窯系青磁碗、2は白磁碗、3は陶器壺の底部である。耳壺であろうか。遺構の時期は12世紀前半~中頃であろう。

SE-12 (第96図)

遺構

調査区の東に位置する。堀方の一部が調査区に残るが、大半は調査区外にある。堀方の平面形が径3m以上の円形と推測されることから井戸とした。固化可能な遺物は出土しなかった。

ピット (P)

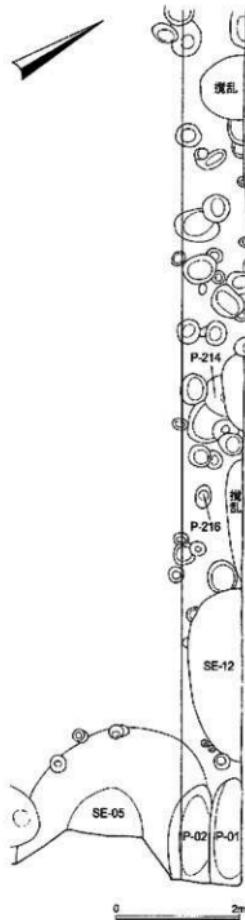
40数基のピットが検出され、うち少量でも遺物が出土したものは23基(第5表)である。箱崎遺跡第42次調査の東半はピットが多く、複数の掘立柱建物の存在が推定される。本調査区のピットの一部も掘立柱建物の柱穴になる可能性があるが、その復元は勝楽寺部分の調査報告の際に行いたい。ここでは固化可能な遺物が出土したピットのみを示すに留める。

P-214 (第96図)

調査区の中央部に位置する。径70cm深さ64cmを測る。5・6が出土した。5は白磁皿。11世紀後半~12世紀前半の遺物である。6は瓦を加工した瓦玉。時期は不明。

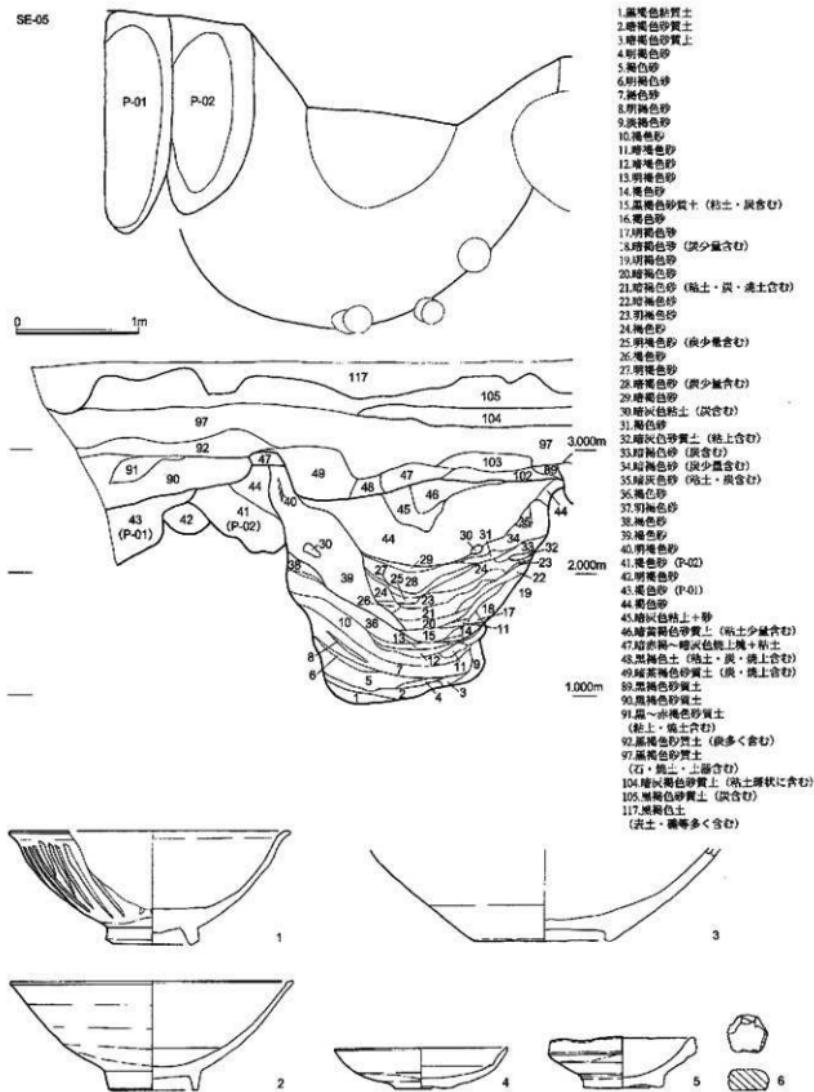
P-216 (第96図)

調査区の中央部に位置する。径30cm深さ37cmを測る。4が出土した。4は白磁皿。11世紀後半~12世紀の遺物である。



第96図 阿恵線調査区東半
遺構配置図 (1/80)

SE-05



第97図 SE-05実測図 (1/40) およびSE-05・P-214・P-216出土遺物実測図 (1/3)

3. 調査区東半

1) 概要

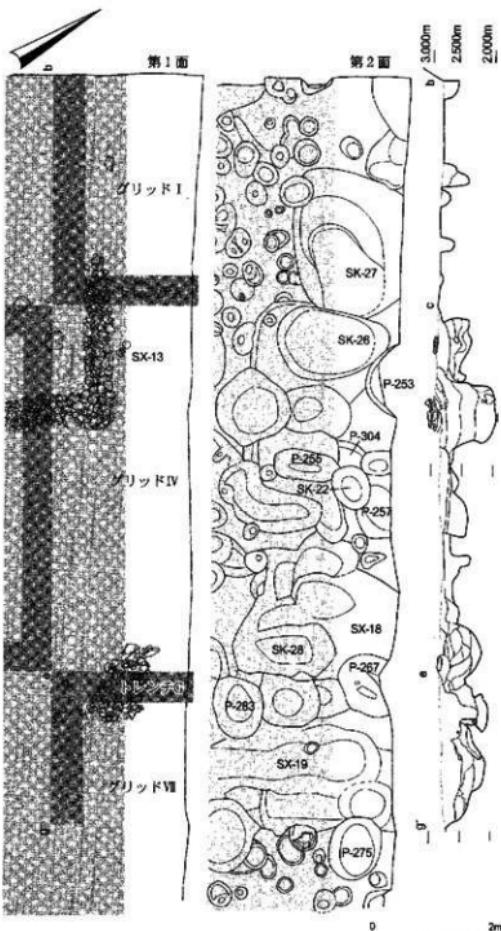
調査区東半の層序の検討によって、黒褐色土中に視覚的には捉えにくい遺構面が存在することが確認された。この結果をふまえて、西半の表土剥ぎを重機で行う際、標高3.000mの高さで掘り下げを止め、遺構検出を行うこととした。その結果、勝樂寺部分で「コ」の字形の石数遺構、礎石、土器のまとまった出土などがみられ、この面を西半第1面とした。西半第1面のうち箱崎阿恵線調査部分では土師器の出土した性格不明遺構1基と疊群を検出した。

第1面調査終了後、第1面と下の砂丘上の遺構面との層位的関係を調べるために、調査区東半全体に縦横にトレンチを設定し掘り下げ後、土層観察を行った。トレンチとトレンチの間をグリッドとしグリッド毎に遺物の取り上げを行った。箱崎阿恵線調査部分にかかるのはトレンチA・G、グリッドI・IV・VIIである。

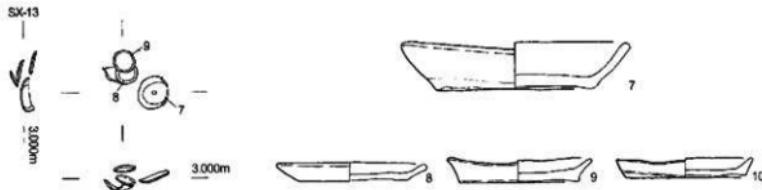
トレンチ完掘後、グリッドを掘り下げ、標高2.700m付近で砂丘上の遺構面を確認し、これを西半第2面とした。この面からは前述したように、SX-19以西で土坑が切り合うように多数検出された。西半第2面の箱崎阿恵線調査部分では性格不明遺構2、土坑3、ピットを検出した。

2) 層序

調査区西半では勝樂寺部分の南壁で基本層序を確認した。基本的に東半と同じ層序である。砂丘面は2.700m前後で水平に堆積している(第98図)。調査区西半は砂丘の平坦面にあたるようである。



第98図 箱崎阿恵線調査区西半第1面・第2面遺構配置図(1/80)



第99図 SX-13実測図 (1/20) および出土遺物実測図 (1/3)

3) 第1面の遺構と遺物

性格不明遺構 (SX)

SX-13 (第99図)

遺構

調査区の中央やや西寄りに位置する。勝樂寺部分の石敷遺構に接するような位置で検出された。遺構の堀方は不明で、遺物のみが集中して出土した。黒褐色土に掘り込まれた土坑内に遺物と黒褐色土が堆積したもの、あるいは真下に位置する第2面SK-26の埋上内遺物の可能性がある。

遺物

7・8・9・10が出土した。7は土師器杯、8・9・10は土師器小皿である。7~10とも底部に回転糸切り離しの痕跡が残る。12世紀後半~13世紀前半の遺物である。

4) 第2面の遺構と遺物

性格不明遺構 (SX)

第2面では非常に多くの遺構が切り合っているため、どこまでが一つの遺構か不明瞭なものがあつた。SX-18とSX-19はそのような遺構で、単独の土坑か溝、もしくは複数の土坑が重複したものである可能性があったが、いずれか特定できなかったため性格不明遺構 (SX) として取り上げることとした。また、SX-18とSX-19両者の前後関係がSX-19→SX-18であるため、本文ではこの順番で記述を行う。

SX-19 (第100図)

遺構

調査区の東側に位置する。北西をSX-18に切られている(第101図)。検出当初は土坑と考えていたが、堀方南側が確認できず、平面的にみると調査区を南北に貫く溝状遺構とも捉えることが可能である。しかし断面では底面に段が多く溝としては不自然である。溝か土坑群かの判断が付かず、遺構全体をSX-19として取り扱うこととした。P-290・334は勝樂寺部分に位置するがSX-19内にあるため阿恵線の遺構として処理した。SX-19を溝とした場合、幅約2.0m深さ70cm長さ10m以上となる。この規模の溝であれば調査区の北側や南側でも検出される可能性が高い。周辺での調査例を待ちたい。

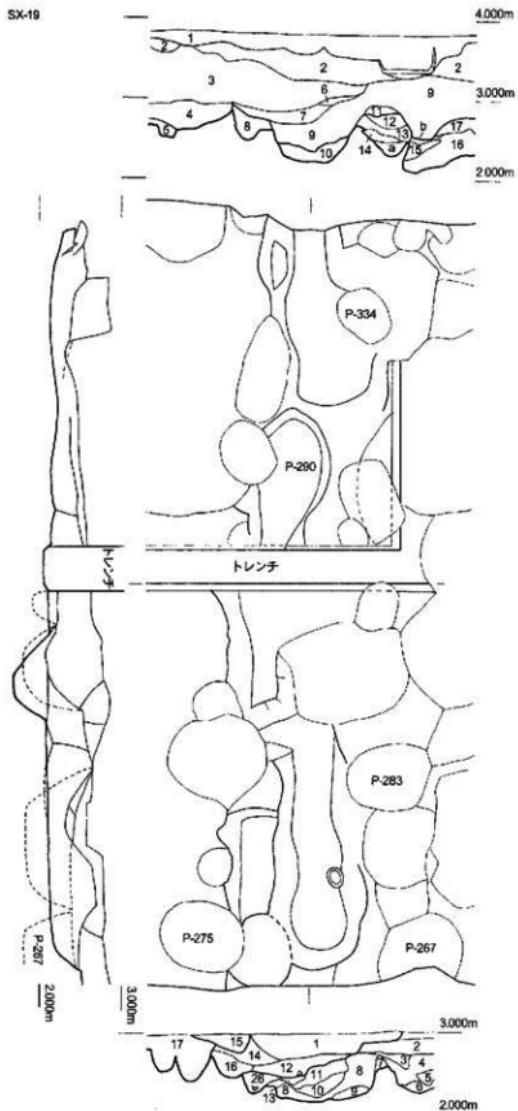
遺物

図化できる遺物はほとんど出土しなかった。31は巴文軒丸瓦片の破片である。

SX-18 (第100図)

遺構

調査区の東側に位置する。南東でSX-18を切っている(第101図)。第1面で検出された礫群の下に



- 1.暗褐色～黒褐色 砂質土～土
- 2.暗茶褐色 砂質土～土
- 3.黒褐色～棕褐色 砂質土～土
- 4.黒褐色～灰褐色 砂質土～粘土
- 5.暗褐色 砂
- 6.暗褐色 砂
- 7.暗褐色～黑褐色 砂質土
- 8.暗褐色 砂
- 9.黒褐色 砂質土
- 10.暗褐色 砂
- 11.黒褐色 砂質土
- 12.暗褐色 砂～砂質土
- 13.褐色 砂
- 14.暗褐色～黑褐色 砂
- 15.黒褐色～暗灰色 砂質土に粘土
- 16.暗褐色 砂質土
- 17.暗褐色 砂～砂質土
- a.暗褐色 砂
- b.暗褐色～黑褐色 砂～砂質土

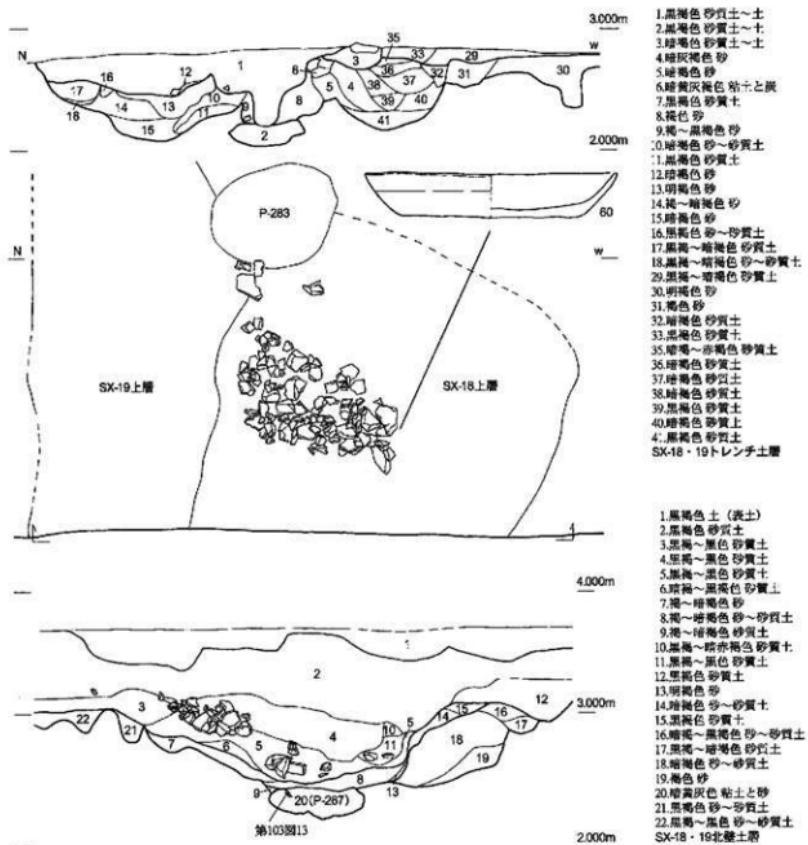
SX-19南壁土層注記

- 1.黒褐色 砂質土
- 2.暗灰褐色 砂質土
- 3.暗褐色～黑褐色 砂質土
- 4.暗褐色～暗褐色 砂質土
- 5.明褐色 砂～砂質土
- 6.暗褐色 砂～砂質土
- 7.褐色 砂～砂質土
- 8.浅灰褐色 砂～砂質土
- 9.灰褐色
- 10.暗褐色～黑褐色 砂質土
- 11.明褐色 砂
- 12.暗褐色 砂質土
- 13.暗褐色 砂
- 14.灰褐色 砂～砂質土
- 15.黑色 砂質土
- 16.暗褐色 砂～砂質土
- 17.暗褐色 砂質土
- 18.茶褐色 砂
- 19.黑色 砂質土
- 20.暗褐色～暗灰褐色 砂質土

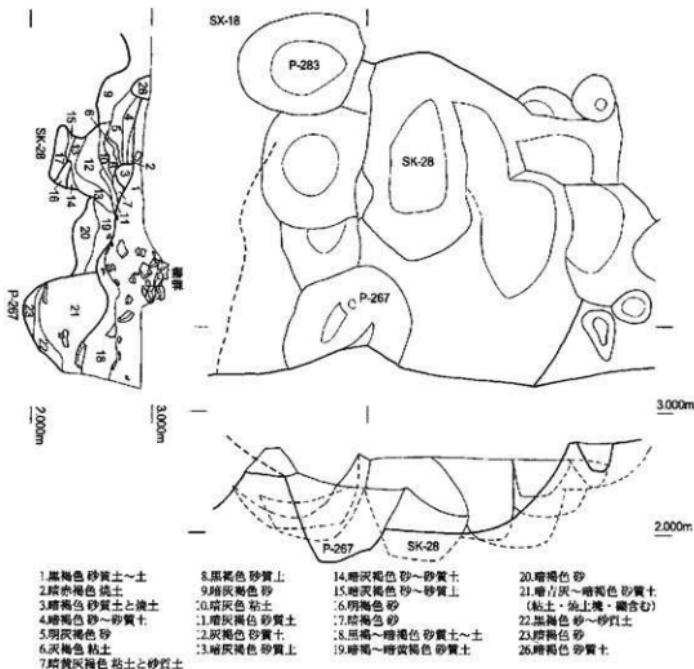
SX-19トレンチ土層注記

第100図 SX-19実測図 (1/60)

位置する（第101図）。トレントGの土層観察の結果、第102図9・19・20層が堆積し、そこにP-263（21層）とSK-28（2～8・10～17層）が掘り込まれ、最後に1・18層が堆積したことが分かった。1層には砾も多く含まれ、波打つような斜めの堆積をしている。西半第1面で検出した砾群も1層中に含まれることがわかり、砾群内遺物もSX-18上層として遺物取り上げを行った。上層完掘後、引き続き下層の掘り下げを行った。下層完掘後の遺構形状は、平面は径3mの円形ないし椭円形を呈し、深さ80cmを測る。円形の大型土坑の可能性があるが、この楕円形状は1層だけではなく9・19・20層まで完掘した状態での形状である。土層観察から1・18層と9・19・20層には時間差が認められ、9・19・20層を同一遺構の下層とはできない。またP-263とした21層にも砾が混ざっており、SX-18上



第101図 SX-18・19上層実測図およびSX-18上層砾群出土遺物実測図 (1/3) (1/40)

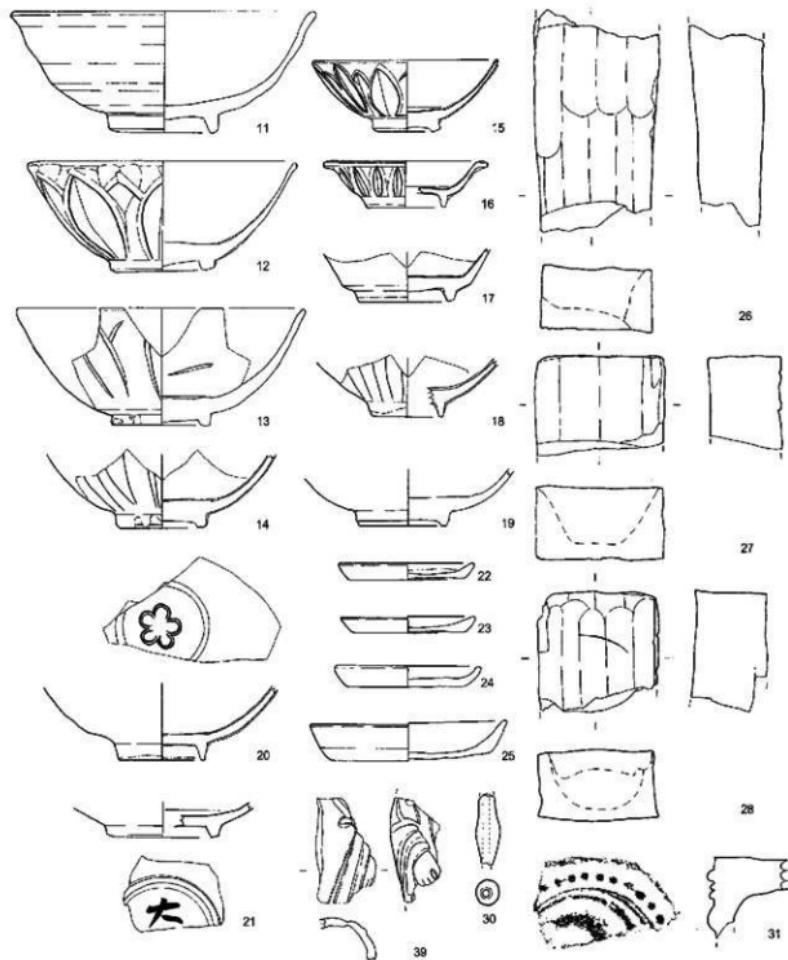


第102図 SX-18実測図 (1/40)

層と時間差があるかについては明確でなく、両者が一体である可能性もある。このような理由でどこまでを一つの遺構とするのか判断が付かなかったため、大型土坑状の遺構全体を性格不明遺構SX-18とし遺物を取り上げた。

遺物

11～18・20は龍泉窯系青磁、19は系統不明の青磁、21は白磁、22～25・60は土師器、26～28は塚、29は土製品、30は管状土錘である。11・19はSX-18のグリッドIV掘り下げ時、60は砾群中、12・14～18・20～30はSX-18上層、13はSX-18・19北壁土層断面20層、22はP-267から出土した。大別すると13・22が下層、それ以外が上層出土となる。時期の分かる遺物は、11が龍泉窯系青磁碗IV類（上出D-1）で最も新しく、14世紀初頭～後半である。その他の龍泉窯系青磁では7・15～18がⅢ類（13世紀中頃～14世紀初頭）、12・14がⅡ類（13世紀前後～前半）である。21の白磁は碗Ⅳ類（12世紀中頃～後半）である。土師器は全て回転糸切離痕があり、24・60が12世紀中頃～後半で、22・23・25が13世紀後半～14世紀前半である。下層は2点のみで根柢が弱いが13世紀、上層は混入が激しいが13世紀中頃～14世紀前半であろう。塚は全体の分かるものは出土しなかった。型作りで成形した後に、表・裏面ナデ調整している。十製品は人形の腕の表部分である。裏面と表面を型作り成形して貼り合わせた中空構造になっている。時期は不明。女性像もしくは觀音像であろうか。



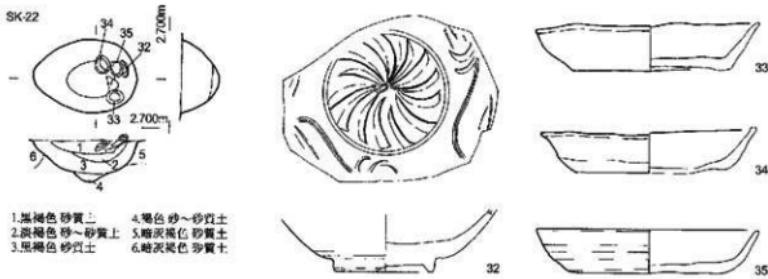
第103図 SX-18・19出土遺物実測図 (1/3)

土坑 (SK)

SK-22 (第104図)

遺構

調査区の中央に位置し、P-255・256・257・304を切る。長軸95cm 傷軸80cmの楕円形を呈し、主軸方向はN-89°-Wである。深さは30cmを測る。完形の遺物は黒褐色砂質土の1層(第104図)より集中して出土している。



第104図 SK-22実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

遺物

32・33・34・35が出土した。32は龍泉窯系青磁碗で、33～35は土師器杯で、いずれも底面に回転糸切離痕がある。時期は33が12世紀中頃から後半、33～35は12世紀後半から13世紀前半である。本遺構の時期は12世紀後半頃であろう。

SK-26(第105図)

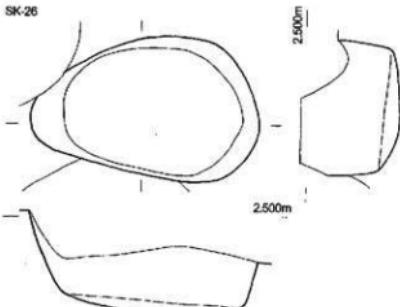
遺構

調査区の中央部分からやや北側に位置し、西側でSK-27を切り、北側でP-253に切られる。長軸190cm短軸120cmの楕円形を呈し、深さ80cmを測る。主軸方向はN-34°-Eである。埋土は上層が墨褐色砂質土(第106図5・13・14層)で下層は暗褐～暗灰褐色砂質土である。SK-26上層の上に石敷造構の東方の黒褐色土(1・2層)がのっている。SX-13は標高3.000m前後に位置し、十層の点から見るとSK-26上層内の遺物群と捉えることも可能である。本遺構から岡化可能な遺物は出土しなかった。

SK-27(第106図)

遺構

調査区の西側に位置し、北は調査区外に延びる。東側でSK-26(第106図3・5・9・13・18・24)に切られる。最大長260cm深さ67cmを測る、円形もしくは楕円形の上坑である。主軸方向は不明



第105図 SK-26実測図(1/40)

である。

遺物

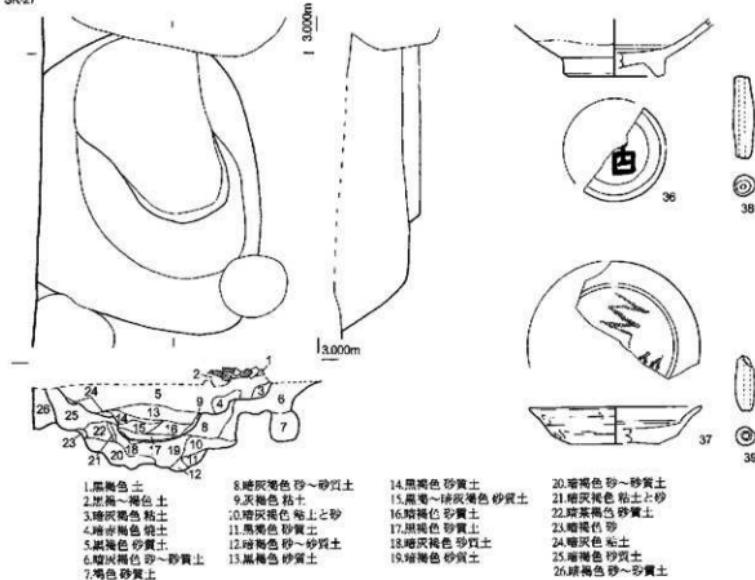
36～39が出土した。36は白磁碗、37は同安窯系青磁皿、38・39は管状土錐である。36は高台内に墨書きがある。「西」「丙」に類似するが判読できず。時期は37が12世紀中頃から12世紀後半である。

SK-28(第107図)

遺構

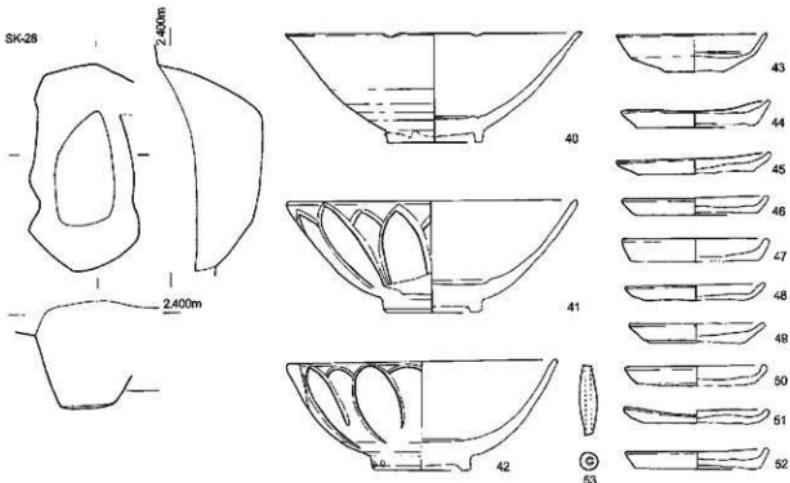
調査区の東側に位置し、SX-18堀内に位置する。長軸170cm短軸80cmの楕円形を呈し、深さ60cmを測る。主軸方向はN-36°-Wである。埋土は上層観察の結果、最下層の黒褐

SK-27

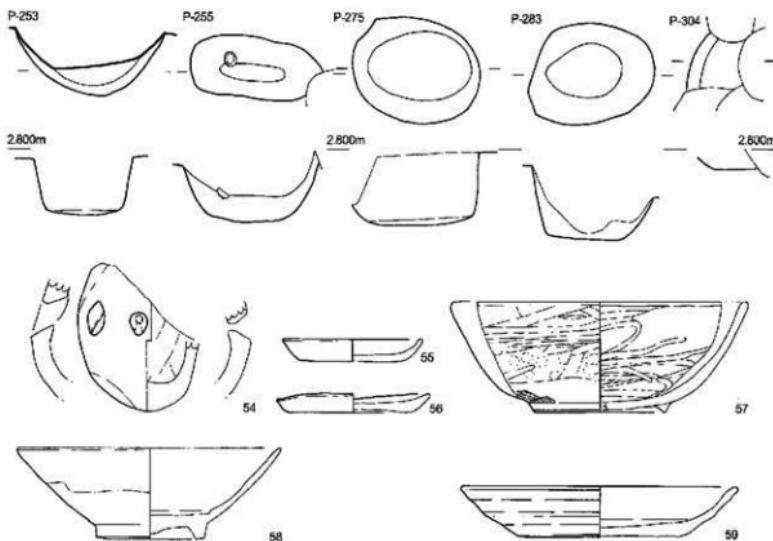


第106図 SK-27実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

SK-28



第107図 SK-28実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)



第108図 P-253・255・275・283・304実測図 (1/40) よび出土遺物実測図 (1/3)

色上（第102図17層）のあとに褐色系砂～砂質土（11～16層）が堆積し、上部に炭・焼土・粘土混じりの層（2～10層）が、その上にSX-18上層（1層）が堆積していることが分かった。

遺物

40～53が出上した。出土遺物の組み合わせは上坑墓出土遺物と類似する。40は白磁楕、41～43は鹿泉窯系青磁、44～52は上師器小皿、53は管状土錐である。40は12世紀中頃から後半、41・42は13世紀前後から前半、44～52は口径平均値8.9cm、器高平均値1.2cm、全ての底面に回転糸切離痕が残り、12世紀後半から13世紀前半である。遺構の時期も12世紀後半から13世紀前半といえよう。

ピット（P）

遺構番号を付ける際、およそ直径1m以下の土塙はピットとして取り扱った。ここではピットのうち実測可能な遺物が出土したものを見せる。

P-253（第108図）

遺構

調査区中央からやや西よりに位置していて、遺構の北半分は調査区外である。南北側でSK-26を切っている。径120cmの円形を呈し、深さ50cmを測る。

遺物

54が出土した。土製の飯蛸壺である。胴部最大径付近に2つ孔がある。下から上向きに外側から焼成前に穿孔されている。内面は底面中心に向かってナデを施す。本調査地西側に隣接する、箱崎遺跡第11次調査のSK209から同じ形の飯蛸壺が出土している。時期は不明だが中世の遺物であろう。

P-255 (第108図)

遺構

調査区中央に位置し、北側をSK-22に切られる。長軸110cm短軸50cmの楕円形を呈し、深さ45cmを測る。

遺物

55・56が出土した。土師器小皿である。56はSK-22とのベルト部分より出土した。13世紀中頃から後半の遺物である。

P-275 (第108図)

遺構

調査区東端に位置し、北側でSX-19に切られる。長軸110cm短軸85cmの楕円形を呈し、深さ60cmを測る。

遺物

57が出土した。瓦器碗である。外面横方向のミガキ、内面不定方向のミガキを施す。中島分類瓦器椀II-1類で12世紀前半に位置づけられている。

P-283 (第108図)

遺構

勝樂寺部分に位置する。SX-19塙方内のため箱崎阿恵線調査部分の遺構として取り扱う。長軸100cm短軸80cmの円形を呈し、深さ60cmを測る。

遺物

58が出土した。白磁碗で、12世紀中頃から後半の遺物である。

P-324 (第108図)

遺構

調査区中央に位置する。東・南側をSK-22、P-255・256・257に切られ残存状況は不良である。径は不明だが、円形ないし楕円形を呈するであろう。深さ9cmを測る。

遺物

59が出土した。土師器杯で、底面に回転糸切離痕を残す。12世紀中頃から後半の遺物である。

4.まとめ

箱崎阿恵線調査部分は勝樂寺部分に比して狭小であり、主要な遺構も勝樂寺側にあるため、「筑前國續風土記」に記述のある勝樂寺の創建年代の検討や、箱崎遺跡群内における本調査地点の特徴などは、勝樂寺部分の調査報告にゆずり、ここでは箱崎阿恵線調査部分で得られた知見をのみを述べる。本調査の顕著な特徴はSX-19を境にして、東半は柱穴が多く、西半は土坑が多いという、東西で偏った遺構分布を示すことである。西半の土坑は多くが西半中央の東西8m幅の部分に集中し、多重に切り合った土坑群をなしている。土坑群の時期は、SX-18上層が13世紀後半～14世紀前半、SX-18下層が13世紀、下坑は12世紀中頃から後半のものが多く、12世紀中頃から13世紀後半に求められる。これに対して調査区東半の遺構は11世紀後半～12世紀前半のものが多い。東半が古く、西半が新しいという遺構分布の傾向は勝樂寺部分でも認められる。第1面の石敷遺構も土坑群の上に位置しており、12世紀中頃から後半を二期として以後200年のあまりの間、西側の砂丘緩斜面は利用を放棄し、東側砂丘平坦面上の狭い部分に集中して土地利用が行われたようである。この土地利用の変化は単に本調査地点の問題だけなく、この時期の箱崎遺跡全体の変化に関係している可能性がある。

第6表 箱崎遺跡第42次調査 箱崎阿志線調査部分出土遺物一覧

| No. | 遺構 | 大分類 | 小分類 | 採取率 | 口径 | 深度 | 底層 | 施成 | 胎土 | 色調(胎) | 色調(胎土) | その他 |
|---------------|--------|-----------|-----|------|--------|---------|-------|----|------------|-------|--------|-----|
| 1. SE-05 | 同安瀬系青磁 | 碗Ⅲ-1a | | 20% | (17.1) | 6.5 | 5.4 | ◎ | 細かい 均質 | 暗灰 | | |
| 2. SE-05 | 白磁 | 碗Ⅲ-4a | | 20% | (17.2) | 6.7 | 5.5 | ◎ | やや粗い 灰白 | 灰白 | | |
| 3. SE-05 | 同上 | 碗Ⅲ-7 | | 10% | - | - | 8.5 | ◎ | やや粗い 均質 | 灰白 | 内外面施成 | |
| 4. P-216 | 白磁 | 碗Ⅲ-1a | | 70% | 10.6 | 2.5 | 5.3 | ◎ | 粗い 均質 | 灰白 | | |
| 5. P-214 | 白磁 | 碗Ⅲ-1a | | 70% | 9.0 | 3.1 | 4.9 | ○ | 細かい 均質 | 灰白 | | |
| 6. P-214 | 瓦製品 | 瓦 | | 100% | - | 1.3 | - | □ | やや粗い | - | 瓦の軽便 | |
| 7. SX-13 | 土師器 | 杯 | | 80% | 14.6 | 3.0 | 9.6 | ◎ | やや粗い | 灰白 | | |
| 8. SX-13 | 土師器 | 小瓶 | | 100% | 9.2 | 1.2 | 6.5 | ◎ | やや粗い | 灰白 | | |
| 9. SX-13 | 土師器 | 小瓶 | | 100% | 8.8 | 1.5 | 7.4 | ◎ | やや粗い | 灰白 | | |
| 10. SX-13 | 土師器 | 小瓶 | | 30% | 8.3 | 1.2 | 7.2 | △ | やや粗い | 灰白 | | |
| 11. SX-18Gr-N | 道東北系青磁 | 碗Ⅲ(上田出) 1 | | 60% | (18.7) | 7.3 | 6.8 | ◎ | 粗良 | 暗灰白 | 見込み花文? | |
| 12. SX-18上部 | 道東北系青磁 | 碗Ⅲ-b | | 25% | (16.5) | 6.8 | (6.4) | ○ | 精良 | 灰白 | | |
| 13. SX-18上部 | 道東北系青磁 | 碗Ⅲ-a | | 20% | (17.6) | 7.2 | 6.0 | ○ | 精良 | 灰白 | | |
| 14. SX-18LP5 | 道東北系青磁 | 碗Ⅲ-b | | 10% | - | - | 5.9 | ○ | 精良 | 灰白 | | |
| 15. SX-18上部 | 道東北系青磁 | 小瓶Ⅱ-2 | | 80% | 11.1 | 4.4 | 4.2 | ○ | 粗良 | 淡明青緑 | | |
| 16. SX-18上部 | 道東北系青磁 | 小瓶Ⅱ-4 | | 30% | 2.8 | (10.0) | (5.0) | ○ | 精良 | 透明青緑 | | |
| 17. SX-18上部 | 道東北系青磁 | 杯Ⅲ-1 | | 10% | - | - | 6.2 | ○ | 精良 | 灰白 | | |
| 18. SX-18上部 | 道東北系青磁 | 杯Ⅲ-2 | | 10% | - | - | 4.4 | ○ | 精良 | 明青緑 | | |
| 19. SX-18Gr-N | 青磁 | 碗 | | 20% | - | - | 5.7 | ○ | 精良 | 深青緑 | | |
| 20. SX-18上部 | 道東北系青磁 | 碗Ⅲ-1 | | 10% | - | - | 5.4 | ○ | 精良 | 青緑 | | |
| 21. SX-18上部 | 白磁 | 板瓦Ⅰ | | 10% | - | - | (7.0) | ○ | 精良 | 明白白 | 出音「大」 | |
| 22. P-267 | 土師器 | 小瓶 | | 50% | 8.3 | 1.0 | 7.1 | ○ | 細かい | 灰白 | | |
| 23. SX-18上部 | 土師器 | 小瓶 | | 90% | 8.2 | 1.0 | 6.9 | ○ | 精良 | 透赤・透青 | | |
| 24. SX-18上部 | 土師器 | 小瓶 | | 90% | 9.0 | 1.3 | 7.3 | ○ | やや粗い | 灰白 | | |
| 25. SX-18上部 | 土師器 | 杯 | | 100% | 12.0 | 2.5 | 9.7 | □ | やや粗い | 灰白 | | |
| 26. SX-18上部 | 埴輪 | | | 65% | - | 3.6-4.5 | - | ○ | やや粗い | 灰白 | | |
| 27. SX-18上部 | 埴輪 | | | 20% | - | 4.5 | - | ○ | やや粗い | 灰白 | | |
| 28. SX-18上部 | 埴輪 | | | 30% | - | 4.4 | - | ○ | やや粗い | 灰白 | | |
| 29. SX-18上部 | 瓦製品 | 人形 | | 10% | - | - | - | △ | 粗い | 灰白 | 手右部分 | |
| 30. SX-18上部 | 土器類 | 泥状土器 | | 90% | - | - | - | △ | 粗い | 灰白 | | |
| 31. SX-19 | 瓦 | 瓦 | | 100% | - | - | - | △ | 粗い | 灰白 | | |
| 32. SK-22 | 油屋窯系青磁 | 碗Ⅲ-2 | | 25% | - | - | 6.2 | ○ | 粗良 | 透灰 | | |
| 33. SK-22 | 土師器 | 杯 | | 100% | 13.7 | 2.8 | 9.7 | □ | やや粗い | 灰白 | | |
| 34. SK-22 | 土師器 | 杯 | | 70% | 13.1 | 2.9 | 9.1 | ○ | やや粗い | 透青 | | |
| 35. SK-22 | 土師器 | 杯 | | 80% | 13.6 | 2.7 | 9.3 | ○ | やや粗い | 透青 | | |
| 36. SK-27 | 白磁 | 無記(1-?) | | 20% | - | - | 6.2 | ○ | 精良 | 透白 | 出音「白」 | |
| 37. SK-27 | 同安瀬系青磁 | 碗Ⅲ-1b | | 30% | (10.6) | 2.3 | (5.4) | ○ | やや粗い | 透青 | 透青 | |
| 38. SK-27 | 土師器 | 泥状土器 | | 100% | - | - | - | △ | 粗い | 灰白 | | |
| 39. SK-27 | 土師器 | 泥状土器 | | 90% | - | - | - | △ | やや粗い | 灰白 | | |
| 40. SK-28 | 白磁 | 碗 | | 40% | (18.0) | 6.6 | 5.9 | ○ | 粗良 | 灰白 | | |
| 41. SK-28 | 同安瀬系青磁 | 碗Ⅲ-2a | | 30% | 17.7 | 6.8 | 6.0 | ○ | 精良 | 透青 | | |
| 42. SK-28 | 同安瀬系青磁 | 碗Ⅲ-2b | | 50% | 16.5 | 6.8 | 6.9 | ○ | 精良 | 透青 | | |
| 43. SK-28 | 同安瀬系青磁 | 碗Ⅲ-2-c | | 60% | (9.8) | 2.3 | 3.5 | ○ | 粗良 | 灰白 | | |
| 44. SK-28 | 土師器 | 小瓶 | | 100% | 9.4 | 1.6 | 7.1 | ○ | やや粗い | 灰白 | | |
| 45. SK-28 | 土師器 | 小瓶 | | 50% | 9.5 | 1.3 | 7.1 | □ | やや粗い | 灰白 | | |
| 46. SK-28 | 土師器 | 小瓶 | | 90% | 9.0 | 1.1 | 7.5 | ○ | やや粗い | 透青 | 透青・透灰 | |
| 47. SK-28 | 土師器 | 小瓶 | | 100% | 0.0 | 1.1 | 7.8 | ○ | やや粗い | 透青 | | |
| 48. SK-28 | 土師器 | 小瓶 | | 30% | 6.5 | 1.1 | 6.2 | ○ | やや粗い | 透青 | | |
| 49. SK-28 | 土師器 | 小瓶 | | 80% | 8.3 | 1.2 | 5.9 | ○ | やや粗い | 透青 | | |
| 50. SK-28 | 土師器 | 小瓶 | | 50% | 9.7 | 1.2 | 7.2 | ○ | 粗良 | 透青 | | |
| 51. SK-28 | 土師器 | 小瓶 | | 100% | 8.9 | 1.1 | 8.3 | ○ | 粗良 | 透青 | | |
| 52. SK-28 | 土師器 | 小瓶 | | 100% | 8.8 | 1.2 | 7.6 | ○ | やや粗い | 透青 | | |
| 53. SK-28 | 土師器 | 骨灰十種 | | 100% | - | - | - | △ | 粗い | 灰白 | 单耳 | |
| 54. P-233 | 瓦製品 | 板瓦 | | 50% | - | 9.0 | - | △ | 粗い | 灰白 | 出音「瓦」 | |
| 55. P-236 | 土師器 | 小瓶 | | 100% | 8.6 | 1.4 | 6.5 | ○ | やや粗い | 透青 | | |
| 56. P-236 | 土師器 | 小瓶 | | 20% | 9.2 | 1.2 | 7.6 | ○ | やや粗い | 透青 | | |
| 57. P-275 | 瓦器 | 板瓦-1 | | 20% | (18.2) | 6.8 | (6.2) | ○ | 粗い | 透青 | | |
| 58. P-283 | 白磁 | 碗 | | 30% | (16.0) | 5.6 | 6.7 | ○ | やや粗い | 白 | | |
| 59. P-321 | 土師器 | 杯 | | 40% | 17.2 | 3.1 | 10.9 | ○ | 粗い | 透青 | | |
| 60. SX-18段井 | 土師器 | 杯 | | 100% | 15.4 | 3.7 | 10.8 | ○ | やや粗い | 透青 | | |

凡例

口佳・底高・底厚の単位はcmである。陶磁器の小分類名は山本分類(山本2000)に基づく。

(10%：遺物の採取率が10%以下、9.0%：9.0cm以上、()：かっこ内は円孔(復元による推定値)。

◎：焼成良好、○：焼成やや良好、□：焼成普通、△：焼成やや不良、×：焼成不良

第42次調査報告書の遺物の分類・時期区分・実年代比定には以下の文献を使用した。

陶磁器

上田秀夫1982「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2(日本貿易陶磁研究会)

山本信夫2000「大宰府等坊跡XV-陶磁器分類編一』(太宰府市教育委員会)

土師器

森田惣一・柴田賢次郎1978「大宰府出土の輸入中国陶器について」『九州歴史資料館研究論集4』(九州歴史資料館)

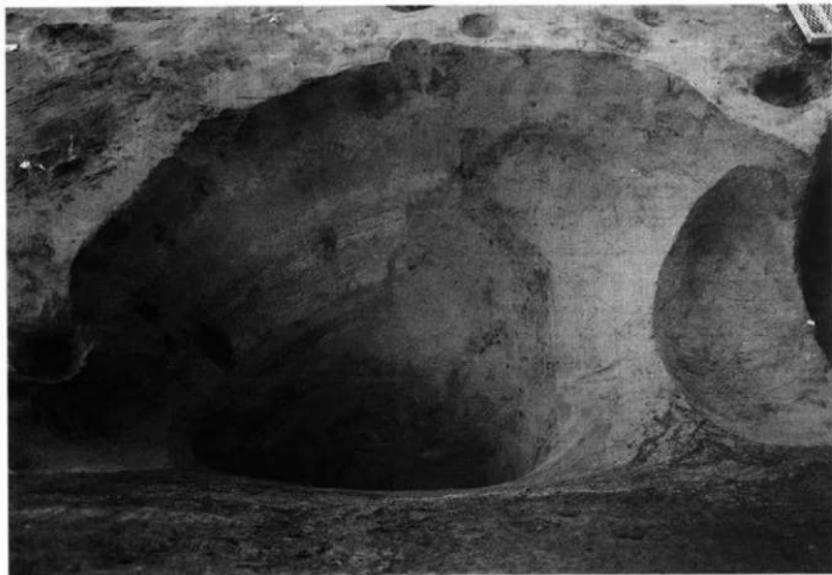
山本信夫1998「大宰府における古代末から中世の土器・陶磁器」『中近世土器の系統研究IV』(日本中古土器研究会)

瓦器

中島恒次郎1992「大宰府における輪形窓の変遷」『中近世土器の基礎研究Ⅱ』(日本中古土器研究会)



第109図 箱崎遺跡第42次調査 東半全景（東から）



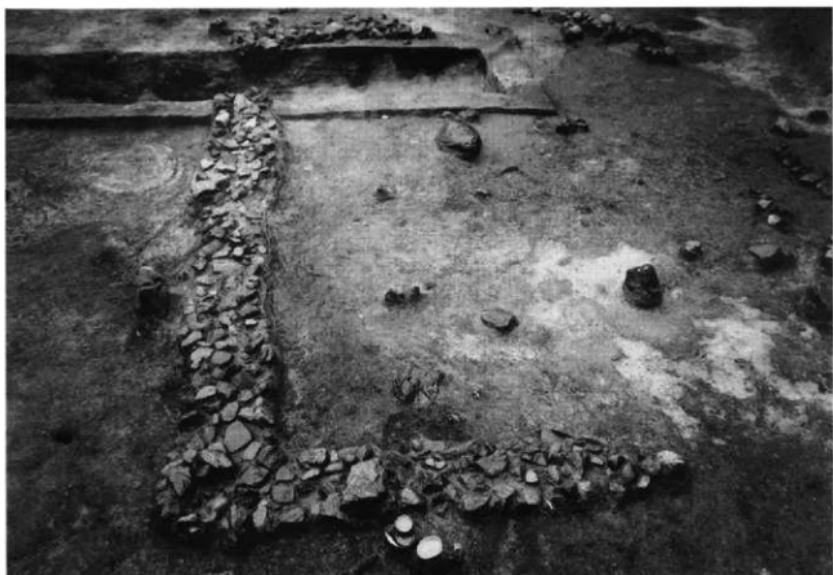
第110図 SE-05（東から）



第111図 箱崎遺跡第42次調査 西半第1面全景（東から）



第112図 SX-18上層（北から）



第113図 SX-13および石敷遺溝全景（北から）



第114図 SX-13（北から）



第115図 箱崎遺跡第42次調査 西半第2面全景（東から）



第116図 SX-19（北から）



第117図 SX-18（北から）



第118図 SK-22（南から）

報告書抄録

| ふりがな | はこざき | | | | | | | |
|---------------|---------------------------|-----------|--------------------------|-------------------|---|----------------------|---------------------------|------|
| 書名 | 箱崎 25 | | | | | | | |
| 副書名 | 箱崎遺跡第25・32・42次調査 | | | | | | | |
| 卷次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第896集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 杉山富雄 中村啓太郎 赤坂亨 | | | | | | | |
| 編集機関 | 福岡市教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2006年3月31日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所 在 地 | コード | | 北緯 °'" | 東経 °'" | 調査期間 | 調査面積 (m ²) | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 箱崎遺跡25次 | 福岡市東区 箱崎3-15地内 | 40130 | 0116 | 33° 37' 13" | 130° 25' 22" | 20010416 20010426 | 87 | 道路建設 |
| 箱崎遺跡32次 | 福岡市東区 箱崎3-11・15地内 | 40130 | 0116 | 33° 37' 13" | 130° 25' 25" | 20020422 20020920 | 442.5 | 道路建設 |
| 箱崎遺跡42次 | 福岡市東区 箱崎3-9 | 40130 | 0116 | 33° 37' 12" | 130° 25' 26" | 20031021 20040121 | 45.6 | 道路建設 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | | 特記事項 | |
| 箱崎遺跡25次 | 集落 | 中世 | 土壙(5)小穴(16) | | 土師器壺皿、陶磁器 (白磁、龍泉窯系青磁、 染付)擂鉢、石鍋、銅鏡 | | | |
| 箱崎遺跡32次 | 集落 | 中世 | 獨立柱建物 井戸 土坑 溝 墓葬遺構 | | 土器 陶磁器 鐵製品 石製品 | | | |
| 箱崎遺跡42次 | 集落 | 古代末 中世 | 井戸 土坑 杜穴 性格不明遺構 | | 上器 陶磁器 瓦 土製品 | | | |

はこ さき 箱 崎 25

—箱崎遺跡第25・32・42次調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第896集

2006年（平成18年）3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印刷 有限会社交信社印刷所
福岡市博多区須崎町12番7号

